

俺だけ能力を持ってない
い

スパイラル大沼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

例によって思いつきです。能力なしのオリ主が能力一家の次男としてほのぼのします。

目次

第12話
第11話
第10話
第9話
第8話
第7話
第6話
第5話
第4話
第3話
第2話
第1話

101 92 80 71 60 50 39 30 23 14 6 1

第25話
第24話
第23話
第22話
第21話
第20話
第19話
第18話
第17話
第16話
第15話
第14話
第13話

195 189 182 174 169 160 153 147 139 129 123 116 110

第38話 第37話 第36話 第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話

288 282 277 272 267 259 251 242 234 227 219 212 202

第51話 第50話 第49話 第48話 第47話 第46話 第45話 第44話 第43話 第42話 第41話 第40話 第39話

365 360 355 347 343 335 329 324 314 308 302 296 292

第64話 第63話 第62話 第61話 第60話 第59話 第58話 第57話 第56話 第55話 第54話 第53話 第52話

447 440 434 427 422 413 409 401 395 390 384 378 373

第77話 第76話 第75話 第74話 第73話 第72話 第71話 第70話 第69話 第68話 第67話 第66話 第65話

528 517 509 504 496 489 483 478 471 466 460 455 451

第 82 話

第 81 話

第 80 話

第 79 話

第 78 話



555 548 544 539 534

第1話

朝。慶と茜の部屋。慶というのは茜の双子の弟で、ぶっちやければオリ主だ。布団に包まった慶をめちやくちやゆすつてくる茜。

「慶ちゃん、起きてよ！遅刻しちゃうよ！」

言われても慶は被った布団から出ない。

「起きてるよ。寝たふりしてんだよ」

「寝たふりしてるのに返事しちゃうの!?!?」

愕然とした様子でツツコム茜。それを無視して慶は布団から出て来ない。

「ほら起きてよ！私も遅刻しちゃうでしょ!?!?」

「別に待つてる必要なんてねーぞ。先に行けよ。俺は気が向いたら行くから」

「それやられると怒られるの私なんだよ!?!?なんでか知らないけど！お願いだから起きてー！」

「うるせーな。ぶっちやけ今日の15時からゴッドフェスだから石回収に忙しいんだよ。学校行く暇なんかねーよ」

「ええっ!?!?それ超暇だよね!?!?」

「だからお前先に行け」

「あーもうっ！てか私もぶっちゃけるよ！みんなもう学校行っちゃってここにいるの私達だけなんだよ！私、一人じゃ学校行けないよ！」

そう、茜は極度の恥ずかしがり屋で一人で表を歩けない。

「……………お前いい加減慣れろよ」

「だつて監視カメラがあちこちにあるんだよ！？やだよ！」

「確かにプライバシーは全く守られてねえけども……………」

いい加減めんどくさくなつた慶は起き上がった。

「分かつたよ。今着替えるから待つてろ」

「ほんと！？ありがと」

で、自分の上のパジャマを脱ぎ捨てる。その瞬間、茜は顔を真っ赤にした。

「つて、ここで着替えるの！？私まだ部屋の中だよ！？」

「姉弟で何言つてんの」

「そ、それはそうだけどさあ……………」

「見たくなきや出て行けばいいだろ。あ、もしかして見たいんだ。茜エロイ」

「そ、そんなわけないでしょ！？わ、分かつたよ出て行くよ！」

で、着替え終わつて歯を磨いて、朝飯用のカロリーメイトを二箱持つて家を出た。あ

と5分か。

「茜。これ」

慶は自分のバイクに跨ると、ヘルメットを茜に投げた。それを危なっかしい手付きながらもなんとかキャッチする茜。で、バイクの後ろに跨った。

「しつかり掴まってるよ」

「う、うん！」

「……………背中にオツパイの感触がねーな。本当にペチャパイだなお前」

「う、うるさい！ぶっ叩くよ!!？」

「叩いたら事故るぞ」

「ひ、卑劣！」

「褒め言葉だ。行くぞ」

出発した。ちなみに二人の通う学校はバイク禁止である。茜は校則や普通に人間としてのルールは守るタイプの人種だが、毎回バイクに乗るのをねだって来る。理由は、メットで顔を隠せるからだ。

「ち、ちよつと速いよ慶！スピード違反！」

「分かつてる。だから人通りのない道を選んでんだろ」

「警察にバレなきゃいいってもんじゃないんだよ!!？」

「ちげーよ。家から学校までの行き方は約540通り。今日みたいに急いでる時に一番避けるべきものは交通事故だ。なら一番人が少なく、尚且つ最短ルートをえらぶべきだろ。そこを進んでるんだ。文句言うな」

「相変わらず頭良いね。運動も出来るし器用だし優しいし……なのになんで選挙やらないの?」

「するわけないだろ。俺だけ能力ないし、なんなら友達もないし人望もない。そんな奴が国を引っ張っていけるかよ」

「そもそもそこがおかしいよ!なんで慶ちゃんに友達が出来ないのか……」

「着いたぞ」

「はやっ!」

「じゃ、俺は帰るから」

「ダメ!慶ちゃんも来なさい!」

「やだって言ってるんだろ。じゃあな」

「もう、慶ちゃんめんどくさいなあ……えいつ」

「あ?」

気が付けば慶の体は浮いていた。飛行能力に目覚めたのかと思っただが、茜が浮かせてるのだった。

「おまつ！離せよ！」

「ダメ。すぐ逃げちやうもん」

そのまま学校に引きずられていった。

第2話

そんなわけで、学校。

「お疲れ、茜様」

「今日も大変だね。茜様」

「わざと様付けないでよ……」

お疲れの様子で茜はため息をついた。クラスメートの女子二人が、机に突っ伏す茜に声をかけたのだった。

「まあ家と学校が茜にとつては周りの目から逃れられる場所だもんね。ここにはカメラもないし」

「うん！」

と、元気良く返事をしながらも教室の隅をチラツと見た。廊下側一番後ろ。そこが慶の席だった。全力で石回収してるのか、iPhoneをメチャクチャ弄っている。

（相変わらず一人なんだなあ……）

姉として何かしてやりたいが、前に「学校で俺に話しかけたらもうバイクで送らない

から」の一言で一蹴された。

「はあ……いいのかなあ、それで」

「? 何が?」

思わず漏れた呟きに友達が反応した。

「あ、いやなんでもないよ! あははっ……」

*

放課後。

「楽しい時間ってあつという間よね……」

げんなりする茜。

「あんた以上に学園生活を満喫してる子いないと思うわ」

「だってここでは、誰も私を特別扱いしないでしょ?」

「それはそうだけど……でも今日はバイクで来たから大丈夫! ヘルメット被れば……」

ピンポンパンポン

『櫻田慶くん。職員室までお越しく下さい』

「バイクの件で呼び出されたみたいね」

「私帰れないじゃん!」

「いやその年で一人で帰れないのはどうなの?」

と、突っ込まれた時だ。

「茜、帰りましょう」

葵が教室の前の扉にあらわれた。その瞬間、群がるクラスメート。

「すごい人気だね……」

「ていうか、茜の人气がないだけなんじゃ……」

「言わないで!」

*

帰り道。葵と茜は2人並んで帰宅していた。

「お姉ちゃんすごいねえ……どこでも人気者で」

「そうかなあ?」

などと会話しながら信号を待っている時だ。後ろから「キヤアー!」と悲鳴が聞こえた。

「「えっ?」」

二人して振り返ると、サングラスに帽子にマスクの男がガツと後ろからぶつかつてきた。

「ご、ごごごめんなさい！後ろに目が付いてなくて！」

ものすごい謝罪の仕方をする茜。するとその男はチツと舌打ちすると逃げ出した。

「引つたくりよー！」

「！ お姉ちゃん！」

「うん」

すると、茜は鞆を葵に預け、能力を発動。

「待ちなさいーい！」

「チツ！」

信号を渡り、角を曲がる。それを追う茜。そして、一度頭上を追い越して、電柱に脚をつけた。

「正義は……」

そう言つて足に力を入れる。

「勝……」

「おぼっ！」

「えっ？」

が、犯人の男が慶のバイクに跳ねられた。その男が茜に突っ込み、二人は頭をぶつけ、地面に倒れた。が、それら全てをまったく無視して慶は家に向かった。

(そういうや、ジャンプ買ってねえな)

ブオオオンと音を立ててコンビニに向かった。

「茜ー！大丈夫ー？」

遅れてやってきた葵が声をかけた。

「茜！大丈夫？！」

「痛た……うん……。平気。って、犯人は？！」

「へ？茜がやつつけたんじゃないの？そこで伸びてるけど」

「え？いや私は……」

何もしてないと言おうとしたところで、報道陣に囲まれた。

「犯人逮捕おめでとうございます！」

「フライングヘッドバットで仕留めたそうですね！」

「今のお気持ちは？！」

「えっ？い、いや私は……ていうか……」

顔を真っ赤にしてテンパる茜。

「う、写さないでー！」

*

その日の夜。コンビニでジャンプを買い、ついでにワールドトリガーとかその他諸々の単行本を買って慶が帰宅した。

「ただい、まつり!?」

目の前には奏が腕を組んで殺意の波動を放ちながら仁王立ちしていた。

「おかえり」

「な、なんで怒ってるの?」

「あなた、下校中に何かしなかった?」

「何か?……あーいやしてない、はず……」

「なら来なさい!」

力付くでリビングまで連れて行かれる慶。

「あ、慶兄さん。おかえり」

「お兄ちゃん、おかえり」

「葉、ただいま。あなたのために帰ってきました」

「け、慶……。相変わらずキモいぞ。おかえり」

遙、栞、修と挨拶する。で、テレビ。

『櫻田家の三女、茜様がひったくり犯を捉えた映像です』

「? これが?」

慶が尋ねると、ギロリと睨む奏。すると、巻き戻した。

「え、なんで巻き戻せるの?」

「ビデオよ。で、この下のバイク」

「……………あ、俺だ」

「これ、見方によつてはあなたがこの男を跳ねてるようにも見えるんだけど?」

「……………」

言われて慶は落ち着いて思い出す。

「……………ああ。そういえば何かにつづかった気がしないでも……………音楽聞きながら

ゲームしながら運転してたから気付かなかったかも」

「音楽……………?ゲーム……………?」

「い、いやなんでもないです!」

「今回はたまたま茜のフライングヘッドバットに見えたから良かったけど王族が事故な

んてあつてはならないのよ?」

「言わないでカナちゃん!キスしてるように見えなくもないって友達からメール来てる

んだから！」

「もつと王族としての自覚を持ちなさい！」

茜の抗議を鮮やかにスルーして奏は叱った。

「ままま、そう怒るなよ。少しは器も大きく持てよ。デカイのは態度とオツパイだけか？」

その瞬間、奏はチャキツとバズーカを精製して構えた。

「は?！」

「ごめんなさいじょうだんです」

第3話

週末。

『テレビの前の皆さん、こんにちは！なんと今週の櫻田ファミリーニュースには、王家御兄弟全員に来て頂いております！』

司会の声が響く。親父の手回しで10人はどっかのビルの前に立っている。

「おい茜。いい加減背中に張り付くのやめろ。投げるぞ」

「だ、だつてえく……」

慶が言うも涙目で離れない茜。

『みなさま、よろしくお願ひします！国民の皆様もこ存じの通り、王族の皆様には特殊能力があります。本日はあるゲームに挑戦し、その能力を發揮してもらおうと思ひます』

言うど、全員がやる気のある顔を見せる。あ、ごめん。修と遥と慶以外な。

『そのゲームとは、危機一髪ダンディ君を救え！』

「なんだその樽にナイフ刺すゲームみたいな名前のゲーム」

思わず眩く慶。

『屋上に取り残された人形、ダンディくん。それを制限時間内に多くそれぞれのカゴに入れていただくシンプルなルールです』

『国王からも激励のメッセージを頂いております』

すると、画面に国王が映った。

『みんな、惜しみなく力を発揮し、国民の皆様に分達の事を知ってもらうために頑張つて欲しい。一番成績の悪かったものには城のトイレ掃除をしてもらう』

「えー!??!」

「お城のトイレ掃除!??!」

「んどくせつ」

光、岬、慶と声を漏らした。

『制限時間は60分』

『みなさま、準備はよろしいですか?』

で、全員が表情を変える。

『それではスタートです!』

まず前に出たのは輝だった。お得意の怪力超人を使って登り始めた。

「よし、あたしだって!」

今度は光が近くにある木に登った。そして、生命操作を使って木を成長させて屋上へ向かった。が、木の成長は屋上までだけでは止まらない。軽々と超えてしまった。

「ちよつ、降ろしてー!」

そんな様子を見ながら慶は薄く笑った。

「なあ奏」

「なによ。ていうか呼び捨てで呼ばないで」

「光を助けてやれよ」

「はあ? 嫌よ。これも大事なアピールなんだから。あの子には悪いけど、私は私の仕事をさせてもらうわ」

「おいおい、アピールするんだつたらもつと別のアピールをした方がいいんじゃないか?」

「はあ?」

「9人兄弟のバトルロワイアル、互いのアピールも混ざり合つて全員が一位を目指す中、お前は一人ピンチになつてる妹を助けるんだ。そうすりゃ誰もが自分の欲より妹のピンチを救う奏様素敵!となつて、上手くいけば葵も抜けるかもしれないぜ?」

「……………悪くないアイディアね」

掛かった! そう慶が思い、ニヤリと口を歪ませた時だ。

「でも嫌」

「な、なんでだよ!?」

「私はあなたの思い通りに事が運ぶのが一番気に食わないの」

「嫌な姉だな……」

「結構。私は私なんだから」

言うとうちはドローンみたいなのを5体ほど召喚した。そのままドローンは屋上へ向かっていく。

「じゃ、仕方ない。俺が光を助けるわ。一応、妹で心配だし」

慶はそう言うと、背中を引っぱがして、葉のところへ向かった。

「おい、葉。こつち来い来い」

「? どうしたの?」

「光を助けたいんだ。いつ落ちるか分からないし落ちたら危ないだろ? だから屋上まで行って、そこから木に飛び移りたいんだが、その近道を教えてくれないか?」

「分かった」

で、慶は葉を肩車し、マンションの中へ消えて行った。その後ろ姿を見ながら奏は口を邪悪に歪めた。

「今ね」

そう呟くと、奏はドローン四機を光救出に向かわせた。

*

屋上に慶が到着した。

「さあ栞、着いたぞ。拾つといで。悪いけど帰りは自分で戻りなよ」

「うん。肩車ありがとう」

(天使)

と、思いつつも慶は屋上に現れた修に言った。

「修」

「おう。どうした？」

「悪いんだけど一つだけ俺に出来ないか？」

「……………また奏と競うつもりか？」

「まあね」

「……………分かった。ほらこれ」

「サンキュー」

で、慶は木の方へ向かった。だが、ふとビルの下を見ると、奏がちょうど光をドロー

ン四機で下に降ろしていた。

「ありがとう！奏ちゃん！」

「ううん。競技よりもあなたの方が大事なもの。それとこれ」

さらに奏は残りの一機のドローンでぬいぐるみを一つ回収していた。それを光に渡すアフターサービスをした後、ニヤリと邪悪に笑って慶を見た。

（甘いよ。あたしのドローンがあればここから逆転は可能！光を助けて人気もぬいぐるみもいただくわ！）

だが、それに対して慶も微笑み返した。

（なっ………!??)

（計画通り………ッ!!?)

慶は未だ屋上にあるぬいぐるみを見た。そして、それらを片っ端からビルの室内へとぶち込んで行く。

「ち、ちよつとけーくん！何すんのよあんだ！」

食って掛かってきたのは岬だ。

「ちようどいい！岬、ここにある全部のぬいぐるみを室内に運べ！」

「おい！テメエどういうつもりだコラア！」

「え、えーつと怒った岬の……名前なんだっけ？まあいいや。別にお前らにデメリット

はないだろ。どーせ室内は降りるときに通るんだ。むしろ1mでも運ぶ距離が短くなるんじゃないか？」

「……それもそうか。よっしゃ！行くぜみんな！」

『おー！』

と、8人が拳を突き上げる。その頃下。奏は木に拳を叩きつけた。

「ええい、小癩な！室内だろうとドローンは入れるのよ！」

屋上の扉からドローンが5機入り込んでくる。それを見て慶は再び口を歪めた。

（バカめ！入り口にぬいぐるみを放つたのはドローンの侵入経路を一本に絞るためだ！心理的に自分から故意的に遠ざけられたぬいぐるみを取りたくなる負けず嫌いの本質、奏なら絶対にここを狙ってくるを見た！）

そんな事を考えながら慶はドローンを全て壊した。

「あー！あの野郎、一機200万円もするのよ！？」

その時だ。

『さあー！残り10秒となりました！』

アナウンスの声が響いた。慶はそれを待っていたかのように再び屋上に出て光の生やした木に飛び移り、落ちてるとしか見えない格好で降り始めた。手には一つのぬいぐるみが握られている。

「あ、あの野郎ッ……!」

ギリッと奥歯を噛み締める奏。そして、慶は地上に着地すると、自分の籠に向かってぬいぐるみを叩き込もうとした。それをさせまいと走る奏。

「あんたも道連れにしてやるわ!」

「やってみる!」

だが、その直前だ。試合終了の合図が鳴り響いた。

「……………は?」

二人して間拔けな声を出す。画面にはしばらくお待ちくださいませの文字。

『せ、制限時間前ではありませんでしたが……ゲームはここで終了とさせていただきます』

「えっ、なんそれ」

「はっ、ザマアみなさい。ラフプレーなんてするからそうなるのよ」

で、俺たちはスタジオに集められた。

『えー、トップは修様。そして最下位は奏様、茜様、慶となりました』

(なんで俺だけ呼び捨てなんだよ)

心の中でツツコミつつも堪えた。

「ち、畜生……茜のスカートが消えることさえなければ……」

「わ、私だって恥ずかしかったんだからね!」

で、司会がまた口を開いた。

『では、ここで国王選挙現時点での順位を発表します!』

「デアン!とモニターに表示された。一番下から慶、修、輝、遥、岬、光、葉まで発表された。」

『まだ公示されたばかりなので、今のところ票数に差はありません』

「な、なんで……?まだ私呼ばれてない」

「うわあーい。茜お姉ちゃんすごい」

「やめてよ慶ちゃん!」

『続きまして、第3位は……茜様です!』

「デアン!とでてきた。」

「ふええ〜良かったあ〜……」

「良かったんだ……」

「……はっ!3位!?全然良くないよ!」

ガバツと起き上がる茜だった。ちなみに1位葵、2位奏だった。

第4話

突然だが、慶と奏は仲が悪い。いや悪いというか……性格が合わない。奏は何事も基本的にキツチリしてるタイプだし、慶は基本全部が全部ルーズだ。だから合わないというのもある。だが、一番の理由は別にある。

その事を知らない茜は、今とても気まずかった。その2人と一緒に登校しているからだ。

「か、カナちゃん……私達、どうしてこんなに早く登校してるんだっけ……？」

「朝、委員会があるからでしょう？」

「そ、そうだったねー。あははっ……。け、けーちゃんは？」

「あ？親父にバイクの鍵没収されたから仕方なくだ」

「や、だからなんでこの時間？」

「そうよ。いつも学校に行くのすら渋るくせにどうしていつもより早い時間にいるのかしら？もしかしてシスコン？茜のこと大好きなの？」

「ちげーよカスは黙って死んでろ。俺はコンピニで今日発売のONE PIECE買っ

てくんだよ」

「あら、カスはどっちかしら？この前はラフプレーした癖にビリになってた人を本当のカスというんじゃないの？」

「外面をフェイズシフト装甲並に固めてるカスには言われたかねえ」

「は？」

「あ？」

「ふ、二人とも喧嘩はやめてよお。周りの人が見てるよ……」

茜が涙目になると、奏は「チツ」と舌打ちし、慶はペツと唾を吐き捨ててお互いに引き下がった。

「ていうか茜。手エ離せ。歩きずらい」

「えくだって人の目が……」

「甘えるな。お前今年で16だろ。成長しろ」

「成長しろ？それは自分に言ってるのかしら？」

「黙れ名前の割に楽器一つできないゴミが」

「あら、名前と自分の特技になんの因果関係があるのかしら？」

「両親の想いがまったく人生に届いてないっつってんだハゲ」

「は？」

「あ?」

「だからやめてってばあ!……まったく、どうして喧嘩ばかりするのかなあ……」
なんて話しながら登校する。

「じゃ、俺はそのコンビニで漫画買ってくから。茜、奏のこと頼むぞ」
「どういう意味かしら?」

「お前みたいなお姉ちゃん(笑) よろしくと言ったんだよ。日本語くらい分かれ
そのまま慶はコンビニへ向かった。

*

「慶と奏?」

学校。屋上で茜が修に聞いた。

「うん。どうしてもいつも喧嘩ばかりするのかなーって……」
「そりやお前あれだ。奏が慶に失望してるからだ」

「失望?」

「昔、奏が慶のことかなり気に入ってたのは覚えてるか?」

「え? うん」

「その時の慶は自分に能力がないのが分かってたから、それだけ頑張ってただろ？ あいつは基本的に今はなんでもできるし、一年の時なんて剣道で全国行ったからな」

「そうだね。あの時のけーちゃんはかつこよかったなー」

「でも、弟や妹が出来ていくにつれてどんどん能力も出てくる。結局、あいつがどんなに努力したところでやっぱ注目されるのは俺たちの能力だったんだ。でもそれでも頑張つて、中3最後の大会」

「ああ……去年、足の筋痛めて……」

「そう。それからあいつは努力をしなくなつた。ゲームやアニメに逃げて、元々剣道だけじゃなく、他のことも努力してたあいつだから、勉強だつて授業なんか出なくても出来た。だから本人は問題ないと自分では思ってたんだけど、奏はそれを許さなかつた」

「それで、仲悪くなつちやつたんだ……」

「最初の頃は奏も俺によく相談してきたんだけどさ、向こうが頭良いだけあつて中々にムカつく返答をされたらしく、こうなつてる」

「ふーん……」

「まあ、どつちが悪いとかじゃないから困るんだよな。お前も変に首突つ込んで疎まれないようにな」

「はーいっ」

そう釘を刺された。にも関わらず、茜はあの二人と一緒に帰ろうか思っていた。

*

放課後。再び並んで歩く奏、茜、慶に追加して修。

(な、なんで俺まで……………)

嫌な汗をものっせい流す修だった。

「なあ修」

「ど、どうした？」

「確か読みたがってたよな？ ONE PIECE 最新巻」

「ああ。そうだけど…………」

「読む？今朝買ったんだ」

「おお、さんきゅ」

「けっ、人を物で釣るなんて最低ね…………」

「外面で釣ろうとしてる女に言われたかねえんだよ」

「は？！」

「あ？」

(ほら見ろおおおお！早速喧嘩始まってんじゃねえか！自分がこの空気に耐えられないからって人を巻き込む奴があるか！)

そんな事を考えながら茜を睨む修。だが、意外にも茜は真顔だった。いや、ていうかカメラを避けようとしててそれどころじゃなかったようだ。

(こいつ、何も考えてないな……)

ハア、とため息をつく修。だが、修も別に何かしてやろうとか考えてるわけではない。このまま何事もなく帰ればいい。そう思っていた時だ。

(そういえば今週の買い物係茜だったな)

昨日、泣き喚いてたのを思い出した。

「茜、お前買い物係じゃなかったか？」

「……………あつ！そ、そーだった！」

「今のうちに行つたほうが楽なんじゃないのか？」

「お願い！みんな手伝つてえ！」

「嫌」

「断る」

「声をそろえて!?？」

揃つたのは奏と慶だった。

「お願いー！一人で買い物はいやー！タダでさえ買い物嫌なのにー！」

「うるせえええ！大体、なんで高校生にもなつて一人で買い物……あ、いやいいよ。やっぱ行くわ」

「これまた綺麗な手のひら返し!!?」

「ポテチ欲しいから」

「子供か」

言つたのは奏。

「黙れババア」

「ば、ババア!!? 私はまだ17よ！」

「まあお前は帰つてろ。老害が買い物についてきたつてメリツトがない。疲れてるなら家でマッサージチェアに揺られながら仮眠のついでに永眠でも取つてろ」

「優しさに見せかけた暴言やめなさいよ！」

「とにかく茜、行こうぜ」

「ポテチは買わないけどね」

「俺も帰るわ」

「買ってあげるから！」

てなわけで、スーパーに向かった。

第5話

そんなこんなで、スーパー。

「えーつと……何買えばいいんだっけ？」

「そういうのは料理当番が何を作るかによるんじゃないの？」

「ああ、そうだね確かに」

慶の台詞にポンつと手を打つ茜。ちなみに修は瞬間移動で逃げた。

「今週の料理当番は？」

「知らね」

「あんたでしょ。そのくらい覚えときなさいよ鳥頭」

「よーし今日は焼肉だ。その牛乳女を調理してやる」

「スーパーの中でまで喧嘩やめてよー！」

慶と奏が目で火花を散らしていると、頭を抱えて声を上げる茜。その時だ。

「なあ、あれ茜様じゃね？」

「ほんとだ。奏様もいるぞ」

「うおお、すげえ……」

などと周りから声上がる。その度に「えっ?」「えっ?」とテンパる茜。その時だ。奏が急に笑顔になった。

「皆さん、こんにちは。いつも見守ってくれてありがとうございます」

「うわっ……」

慶が思わずドン引きした声を上げるほどの外面だった。

「誰だこいつ……」

「そ、そんなことより周りの人なんとかしてよ……、このままじゃ……」

「この前、O p tだった俺にどうしろと?一部の国民には俺は王家とすら思われてねんだぞ」

「ぜ、ゼロ?ぷふっ……」

今のはイラつときたため、慶は茜の背中を人前にドンつと押した。

「ふえ……う?ひやあつ!」

ドサツと転んでしまう茜。

「いてて……な、何するの慶!?……つて、ひやああ!見ないでえ!」

恥ずかしがる茜、ここぞとばかりに愛想よく振舞う奏。いつの間にか慶は茜から財布をスツてポテチを買いに行っていた。

*

「うう……酷いよけーちゃん……」

昼間なだけあつて、ほとんど人のいないレジに並んでいる途中、涙目で愚痴る茜。

「うるせーよ。それより買う物はそれで残り全部なんだろうな」

「うん。間違いない……はず」

「そこは言い切りなさいよ」

奏が株をチエックしながら呆れて言った時だ。奏の後ろに並んでいる男が、奏が肩から掛けている鞆の中に手を突っ込んでる男がいた。

「オイ」

「っ!?」

「けーちゃん!?」

慶が声をかけると慌てて鞆から手を抜き、そっぽを向く男だが、慶はそいつの胸ぐらを掴んだ。

「テメエ、今何してやがった」

「やめなさい、慶!」

奏が言うが慶は言うことを聞かない。

「何もしていない」

「してねーことねーだろ。明らかに手エ鞄に突っ込んでたよな」

慶がそう言うのと、辺りは「何？喧嘩？」「また慶が？」「スリ？」などと騒然とする。

「してない。君の見間違いだ」

「……………なあるほどお、王家の中で一番信用のない俺にあえて見つかるようにスリをしたか。そうすれば見つからなければ金が手に入るし、見つかったとしても相手が俺なら逃げる口実はいくらでも作れる。いやあ、悪くない考えだ」

「……………」

「だが、方法が甘い。俺ならまずチャックで閉められている鞄は狙わないし、人混みに紛れてケツポケットの財布を盗る」

「君が何を言ってるのかサツパリ分からない。俺はスリなんてしていない。第一、証拠はあるのか？」

「ああ。悪いがある」

「なに？」

言うた慶は携帯を取り出した。その画面には思いつきり鞄の中に男が手を突っ込んでる写真が写っていた。

「ん なっ……っ?」

「悪いが、お前がしらばっくれることも俺は想定済みだ。さらに、証拠はあそこの監視カメラだ。レジを映さない監視カメラがあるかってんだ。いいか、俺の家族を狙ってスリをするなら20手以上は先を読んでおけよ」

「グツ……クソツ!!?」

男は逃げようと出口に向かって走り出した。

「逃がすかよ!」

後を追う慶。

「あのバカ!能力もない癖に……!茜、お会計お願い!」

「ええ!!?一人にしないで!」

さらにその後を奏が追った。で、犯人はスーパーの外を出た。

「チイツ!」

閉まる自動ドア。だが、慶がすぐに到着し開いた。その時だ。真横から振り下ろされるナイフ。

「ツツ!!?」

なんとか躲すが、頬を掠めた。

「慶!」

「馬鹿、来るな奏！」

店の出入り口にいる奏に言い放った瞬間、ナイフを振り回してくる犯人。その動きをよく見て躲す慶。下手に手を出さずに隙を伺っていた。

(野郎……思つたより喧嘩慣れしてやがんな……めんどくせえ！)

と、思つてる通りめんどくさくなつた。慶は、次の一撃を左手のひらに突き刺させた。

「っ!?？」

「捕まえた」

手のひらにナイフが貫通した状態で敵の拳を握る。そのまま顔面に拳を叩き込んだ。

「ぐあっ……………」

「今のは奏の鞆の恨みだ」

そして、そのまま裏拳を顔面に放ち、相手はヨロヨロと後ろに飛ばされる。

「今のは俺の左手の分」

そして、相手の後頭部を右手で掴むと、顔面から地面に思いつき叩き付けた。

「これは、演出の分だ」

「さい、このは……いらね、え……だろ……」

その捨て台詞と共に気絶する男だった。

「っふう……あー痛え」

左手に刺さってるナイフを抜く。その瞬間、ブシューツと音を立てて血が噴き出した。

「オイオイ、血イ出過ぎじゃね？」

「慶！」

声がして振り返ると、買い物袋を持ったまま走ってくる茜と奏が走ってきた。

「おう。鞆の中の物は無事か？」

と、聞く慶を無視して奏は飛び付いて、抱き締めた。

「うおっ！」

「バカ！無茶しないで！」

「ちよっ……奏お姉様!? 顔に胸が……！」

「いいから黙って！」

「は、はい！」

顔を真つ赤にする慶。すると、茜が慶の左手を摘み上げた。

「うわあ……穴空いてる……。カナちゃん、消毒液と包帯出せる？」

「任せて」

言われて出す奏。そして、消毒液を慶の左手の上に持って行った。

「染みるわよ」

「いっただいだだだ！待っ……染みッ……！」

「我慢して！」

「無理無理無理無理！泣きそう！」

「てか、けーちゃん泣いてるよ？」

「嘘？マジ？」

で、包帯でキュツと血を止めるように結んだ。

「……………つたくもう、能力もないくせして出しゃばるんだから……」

「別に出しゃばったわけじゃねーよ。ただ、その、なに……お前は能力的に金ないと困るんだろ？」

慶が言うのと、感動し涙を流しそうになる奏と茜。だが、

「だから借り作つっとお礼の一割くらい貰うのも悪くねえかなって思っ……」

と、続いた瞬間、二人は半眼になった。そして、奏が言った。

「へえ、つてことは何？その謝礼金のためにそんな怪我をしたと？」

「ああ。お前の1割はデカそうだからな」

「なら、それ召喚したお金でチャラよ」

「そりゃねえだろ！てかこんなん5000円くらいだろ!? 財布を守ってやったんだからせめて5000円くらいいいだろ！」

「嫌よ！せっかく私のせいであって責任感じて心配したつてのに損したわ！」

「え、なに心配してくれてたの？あれだけ今朝悪口言ってきた癖に？なに、ツンデレ？」
「違うわよ！あーあつたまきた！今日の晩御飯はあんたのハンバーグだけタバスコ大量にぶち撒げるから！」

「いや当番今日俺だし！」

というやり取りはしばらく平行線を辿ったが、茜はニコニコしながら見守った。

第6話

翌日。慶がニュースに出ていた。慶VS強盗を誰かが携帯で撮影していたらしく、それがテレビに丸々放映されていた。

『櫻田家次男、慶様見直される！スリの犯人を撃破！』

よくもまあこれだけ失礼なタイトルをテレビ放映させられるもんだ、と思わずにはいられない慶だった。

で、今は登校中。

「良かったじゃない。これで慶の人気も上がるんじゃない？」

ニヤニヤしながら奏が行ってきた。

「冗談じゃねえよ。今まで何のために校則とか平気で破ってきたと思ってるんだ」

「……………自分の人気を下げるためにやってたの？」

「当たり前だろ。そもそも、ニート志望の俺が王様になったらこの国どうなるよ」

「崩壊するわね」

「分かってんならお前の演説で俺の悪口メチャクチャ言ってくれよ」

「嫌よ。私の人気の下がるでしょ」

なんて話して二人の後ろを歩くのは修、茜、葵の三人だ。が、例によつて茜は隠れている。

「なんか仲良くなつたね。あの2人」

葵が微笑みながら言った。

「そーだな。喧嘩は相変わらずだが、昔に戻つた感じもあるな」

「懐かしいわ。奏が昔言つてたの覚えてる？けーちゃんのお嫁さんになるー！つて」

「なんだ、知らないのか？今も寝言で言つ……」

その瞬間、修の顔面に拳がめり込んだ。

「嘘を言うな……」

「えっ……や、本当に……」

「じゃあ余計なこと言うな」

奏の拳だった。

*

一年棟に差し掛かる扉。

「じゃ、先行けよ茜」

慶の提案で、茜と慶は別々に教室に入る。と、いうのも、クラスに友達のない慶とクラス委員の茜が一緒にいると茜の立場が悪くなる、というどこかのラノベで読んだようなアドバイスを慶がしたからだ。

だが、

「けーちゃん。私はあまり気にしてないよ？ていうか、クラスの子達も気にしないと思うよ？」

「ダメだ。俺ごごときのためにお前に迷惑かけられるか」

だが、納得してない顔の茜。すると、茜が慶の腕を引っ張った。

「お、おいバカネ！」

「茜よ！いいから一緒に行くよ！」

「お前なあ……」

（ていうか、何よりファンクラブの視線がめんどくせんだよな……）

で、教室に到着。すると、

「あ、茜来た！」

「慶くんも！」

「見たよーニュース！」

「映画みたいだった！」

などとわらわら寄ってくるクラスメート。

「えっ？えっ？」

「何か格闘技でもやってるの？」

「い、いや……その、剣道とか、やってた、けど……」

ちなみに慶はこの国の軍隊の訓練を自分から望んで一ヶ月だけ受けたことがある。感想は「もう二度とやらない」ではあったが、かなり優秀だったららしい。

「剣道!?」

「そういえば昔、ニュースで見た！」

「俺も！櫻田家の人が剣道で全国出たって！」

「スゲエじゃん！そりやつええわ！」

そこが限界だった。慶はその場から逃げ出した。

(けーちゃんも人見知りだもんね……。私ほどじゃないけど) ほっこりする茜だった。

*

その日の帰り道。慶は一人で帰っていた。その時だ。

「櫻田くんのが、好きだから！」

面白そうな台詞が聞こえ、携帯を構えてその方角へ向かった。そして、どつかの路地裏。慶は撮影を開始した。

「すまん佐藤……。佐藤の気持ちは本当に嬉しい。できることなら俺も……。だが、今は選挙に専念したいんだ。奏を王様にさせないために妨害工作で忙しいんだ！」

「……なら、待っててもいいですか？」

「え？」

「選挙が終わるまで待っていていいですか？」

「佐藤……少なくとも二年は先のことだぞ？ そんなに待たせるわけには……」

「私は全然平気です！」

「わかった！ 約束しよう！ 必ずや佐藤の想いには応える！」

「は、はい！」

と、見事なラブコメをやっていた。だが、

(なんで茜もいるの……)

と、思わずにはいられなかった。

(つと、そんなことよりこの動画、岬あたりに見せたら面白そうだな)
そんな事を考えながら帰宅した。無論、家で修に殴られた。

*

家。慶は岬とポーカーをやっている。金欠なので金を賭けているが、点数の数え方知らないから100円賭けて、みたいな。

「……………」

「んっ…………くう……………」

明らかに慶がボコボコにしていた。

「勝負でいいのか?」

「いいわよ!」

フラッシュと2ペア。

「つはあー!また負けたあ!」

「そりやそうだろ。ポーカーフェイスの欠片もねーもん」

冷静に突っ込む慶。

「うるさいなあ!逆にけーちゃんは表情動かなさ過ぎなんだよ!」

「そうしなきや勝てないからな」

「ゲームごときで何を怒ってるんだか……」

ボソツと、ボソツと口にした遙の何気ない一言がキツカケだった。

「オイ、遙」

慶の声にビクツとする遙。

「お前は今、言つてはならない事を言つたな……」

「な、何さ」

「ゲーム如きだと？」

「そうだよ。大体、僕にトランプゲームで勝つのは無理だよ。能力的にね」

「いいだろう。お前を今からトランプ勝負でボコボコにしてやる」

「……………へえ、言つてくれるね。負けたら？」

「なんでも言うこと聞いてやるよ。ただし、それはお前も同じだ」

「上等！」

で、やるのは大富豪だが、二人でやっても手札がバレるだけなので、トランプをランダムに27枚外した。

「ルールはスペ3、7渡し、8切り、10捨て、11バックに革命、縛り。それでいいか？」

「構わないよ」

ディーラーは岬。カードが配り終えられ、二つの束が出来た。遥は早速能力を発動し、右側の束を手にした。

（こつちのカードなら勝つ確率60%。ふっ……ゲームなら僕に勝てると思ったんだろ
うけどね兄さん、物事にはジャンルというものがあるんだよ。それを教えてやろう！）
そして、手札を見る。

（3が2枚、4が1枚、7が2枚、8が2枚、Qが1枚、Aと2が2枚ずつ。ジョーカー
1枚。勝てる！）

「スペ3は僕が持つてる。僕から行くよ」

「へーへーどうぞ」

そして、遥は早速能力を使い、Qを出した。

「……………ほい、K」

慶はすかさずKを出した。だが、能力を使ってさらにAを出す遥。

「パスだ」

カードが流れ、さらに能力を使って遥はカードを出す。

「8切り2枚」

当然流れ、遥は能力を使ってさらに7を2枚出した。

「7渡しだ。ほれっ」

渡したのは3を2枚。

(これで向こうが何を出そうと2を2枚かA+ジョーカーで勝てる。すでに勝利の方程式は出来ているよ兄さん！)

すると、慶は口を開いた。

「随分と能力を連発してるなあ、遥」

「そうだねえ。でも、まさか反則なんて言わないよね？」

「ああ。ほら、イレブンバック」

「パス」

(チイ、僕の手元に10以下で尚且つ、2枚あるカードはない。でも問題ない。向こうがどう来たって、僕には2とジョーカーが……！)

「いやー。7渡し2枚で3を2枚もくれるなんて、ほんと素直になったもんだ」

言いながら慶が出したのは3が4枚、つまり革命だ。

「んなあッ!!?」

「お前、能力を使って手札の束を選んだら? だからそっちに強いカードがあつて、こつちに弱いカードが入ってるのは大体予測できた」

「ッ……………!!?」

「出さないのか？」

分かってる事を聞く慶。悔し紛れに「パス……」と、遥が言うと、慶はさらにカードを2枚出す。

「10捨てた。これで6とKをすてる」

「グッ……！」

慶のカードは残り4枚。

(だ、大丈夫だ。僕にはまだジョーカーがある。向こうはスペ3を捨ててるし、問題はない……)

と、思っていたのだが、

「あー悪い。終わりだわ」

慶が言いながら出したのは10が2枚だった。

「ほい、これで終わり」

慶は10捨ててで残りの手札を捨てた。

「んなっ……ぼ、僕が………負けた……」

「そりやそうだ。お前は能力によって常に最善の手しか打たない。お陰でどこで崩せばいいか計算しやすかったぜ。ありがとう」

「ンギッ………!!？」

「プフッ」

思わず嘖き出す岬だったが、遙に睨まれて萎縮する。

「さて、なんでも言うことを聞くんだったな……」

慶がニヤリと邪悪に笑うと、嫌な汗を流す遙。退路はいつの間にか岬によつて断たれていた。

「さて、お前がこれからすべきことは……」

*

翌日。登校中。茜が慶に聞いてきた。

「ねえ、けーちゃん。昨日、遙が私の枕の匂いを嗅いでたんだけど……どうしてあげればよかったのかな」

「慰めてあげれば良かったと思うよ」

第7話

当番のくじ。櫻田家では年長組の五人がクジを引いて決める。クジの内容は掃除、洗濯、料理、買い物、そして休みの五つだ。で、全員が引いた。

「買い物おおおおお!!?」

雄叫びを上げて頭を抱えるのは茜だった。その様子を見ながら慶は部屋に戻る。手元に握られている札には料理の二文字。基本、慶は面倒だからサボるのが自分のスタイル。その慶の肩を葵が掴んだ。

「サボりはダメよ?」

「……………ういっす」

なんてやってると、光が茜に言った。

「あたしカレー食べたいつ! なんなら一緒に行つてあげるから!」

「出かけたくないって言ってるじゃんく…宅配ピザじゃダメ?」

「あかねちゃん! そんなにカレーが嫌なの!?」

「カメラが嫌なんだってば！」

「この前全国に自分のパンツ晒しといて何言ってるんだよ」

慶のいうこの前、とはあのぬいぐるみの時だろう。慶と奏が争ってる時に途中で競技が終わってしまったのは、茜が遙にケツを触られ、動揺して能力を誤作動し、輝に突っ込んだ所を修が瞬間移動で助けたのだが、間違えて茜のスカートごと移動してしまい、パンツを全国に晒されたらしい。

「言わないで！」

なんて話していると、奏が口を挟んだ。

「あんた達って選挙活動する気ゼロよね」

「まあな。俺は将来は王様になったやつに養われるつもりだ」

「どうでもいいけど、私が王様になっても養わないからね」

「嘘っ!?」

「ていうかあたしはやる気あるもん！」

光がグイツと会話に入る。

「光じゃ相手にならないの」

「そんなことないよ。光だって頑張ってるよね」

「いや頑張っではないかないかも」

「フオローした私の為にも頑張って!!?」

茜が絶望的な声を出しながらも光は無視して言った。

「大丈夫! いざとなったらあたしの能力で票集めなんて楽勝だもん!」

「国民にはあんたが10歳ってバレてるんだから意味ないじゃない。それも変化するのは外見だけだし。見た目で人を引きつけようなんてダメよ」

そう言う奏は鏡を見ながら前髪を弄っている。

「自分だつて外見めっちゃめっちゃ気にしてるじゃん!」

で、光は何を思ったか、胸を張る。

「いいもん。将来はあたしの方がおっぱい大きくなるし!!?」

「はあ? おっぱいは形が大事なの」

「大きさだよ!!? 修ちゃんが言ってた!!?」

「言つてねえ! 感度だ……」

「けーちゃんはどう思う!!? おっぱい!!?」

「お前らは何も分かつてない。いいか? オツパイは形でも大きさでもない……」

「はあ?」

言いながら慶は手だけで葉を呼んだ。すると、とてと寄ってくる葉。そして、慶の膝の上に乗せた。

「見ろ！このオツパイを！」

「……………小さい子供オツパイじゃん」

「光！お前、なんつも分かってねえな！形だ大きさはじゃない、オツパイは……………可愛い子のオツパイがベストなんだっ！」

言いながら慶は栞を抱き締める。

「慶お兄様……………痛い……………」

「お？そうか？悪いな我が天使よ。今日の飯なにがいい？栞の好きなもの作っちゃうぞー？」

「じゃあ……………唐揚げっ！」

「任せろ。栞のために作ってやるからな。オイ栞以外のその他大勢、貴様らの飯はこの栞様のついでだ。ありがたく思え」

「シスコン……………」

「気持ち悪い……………」

「死ねばいいのに……………」

「おい最後の奏。言い過ぎだろ」

*

なんやかんやで、茜と光は買い物へ行った。

「さて栞。お前なんでそんなに可愛いのか？天使なの？もう結婚しちゃおうぜ、な？」
「ちよつと、気持ち悪いわよ本気で」

奏に止められる慶。

「なんだよ。別にいいだろ。可愛いんだから。なあ栞？」

「ちよつと……怖い……」

「えっ」

「ほら見なさい」

「奏、言葉に気を付けろ。うっかり自殺するぞ」

「だから死ねばいいじゃない」

「……お前、なんか怒ってる？」

「別に」

「いや怒ってるだろ……」

「別に」

なんなんだ……と、眉をひそめていると、ポンつと肩に手を置かれた。

「修……」

「大丈夫。お前は悪くない」

「ならいいんだが……」

「それより、今週のジャンプ貸してくれ」

「おう」

そんな事を話しながら自室に向かった。

*

「ただいまー」

帰ってきた。が、茜が小さくて光が大きい。

「おう、待ってたぜ」

「な、なんで?!?もしかして私に会いたかったとか……」

「ようやく栞さんに美味しい唐揚げを作ってやれるからな」

盛大な勘違いに顔を真っ赤にする茜を捨て置いて、慶は聞いた。

「つーか、買い物袋は?」

「ていうか突っ込めよ?!?なんかお前らサイズ違くない?!?」

修が遅れてツツコム。

「何々!? なんかもあったの!?? 何この子どこで捕まえたの!??」

岬がハプニングの匂いを嗅ぎつけ、ちっこい茜を抱き締めて誘拐した。

「猫を助けるためにね。で、自分が大きくなっただけど服がアレで……それで茜ちゃんを小さくして服を取り替えたの」

そう説明する光は猫を抱いている。

「……なるほど。で、さつきから気になってるんだが……慶。何してんの?」
「えっ?」

修の視線の先では、慶が奏を盾にして隠れていた。

「な、なに……どしたの?」

光が聞いた。

「知らないの? 慶って猫ダメなのよ」

「嘘おツ!??」

修と光が声をそろえて突っ込んだ。

「はあ!?? お、おまつ……ナイフ持ってるスリ男は倒せんに猫はダメなの!??」

「なんでよ! どういうこと!??」

と、問い詰める二人に奏は冷静に答えた。

「実はね、小さい時に私と慶はよく一緒に遊んでただけど、その時に猫が近寄ってき

て、慶がたまたま持ってた煮干しをあげようとしたのよね。そしたら、噛まれて、その時の猫の歯が思いの外深く刺さって……」

「すごく痛かったんだぞ！血い止まらなくて！」

(可愛い)

(可愛い)

(可愛い)

ほっこりする光と修と奏。

「だから早く捨ててこいよ！そんな人類壊滅兵器！」

「ダメだよ！可哀想じゃん！」

「俺の方が可哀想だろ！」

「それは頭だけでしょ!!？」

「どおおういう意味だコラアっ!!？」

「うるさい。耳元で叫ばないで」

ペシッと慶の額を叩く奏。

「葉、ちよつときてくれる？」

言われて来る葉。

「あの猫の心を読んでくれる？」

言われて能力を発動した。

「『……………木の上から助けてもらい、この人間なら信用しても構わないと思ったのだが、その中にまさかこれほどまでに器の小さなものがいたとは、王族もたかが知れたものだな』」

「んだとこのクソ猫がコラアツ!!?」

「にゃー」

「ごめんなさい……………怒らないで…………」

「『弱っ!!?』』」

修、光、奏、葉が思わず声を上げる。すると、猫が言った。それを、通訳する葉。

「『なんだ、大したものではないようだ。ならば、力付くで貴様の意見を捻じ曲げてやろう…………』」

「ご、ごめんなさい!わかりました!ここに住んでくださいお願いします!」

「『分かればいい』」

そのまま猫はのっしのっしと家の中へ消えて行った。

「……………奏」

「何?」

「今日は一緒に寝てください」

「仕方ないわね……」

第8話

体育の授業。男子はサッカー、女子もサッカー。ただグラウンドが違った。すると、女子の方から上がる歓声。

「きゃー！慶くんすごーいー！」

今までは友達がいなかったの、体育の授業中はパスはされないし、むしろ少し離れた場所でパズドラをやっていたのだが、あのスリ犯捕獲以来、よくパスが来るようになった。

結果、サッカー部の中でスタメンとは言わないが、ベンチ入りしてる奴と同じくらい強かった。

「櫻田！こっちー！」

言われて完璧なパスを通す。パスを貰ったそいつは見事なドリブルでデュフェンスを躲すと、別の奴にパスを出し、そいつがシュートを放った。

「っしやー！」

「ナイス！田中！」

まあすつげえ活躍してるかと言われたらそうでもない。まずまずだ。

「ほーんと、やれば出来るのがすごいなあ……」

それを見ながら茜が声を漏らす。

「？ そうなの？」

友達の鮎ヶ瀬花蓮が聞いた。

「うん。成績優秀スポーツ万能、残念なのは性格だけなんだから」

「性格残念って……姉が言っちゃうんだ……」

「この前なんて猫に泣かされそうになってカナちゃんと一緒に寝……」

と、言いかけた茜の顔面にシユートが直撃した。慶が当てたのだ。プレイ中に。撤回

しよう、ベンチ入りどころか即戦力レベルだった。

*

学年集会。

「と、いうわけで、町内清掃活動をやります」

と、いうわけだった。が、慶にとってはどーせサボるからまったく関係ない。学年集

会話を片っ端から無視して、パズドラをしていた。

*

教室。

「な、なあ。櫻田くん。ちよつといいか？」

急に声をかけられた。

「え？な、なんですか……てか誰ですか？」

「福品だよ。一応同じクラスなんだけど……」

「そ、そう……な、なに？」

「その、今度の町内清掃活動なんだが……校内に変えてもらえるように君のお姉さんに頼んでもらえないかな？」

「な、なんで？」

「い、いやだつてさ……茜様がほら、恥ずかしがるじゃないか……可哀想だと思わないか？」

「断る」

「な、なんで!?!？」

「可哀想だと思わないからだ。それに、俺が仮にふ、ふく……福岡くん？の意見に賛同しても大した変化にはならないよ。俺は王家の中でも特に人気がない。何より、奏と俺は仲悪いから」

「そ、そつか……そだね。悪かった」

そのまま福品は去っていった。

*

そんなこんなで、結局は町内清掃となった。福品と茜がなぜかクラス全員と話している中、慶は当然のようにサボった。監視カメラを見事に躲し、ゲーセンに到着。

「あの、すいません」

店員に声をかけた。

「け、慶様!? 何ですか?」

「ゴミ箱って何処ですか?」

「そこにありますけど……」

「ゴミ、少しだけでももらえます?」

「構いませんが……何に使うんですか?」

「隠蔽工作」

「は?」

そう言うのと慶はテキトーな数だけの空き缶とその他燃えるゴミを回収した。

「ありがとうございます」

お礼だけ言つて、そのゴミ袋を手に持ち、いつもやつてる音ゲーを始めた。

*

「また買い物お!!?」

ガビーン!と声を上げる茜。

「なんでまた私なのよお……もうやだあ……」

「くじ運悪過ぎ」

言いながら慶は休みのカードを葵の持っている箱にしまう。

「じゃ、茜。こういうのはどうだ?」

「?」

「2000円で買い物係を変わってやる」

「はあ!!?高いよ!絶対やだ!」

「ならこのごまんといる国民の皆様は貴様の姿を晒すがいい小娘」

イラつとした茜は半眼になり言った。

「ボルシチ、集合」

「待つてくくださいお願いします!!?俺が悪かった!言いすぎたからやめて下さい!!?」

「なー」

「だからごめんつてば!本当にやめて!」

「いや〜いい弱点をもらったねえ。あ、そうだ。いつそのこと買い物今日は私と変わり

なさいよ」

「はあ!!?ふざけんな!」

「ボルシチ……」

「なんなりとお申し付けくださいお姉さま」

「うむ、よろしい……」

と、言いかけた茜の頭をコツンと叩く葵。

「コラ茜。良くないわよそういうの」

「じ、じよーだんだよお姉ちゃん……。さて、仕方ない。行きますかあ……」

と、茜が涙目で立ち上がった時だ。

「葵姉様!僕も当番やらせてください!」

「輝?どうしたのよ」

「僕は大切なものを守るために……もつともつと強くならなくちやいけないんだ……そのためには、試練が必要なんだ!」

すると、修が突然声をかけた。

「気に入った!いいだろう、任せる!」

「なんで修ちゃんが許可してるのよ……」

「まあ待てよ輝」

そう言つて立ち上がったのは慶だ。

「どうせ強くなりたいなら買物だけなんかじゃ中途半端だと思わないか?」

「むっ、確かに……」

「と、いうわけでこれからは炊事洗濯家事全般こなせ」

「ええっ!?」

「慶、やめなさい」

今度は慶が葵に怒られた。

うおおお!と、1人燃えている輝に葉が声をかけた。

「わたしもいく」

「葉、これは試練なん……」

「絶対にダメだ!!? 栞が輝と二人で買物、だと……!!? ふざけるな! そんな暴挙は俺が絶対に許さん!!? そんなことをするなら……俺は世界を滅ぼす!!?」

「落ち着け」

言いながら修は慶を二階に瞬間移動させた。で、改めて輝は栞に言った。

「栞、これは試練なんだ。どんな危険が待ち受けているかわからないんだぞ……」

「……………いくつ」

「栞……。栞は本当に甘えん坊だな……わかった。絶対に僕から離れるんじゃないぞ!」

「待て! そんな、俺は……許さない!」

と、戻ってきた慶を修はまた瞬間移動させる。

「じゃ、行つてきまーす!」

出発する2人。すると、慶はリビングに戻ってきて、なんか食ってる光に言った。

「光……ちよつと、いいか……」

「ふえ? な、なに……?」

「手伝え」

*

そんなわけで、小さくなった慶と大きくなった光でストーキング。

「世の中の国民……葉に何かしてみろよ……？全員殺してやるからな……」

言いながら慶は拳銃を懐に忍ばせている。

「けーちゃん、その拳銃どうしたの？」

「前に一ヶ月だけ軍の訓練受けてた時にもらった。こいつで葉に危害を加えようとする

ゴミは殺す」

「……………」

「なんだよ」

「なんか、戦争ごっこしてる小学生みたいで可愛いなあーって」

「お前を撃つぞ」

なんてやってるときだ。目の前でワンワン！と犬の声が出た。

「ああつ！？ぶつ殺すぞ駄犬……ッ！！？」

「やめてよバレちゃうでしょ！？拳銃しまつて！（小声）」

なんてやってる間に、葉が能力で対話して通り過ぎた。

「ほ、ほら。輝はともかく葉なら自分の力でなんとかするから大丈夫だよ。だから……」

「追跡するぞ」

「む、無駄にプロっぽい動き!!?」

そのまま二人は尾行した。すると、ようやくスーパーに到着した。

「なんとか無事着いたねーけーちや……あれ、けーちやん?」

「光!あれ買って!ガンダムのガチャガチャ!」

「あんたは子供か!自分で買いなさいよ!」

*

そんなこんなで、ようやく買い物も終わって帰宅中。

「だから言ったでしょ?そんなに心配しなくても平気って……」

「バカ、アホ、カス、死ね。任務は家に帰るまでだ」

「言い過ぎじゃない!!?」

その時だ。また犬の鳴き声が出た。

「!!?」

慶と光が同時に前を見ると、さっきとは別の犬が立ち塞がっていた。

「な、なんだお前!あ、あっち行け!」

輝が怯えながらも追い払おうとするが、犬は退かない。

「そうだな……あっちの世界へ逝かせてやろう……」

「だから拳銃はしまいなさい！………だいじよぶだよ、葉の能力を使えば……」

と、光が言うように能力を使う葉。だが、犬は葉に向かって駆け出した。

「ターゲット確認、これより破壊する」

「あーもうめんどくさいなこの兄！」

その時だ。ダゴオオオオンツ!!?と地面が割れた。

「………なにその拳銃」

「まだ撃ってねえよ！」

すると、輝がいつになく怒った表情で犬に言った。

「おいお前、弱いものを攻撃するなんて卑怯なやつだな。生き物に向かって能力を使っちゃダメだって言われた。でもお前が葉を傷つけようとするなら、ぼくは約束を破るぞ」

その瞬間、逃げていく犬。安心したように息を吐く光と、拳銃を懐にしまう慶だった。

家に帰った慶は、奏に全力で愛でられた。

第9話

夜。慶が食卓についてテレビを観てたときだ。どっかで見たことあるやつがアイドルやっていた。

「……奏、こいつどっかで見た気がしなくもないんだが……」

「どっかでも何も、そこにいるじゃない」

「あ？」

奏の視線の先には光がすごい笑顔で慶を見ていた。

「……………まじ？」

「マジだよ！王家ってことは内緒でね！」

「そういえば、あの時あんた部屋に籠ってゲームしてたもんね」

奏がきゆうりを口に運びながら言った。

「あの時？」

「アイドルのプロデューサーがお父さんに土下座したのよ。アイドルやらせてくれーっ

て」

「ふーん……」

「どう？ けーちゃん！ あたし、アイドルだよ？」

ドヤ顔の光。だが、慶は冷めた表情で言った。

「俺、アイドルに興味ないから悪いけど。てか俺のアイドルは葉だけだ」

「や、だからそれ気持ち悪いって……」

完全にドン引きしてる光。テレビはCMになった。すると、ゲームの広告が始まった。

「あ、そういうや明日発売か」

「あんたねえ……明日、期末よ？ 試験大丈夫なの？」

言ったのは当然、奏だ。

「余裕。あんなん勉強する必要皆無だろ」

「あら、すごい自信ですこと」

「まあな」

なんてやってると、茜と岬がガタツと立ち上がって慶の席の後ろで土下座した。

「勉強教えてください」

「いくらでっ？」

「20000円で！」

「ダメだな」

「25000円で！」

「お願いします！」

「一人につき2815円なら許す」

「細かい!?」

すると、奏が慶に聞いた。

「なんの値段？」

「明日のゲームが5630円なんだよ」

「なるほど……」

「さて、小遣い稼ぎのために頑張るか。ご馳走様」

そう言うとう、慶は自室に引き返した。

*

そんなわけで、夏休み。期末も終わり（慶が学年トップ）、思いっきりダラけている慶。
「慶」

そんな慶に修が声をかけた。

「なにー?」

「出掛けるぞ。うちのプライベートビーチに」

「はあ? そんなん持って……ああ、そういうこと」

「それ以上は言うなよ。さて、行くぞ」

「ほーい」

そんなわけで、移動した。

*

プライベートビーチ(仮)。周りの兄弟姉妹達が水着ではしゃぐ中、慶は私服でビーチパラソルの下でボンヤリしていた。

「けーい!」

隣に奏がやって来た。

「なんだよ」

「どう? 新しい水着」

「はいはい、オッパイオッパイ」

「殺すわよ」

なんてやってると、隣にいた遙が能力を使った。

「なんの予知？」

「アレだよ。スイカ割り」

「……………なるほどね」

「じゃあ私は私に一票」

入ってきたのは奏だった。

「ふーん、僕の予知だと奏姉さんは1%なんだけど、いいの？葉が80%だよ？」

「いいのよ、なんかムカつくし」

「じゃあ俺も俺に賭けよう。負けたら？」

「アイス奢りってことで」

「OK！」

奏の提案に遙と慶は威勢良く答えた。まず一人目の輝。慶がアドバイスした。

「いいか？木刀を振ってると思うな、釘バットを振ってると思え」

「はい！」

わけのわからないアドバイスだったが、元気良く答えて輝は出発した。が、大きく外した。

「くっそう……僕はスイカも割ることが出来ないのか……い！」

膝をついて悔しがっているうちに光も出発。だが、外した。

「いつけなーい！失敗失敗☆」

「寒気するから本当にやめて殺したくなる」

「酷ッ!?？」

次は岬の番だ。

「岬、あの西瓜を遥だと思え。そうすればブラコンのお前なら辿り着け……」

「よ、余計なこと言うなあー！」

慶が木刀で殴られた。次は茜。目を隠して出発した。

「前！そのままー！」

「もう少し右だよー！」

などと輝や光が声を上げる中、フラフラした足取りで進む。そして、木刀を振り上げた時だ。慶がパシヤツと写真を撮った。

「ふえっ!?？い、今シヤツター音が……ひゃあー！」

転んで終わった。

(この写真はふ、ふく……福井? 辺りにでも売ろう)

そう心に誓いつつ、次は修の番。慶はビーチパラソルの下に戻った。

「あの修兄さんには余計なアドバイスしなくていいの？」
遙が聞いてきた。

「ああ。それと葵にもな。あの二人ならちゃんと栞のために残すさ」
「それもそだね」

予想通り、修も葵も外した。そして、次は奏だ。目隠しをする前に慶と遙を見た。そして、邪悪に笑って見せた。

「ツツ!!?」

「なあ、奏ねえさん……」

「ああ、やる気だな。大人気ない」

そして、ニヤニヤ笑ったまま迷いのない足取りでスイカに向かう。スイカの前に立った。

（悪いわね栞。でも、これにはアイスがかかっているのよ！）

そのまま木刀を振り下ろした。だが、

「奏、愛してる！」

「ふあ!?」

『ブフツ!!?』

慶の突然の告白に顔を真っ赤にし、動揺した奏は空振りした。他の兄弟も思わず吹き

出す。そして、奏は目隠しを外してキツと慶を睨んだ。

「いいいいいきなり何言うのよ！」

「いや、みんなにアドバイスしたし奏にもと思つてな。ちなみに冗談だから」

「……………殺す。殺す殺す殺す殺す！ぜーったい殺すー！」

顔を真っ赤にしながら鈍器を召喚して襲い掛かる奏。それをどうしようと修と葵が落ち着けてる中、慶は遙の横へ。

「これで、あとは俺と栞だな」

「うん。でも、悪いけど僕が勝つよ」

「そいつはどうかな」

栞が出発。そのままスイカの前に立った。が、中々殴らない。

「……………どうしたのかな」

「多分、スイカの声が聞こえてきたんだだろうな。割られたくないよーみたいだな」

解説しながら慶は立ち上がった。そして、栞の手を握った。

「栞、もしかして木刀重いのか？」

言いながら慶は邪悪な笑みで奏を睨んだ。その瞬間、遙は戦慄した。

（ま、まさか……………！二人で割ることによって奏姉さんを独り負けさせるつもりか?!?ど、どこまで鬼畜なんだ!）

第10話

翌日。葉シヨックとも呼ばれる激震によって精神を粉々に粉碎された慶だったが、その後に「やつぱり、好きっ」と言われて（葵が言わせて）、高揚感マックスになった。その為、今はかなり機嫌が良い。

「フハハハハッ!!?ダメじゃないかアツ!!?死んでなきやあッ!!?」
ザビーネで無双している時だ。

「けーちゃん、ご機嫌だね♪」

茜が後ろから肩に手を置いた。

「おう!」

「そこでお願いがあなの」

「なんだ?」

「ちよつと動きやすい格好に着替えてついてきて!」

「はあ?なんでまた……」

「いいからいいから♪」

渋々着替える慶。で、半強制的にバイクに跨らせられ、後ろに茜が乗って茜の案内により移動。慶が連れて行かれた先はどっかの学校だった。

「あ？何（なに）……」

「はい！早くこれに着替えて！」

「これは……剣道着？」

「二年生の山田先輩が風邪で休みなんだって！だから今日一日だけけーちゃんは山田先輩ね！」

「何言ってるんだお前」

「いいから早く！もう試合始まるよ！」

「いくらなんでも急過ぎだろ！つか、アップしてねえよ！せめて切返しだけでも……」

「早く！」

「あー畜生ッ！」

とりあえず体育館へ向かった。

*

仕方なく慶はため息をついた。竹刀を左手に持って歩く。そして、開始線まで歩いて、相手とお互いに礼をした。三歩歩き、蹲踞。

「始めッ」

審判の声でお互いが立ち上がった。

「イヤアアアアツツ!!?!?!?!」

声を出す相手に対して、慶は声を発しなかった。ただ、相手を見据える。

「懐かしいな、慶の剣道」

修が呟いた。

「そだね。あの時はギラギラしててカッコよかったな。なのに今は……」

光もそう言った。

「……………そうなの?」

「あー葉は覚えてないかー」

「そうだぞ葉。慶お兄様はめちやくちや強かったんだぞ」

輝が力説をすると、目を輝かせる葉。

「ま、一年もブランクあるんだけどね」

遙も読んでた本を閉じて試合場を見た。

その試合場では、慶は動かない。ただ構えて相手の動きを見ていた。そして、向こう

が面を打とうと跳んだ。その瞬間、慶の姿は消えた。だが、剣先だけが相手の小手を捉えていた。ポコツとマリオみたいな効果音を立てて、残心をとった。

旗は全部赤に上がっている。あ、慶が赤ね。

「……………今、何したの？」

岬がポカーンとした表情で呟いた。

「小手よ。出小手」

そう言ったのは奏だった。

「……………よく見えたね」

「誰でも見えるわよ」

「ほら、奏って慶の剣道の試合は必ず観に行ってたから」

「姉さん！余計なこと言わないで！」

顔を真っ赤にして怒る奏だった。で、試合は2本目。再び「始め！」の声。今度は向こうは気合いなしでいきなり竹刀を振り被った。ガードする慶。が、向こうは面に振り上げた竹刀を小手に軌道を変えた。

「！」

「こてエエエエツツ!!？」

それをわかっていたかのように、慶は手首を返し、小手を竹刀でガード。そのまま面

を打った。相手は首を曲げて避けた。そのまま鏢迫り合い。

「今の、よく躲したね相手」

「スゴイの？」

奏の呟きに栞が聞いた。

「ええ。大抵の相手はアレで勝ってたから慶は……」

「よく知ってるね」

「！ え、ええそうよ！全部見てたからね！悪い!?」

「開き直った……」

栞とのやり取りを聞いてた茜が呟いた。で、また試合。慶は竹刀を握る左拳で鏢迫り合いを崩すと、引き小手を放った。が、浅い。それを好機と見た相手は面を打ってきた。それを慶は見透かしていた。竹刀で受けて、そのまま高速で胴に返す。返し胴だ。パパーンツ！と綺麗に決まり、全部の旗が上がった。

「おー！勝った！勝ちましたよ兄上！」

「ああ、勝ったな」

はしやぐ輝の頭を修は撫でた。他の家族もはしやいでいる中、奏は礼をして面を取る慶を見ながら微笑んだ。

（ほんと、剣道の時はカッコいいんだから……）

ちなみにこの後は副将も大将も負けて一回戦敗退となった。

*

夏休みも終わり、学校開始。

「けーちゃん！起きてよー！」

茜が慶を起こしていた。慶の枕元にはゲームに漫画に携帯と、遅くまで夜更かししてたんだろうなああと予想できるアイテムが転がっている。

「もう……めんどくさいなあ。ボルシチ」

「おはよう」

「うん。朝ごはんだよ」

そのまま着替えて連行された。

*

学校。結局、慶はあの後朝食中に3回ほど寝落ちし、遅刻した。時間は9:10。一時間目は始まっている。一時間目はサボることにしました。

昼休み。ピンポンパンポーン、と教室のスピーカーが鳴った。

『1年A組の櫻田茜さん。副会長が呼びです。至急生徒会室まで来てください』

「カナちゃん？なんだろう……わざわざ呼び出して」

いや絶対スカートだろ。と誰もが思った。ちなみに1年A組は2階。生徒会室は3階にある。つまり、男子全員が立ち上がった。

(必然的に下から覗ける)

だが、その隙に慶は別の場所へ向かった。で、男子一同は茜と付き添いの花蓮を後ろから堂々とストーキング。

『下から覗ける下から覗ける下から覗ける下から覗ける下から覗ける下から覗ける下から覗ける下から覗ける下から覗ける下から覗ける下から覗ける下から覗ける下から覗ける下から覗ける下から覗ける下から覗ける………』

「茜！早く行くよ！」

「え、ええ？なんで？」

「いいからっ！」

そのまま逃げている時だ。バツタリと奏と出会った。

「茜？」

「奏さん！いいところに……！」

その頃、慶。

(いくらバカネでもスカートを履き忘れるなんて思えない。つまり、登校中になんらかのアクシデントが起こり、スカートが破けて何処かで履き替えていたところを予鈴が聞こえてズボンだけ履かないまま登校したと思われる。この仮定が正しかったとして、予鈴が聞こえて尚且つ下半身を露出出来る場所といえば監視カメラの存在しない学校の敷地内のみ！そこをしらみつぶしに探せば……あつたぜ！スカートと短パン！こいつは売れるぜ！)

慶はそれを確保すると、今朝寄ったコンビニの袋の中に隠し、教室へと引き返そうとした。だが、

「慶?！」

声をかけられ、振り返ると茜と葵と奏が立っていた。

「な、なんでここに?！」

「葵お姉ちゃんが教室で外を見てる時にあんたが外であたしのスカートを握ってるのが見えたって教えてくれたの」

殺意の波動を醸し出す茜と奏。

「あ、あの……なんで奏も怒ってるの?！」

「なんとなく」

「八つ当たりじやねえかそれ！」

「死ねエーーーーッツ!!？」

「おまつ……………！能力は……………ギヤアアアアツツ!!？」
ボコされた。

第11話

ある日。茜が風邪を引いた。そんな日に限って家には奏、慶、栞しかいなかった。

「だいじょーぶかー？ 茜ー」

「大丈夫だよ。微熱だもん……けほっ」

「ふーん、大丈夫なんだ……ならっ」

そこで邪悪に笑う慶。

「俺が看病してやろう」

「ふえっ!? な、何する気!?？」

が、茜の質問も無視して慶は部屋から出て行き、すぐに戻ってきた。手にネギを握つて。そのネギをバトンのようにスタイリッシュに回すと、慶は良い笑顔で言った。

「銀魂で見たんだけどよ、風邪のときはネギをケツにねじ込むといいらしいな」

ビクツとする茜。が、危険を感じた時には遅かった。床、壁、天井を踏み台にして死角から死角へ移動しつつ、茜に近付いた。

「えっ?えっ?えっ?」

布団をひっぺがし、慶は茜のケツの下に潜り込む。

「ふえええええっ!?」

必殺仕事人の如く、ネギを指でヒュヒュヒュヒュッと回すと、ズボンに手をかけた。

「や、やめなさい慶!私達姉弟よ!?」

「安心しろ。処女は取らんし、ビデオで撮影もしちやいない」

「いやああああっ!!?」

茜が涙ながらに悲鳴を上げた時だ。慶の肩にポンつと手が置かれた。

「あ?」

奏が立っていた。手に金属バットを持って。

「あ、あははっ……」

奏がニッコリ微笑むと、ガンツ!と音を立ててぶつ倒れた。

「つたく……このエロガキ……」

「や、やり過ぎだよカナちゃん」

「大丈夫よ。……やり過ぎたかしら」

「思い直すの早いね!?」

「大丈夫だ……この程度ならなんとか……」

「ソンビ!?？」

「殺すぞ赤髪」

「けーちゃんだつて赤でしょ!?？」

今更だが、双子ということもあり慶の髪の毛は赤い。髪型は……あれ、なんか普通な感じ。どこぞのビーターみたいなの？

「けほっけほっ……」

「だ、大丈夫?もう、慶が暴れるから……」

「その可能性もあるな」

「それしかないのよ!」

なんてやっているとまた咳き込む茜。

「ああもうっ。とにかく大人しくしてて。慶もだからね!」

「あーい」

そのまま出て行く奏。

(まったく、あのガキは……何考えてるかサツパリ分かんないんだから……)

でも、心配になりやっぱ戻った。その時だ。

「あつふあつふあつふあつ!」

「いやあああああああつ！」

「!? 茜、慶！」

ボタンとドアを開けると、

「エースが死んだあーっ!!？」

「エネルギーの顔……あつふあつふあつふあつ！」

「何やってんのよあんたらは！」

奏の声が響いた。ベッドの横には大量に積まれたONE PIECEの単行本の山。

「え? ONE PIECE読破ですけど……」

「そんなん読んでたら熱上がるでしょう!?？」

「大丈夫だよカナちゃん。これすっごくおもしろ……けほっけほっ」

「大丈夫じゃないじゃん! ていうか面白さと熱は関係ないでしょ!!？」

「まあONE PIECEは熱いバトル漫画だから。次はクールにワールドトリガー

でも……」

「あんたは出て行きなさい」

「えっ、いやそんな辛辣な……」

「出て行きなさい」

「でも看病とか……」

「出てけ」

「はい……………」

すぐすぐと慶は出て行った。すると、ドアの前には米の袋を抱いた葉がいた。

「どうした？」

「茜お姉様に……………お粥……………」

「……………なるほどな。うしっ、兄ちゃんとお粥作るか？」

「……………出来るの？」

「舐めるなよ。俺は食戟のソーマを全巻読んでる男だ」

「何それ？」

「うん、とにかく作ろうか」

そのまま一階へ。で、一緒に料理すること数分、

「あ、あーんっ」

葉が慶に完成したお粥を食べさせる。

「ん……………んっ、美味しい。葉が作ったから尚更な」

いうと、嬉しそうな顔をする葉。

「さて、持っていくか。こぼさないようにな。零しちまったら兄ちゃんは世界の物理法則に喧嘩売らなきゃならない」

「うんっ」

そのまま一人で茜の部屋へ。すると振り返った奏が言った。

「慶。殺すわよ?」

「もはや出て行けも言わないか……。や、用があるのはこいつだ」

すると、葉がお粥を持って来た。

「おかゆ」

「ありがとう、葉」

「お兄様が、てっだってくれた」

「そう。慶」

「あ?」

「出てって」

「そこはお礼言うところじゃね!?」

が、慶は追い出された。で、お粥を完食。

「おいしかった?」

「純粹な目で聞く葉。

「もちろんだよ。ありがとう葉」

「さ、移っちゃうとあれだから葉はもうお兄ちゃんのところに行きな?」

「うんっ……………」

そのまま葉は出て行った。

「じゃ、ちゃんと寝なさいよ。私は葉と慶のご飯作ってくるから」

「はーい……………」

奏も出て行き、三人で下でご飯を食べている時だ。上でガタンツと音がした。

「？」

「ちよつと見てくるか……………」

「いや、私が行くわ」

「おいおい大丈夫か？」

「大丈夫よ。いざとなったら戦車でも作るから」

「戦争を起こす気かよ」

そのまま奏は出て行く。そして、心底ビビりつつも音のした部屋に到着。

「あ、あかね……………」

ガチャツと開けると誰かがいた。

「キヤアアアアツツツ!!?..!!?..」

スタンガンを呼び出し、そのまま発動。

「アバババババツツ!!?..」

「つて、し、修ちゃん!??どうしてここに……!」

その時だ。特殊部隊が突入してきた。

「つて、わああああツツ!!?!!?」

その悲鳴が聞こえた瞬間、下にいる慶の目付きが変わった。

「葉、机の下に隠れてろ!」

言いながら慶は部屋の電気を消して、上に向かった。すると、特殊武装をした男達が数人いた。

「っ!?? 慶様!??」

と、いう声を無視して慶は一人目の顎に右手の平を顎に打ち付けて一瞬だけ失神させると、武器のマシンガンを奪い、マシンガンをそいつの顎に付けて言った。

「何者だお前ら。こいつの顎を吹っ飛ばされたくなければ全員マスクを外せ」

と、言ったがすでにマスクは外していた。というより武器すら構えていなかった。

「け、慶?」

後ろから奏と修が出てくる。

「か、奏?というかなんで修が?」

「父さんのせいよ」

で、事情を説明。ようやくすると、やめろと言ったにも関わらず特殊部隊を配備させ

ていたらしい。

「…………アホくさ」

慶が言うと、すぐすぐ帰っていく特殊部隊の皆さま。

「な、なにかあつたの〜？」

部屋から茜が出てきた。

「なんでもない。てか疲れた。ちよつと早いけど俺寝るわ」

「そ、そう。分かつたわ」

「茜ー。部屋戻るぞー」

慶が肩を貸して部屋に戻る。そのままベッドに寝かせた。

「つたく…………いい歳して風邪なんか引きやがって…………」

そう言うと慶は茜の頭を軽く撫でると、自分のベッドに籠った。

「つくしゆ。寒ッ」

第12話

翌日。風邪が移っちまった。

「ゲホッゲホッ」

「何やってんのよあんた……」

「あ、あははっ……」

咳き込む慶に奏は呆れ、茜は苦笑いを浮かべた。

「う、うるせつ……そのバカのが移ったんだよ……」

「ご、ごめんね……」

「別にいいよ……油断した俺の落ち度だ」

「いや、備えてれば助かるってもんでもないと思うけど……」

「えほっえほっ！」

「だ、大丈夫？カナちゃん、どうしよう……」

不安そうに奏を見る茜。だが、奏は、

「ふん、そんなのほっとけばいいのよ。それより茜、なんか1日長引いてお父さんたち帰

るの遅くなるみたい」

「あ、うん。分かった」

「それと、葉がお腹空いてるだろうから朝ご飯作るの手伝って」

「へ？それくらいカナちゃん一人で作れるでしょ？私、けーちゃん見てるよ」

「いいから来なさい」

そのまま茜は廊下に連れ出された。

「もう、どうしたのカナちゃん？」

と、聞いた茜の肩をガツ！と掴んだ。

「ど、どっどどどうしよう茜！け、慶が……慶があ！」

「慌て過ぎだよ！てかなにその豹変っぷり!?？」

「だっただだだだって！死んじゃうかも……！そ、そうだ！万能薬！かいふくのくすり！

いにしえの秘薬！」

「落ち着いて！未知のもの作っちゃダメって言われたんでしょ!?？」

「未知じゃないわよ！慶のやってたゲームで見たのよ！」

「ゲームの世界にしか存在しないじゃない！」

「止めないでえ〜！」

「ああもう！めんどくさい姉だな！」

そんな様子を聞きながら慶はニヤリと口を歪ませた。そして、大きく息を吸い込んだ。

「ゲツフツ！ゲフツ！」

「慶！」

ボタンツ！とドアが開いた。

「だめだー死ぬー」

「し、しししし死ぬう!?ど、どうすれば……！」

「新作ゲームがないと死んでしまうー」

「げ、ゲームね！何がいい？」

「モンハンで」

「わかったわ！モンスターハンター……モンスターハンター……」

などと呟く奏。その頭をペシッと茜が叩いた。

「カナちゃん落ち着いて。そんな病気があるわけないでしょ？」

「はっ！確かに、騙されたわ！」

「いや騙されないでよ……」

チツ、と舌打ちする慶。

「病気でもやっぱり慶は慶ね……」

「でもまあ、その様子なら大丈夫そーだね」

「えー無理ー。ご飯食べたいく。ラーメンで」

「却下」

茜と奏は口を揃えて言った。

「そういえば茜、病人は汗を掻くといいんだったわね？」

「そーだったねカナちゃん。じゃあタバスコでも買ってくる？」

「待てお前ら！何を入れる気だ!!？」

「え、何って……」

「汗かくといいんなら辛い物入れるの当たり前じゃん？」

「何処の星の常識!!？」

「じゃ、買い物に行くわよ茜！」

「私は無理！監視カメラがある！」

「いいから行くわよ！」

そのまま嬉々として出て行った。

*

「クツソー……奴らめえ……」

ボヤキながら慶は近くにある名探偵コナン3巻に手を伸ばした。

(そういうえばここで一回、蘭にバレるんだっけ……)

なんて考えてる時だ。ガチャツと扉が開いた。

「栞……だめだろお前。風邪移るぞ。いや俺の移した風邪なら少し興奮するかも……」

「だいじょうぶ？」

「ああ。平気だから。栞は部屋に戻つてろよ」

「でも……兄様以外にだれもいない……」

「あー……あのクソ姉貴共……じゃあアレだ。ゲーム貸してやるから下にいろ」

「……………やだっ」

「へ？」

「お兄様と、一緒にいる……」

「やだこの子可愛い一緒にいよう」

「うん♪」

そのまま布団に潜り込んできた。

「可愛いなあ、小動物みたいで。いつか結婚しような」

「お兄様となら、いいよ」

「でも移るから出なさい」

「えっ……」

「葉の苦しむ姿を見るくらいなら俺は世界の病原菌を敵に戦争を起こさないといかん。だから頼むよ?」

「分かった……」

そのまま葉が出た時だ。

「げほっげほっ!」

「お、お兄様!」

「だ、大丈夫だから……ゲホッゲホッ……葉は、外に出て……」

「……………」

そのまま葉は駆け足で出て行った。

*

買い物中の奏と茜。ちなみに茜はサングラスをかけている。

「これなら、大丈夫、だよね?」

「そーね。それより、タバスコと何入れる?」

「うーん……豆板醬とか？」

「あんた……エゲツないわね……」

なんて話しながら歩いている時だ。奏の携帯に電話が掛かってきた。

「もしもし？」

『お姉様！葉』

「あら、どうしたの？というか電話かけられるの？」

『電話さんに教えてもらったの！』

「そ、そう……ちなみに私の番号はどうやって？」

『電話さん！』

「買い換えた方がいいかしら……」

『そんなことより、大変！』

「？ どうしたの？」

『お兄様が！』

「えっ………？」

*

茜の能力で二人は急いで帰宅した。そして、玄関に入る。

「そんな……！辛さで泣かそうとしてる場合じゃなかった！」

「葉、いる？」

茜が呼ぶと、涙目で出て来る葉。

「すごい、咳き込んで……それで……」

そのまま三人で部屋に突入した。

「慶！」

「けーちゃん！」

「お兄様！」

「あー？」

中で慶はゲームをしていた。瞬間、踏み付ける三人。

「いってえ！何すんだお前ら！」

「あんたこそ何してんのよ！葉が電話なんてよこすから心配してたつてのに……！」

「そうだよ！ゲームなんてやって！バカなの!!？」

「お兄様、めっ！」

三人に怒られて、慶は3DSを閉じると、ため息をつきながら布団に籠った。

「悪かったよ……。大人しくしてるからお前らは出てっいいよ」

「はあ？何その言い方」

「移すと悪いーしな。風邪引いた時は一人で寝てるのがなんだかんだで最高の形なんだよ」

「……………」

「分かったら出てけ。シツシツ」

「分かったわよ。でも辛くなったら言いなさいよ」

「おー。おやすみ」

そのまま奏も茜も朧も出て行った。

「何よあの言い方！腹立つなあ！そう思わないカナちゃん!?!?」

「ねえ、茜。知ってた？」

「なにが!」

「慶つてね、たいしたことない時は大騒ぎする癖に、本気でヤバいと思った時は隠すんだ」

「……………えっ?」

「どうしよう…………本気で辛いみたい…………」

「えっ?」

もう少しだけ続く

第13話

「どっどどどどうしよう……やっぱりブラックジャックでも精製したほうが……」

「だからダメだってば！ていうかあの人の手術代高いんだよ!?!?」

「ダメよー！私は慶を助けるんだからー！」

「あーもう！面倒なんだから！」

（でもカナちゃんがかここまで取り乱すなんて……どんだけーちゃんのこと好きなんだろう……。姉弟の関係なのに……）

なんて考えてると、葉が下からトタトタとやって来た。

「葉？」

「これ……お兄様に……」

持ってきたのは濡れたタオルだった。

「あ、ありがとう葉。でもごめんね、お姉ちゃん今このお姉ちゃん抑えるので忙しいから葉が乗せてきてくれるかな？」

「分かった」

そのままガチャツと扉を開けて、葉は中へ入った。

「い、今……出すからね、慶！」

「もうっ！お姉ちゃん！そんなものでけーちゃんが治ってもこの国が破産しちゃったらけーちゃんは喜ばないよっ?！」

「っ！………そ、そうかもしれないけど……」

「それにただの風邪なんだから、ほんと冷静になつてよ」

「ごめんなさい、取り乱したわ……」

「とにかく、中で看病してあげようよ。あと大人しく寝かせてあげよう?ね?」

「ええ。そうね」

そのまま二人で部屋に入った。中では、真っ白な布を顔に被せた慶がベッドの上で横たわっていた。その横では葉が俯いて下を向いている。

「け、慶……?」

「そんな、けーちゃん！」

2人が涙目で慶に駆け寄った。だが、

「なんだようるせーな」

ひよいっとタオルを取って慶は起き上がった。

「栞！タオルの掛け方違うわよ！」

「それは亡くなった人にかける奴でしょ!!？」

「ご、ごめんなさい……」

シユンつとする栞。その2人に慶は不機嫌そうに言った。

「つたく、頭に響くから黙ってるよ……」

「ほんつとに風邪引いても態度だけは変わらないのね」

奏にじと目で睨まれる。

「まあとにかく、辛かったら言いなさいよ」

「辛くないから平気。なんならこの状態で町内一周でも……」

「やめなさい！わかった！平気なのは分かったから！」

そう奏が言うのと、慶は布団にもぐった。

「あーあ……昔はカナちゃんとか呼んでくれてて可愛かったのになあ……」

「人は成長する生き物なんだよ。てか、今の俺にカナちゃんって呼ばれて嬉しいか？」

言われて顎に手を当てて考える奏。

『カナちゃん、コーラ買ってこい』

「……………それはそれでありかも」

「あ？なんか言った？」

「なんでもないわよ！それよりお腹すいたんじゃない？お粥作ってきてあげる」
「サンキュ」

慶が礼を言うと二人は部屋を出た。すると、栞も部屋を出た。

「栞？」

「どうしたの？」

「栞も、作る」

「うん。分かった」

そのまま三人でクツキングした。その頃、慶。

「あー。頭痛い。まあ自分の好きなこととしてれば治るよな」

そんなこと言いながら慶はPSPを付けた。ネクプラだ。

「うー懐かしい。ユニコーンにしよう」

出撃。アーケードでボスルートしかない奴を選択した。

「バナージ・リンクス。ユニコーンガンダム、行きますす！」

そう言つて出撃した時だ。扉の開く音がして急いで布団の中に潜つてPSPを隠し、電源を切った。

（やつべえ……作んの速すぎだろあいつら……！）

「お兄様」

「ん、栞？どした？」

「おかゆ」

「しおりの手作り？」

「うんっ」

「それだけで心がピョンピョンするわ」

「うんっ？」

「なんでもない。いただきます」

慶はそう言うのと、手を合わせてありがたくいただいた。

*

そんなこんなで、翌日。

「治ったー！」

慶が元気よく手を挙げた。

「良かったね、お兄様」

「もう、心配かけさせないですよ」

栞、茜と声をかけられる中、慶は微笑みながら会釈した。すると、三人のいる部屋に

奏が入ってきた。

「お、カナちゃん。治ったよけーちゃん」

「良かった」

「……………」

「? どうかしたか奏?」

顔色悪い奏がどんよりとした声で言った。

「……………なんか、頭痛い……………」

「……………」

無限ループって怖い。

第14話

季節はぶつ飛んで、クリスマス。葵の誕生日となった。で、櫻田家は思いっきりクリスマス準備をしている。もちろん、それはカモフラージュで葵の誕生日をサプライズでやるつもりなのだが、

(私の誕生日も一緒に祝ってくれるのね)

てな具合にモロばれていた。

「手伝おうか?」

と、葵が気を利かせても、

「間に合ってるから!」

と、光が断っている。そんな様子を見ながら慶は立ち上がった。

「や、葵。悪いけど買い出し手伝ってくれ」

「ち、ちよつとけーちゃん!?!」

いきなり振り返って光は慶に耳打ちした。

「どういうつもり?!?! 内緒にするんだよ?!?!」

「ああ、わかってる。だからこそある程度手伝わせないと不自然だろうが。買い出しならクリスマスパーティーのつてことにもできるし勘付かれる事もないだろ」

慶が言うのと、目からウロコ！って感じで「なるほど」と呟く光。

「ま、ここは俺に任せろ。岬、買い出し手伝え」

「えっ!? な、なんで?」

「何買うのか俺知らんし。葵も知らねーと思うから頼むわ」

「わ、分かった!」

「いいよな葵?」

「うん。いいわよ」

そのまま三人で出掛けた。

「じゃ、まずはプレゼント交換用の物でも買いに行くよ!」

張り切つて岬はそう言うのと、葵と慶の少し前をタタタツと走る。

「元気ね、岬ったら」

「ああ。悪いな葵。もう少しだけ気付いてないフリしててやってくれ」

「あら、何のことかしら?」

うふふつと微笑む葵。それを見て慶は思わずため息をついた。

「嫌な姉だ」

「嫌な弟ね」

二人は岬の後を追った。どっかのデパート。岬は必死に葵のコートを選んでいた。

「岬様、こちらはどうぞ……」

「全然ダメ」

店員さんの勧めを見もせず、一蹴すると、岬は別のコートを取る。

「つかさ、」

と、慶が口を挟んだ。

「クリスマスプレゼント交換のプレゼントを選んだから、三人ばらけた方がいいよな」

慶がそう言った瞬間、岬がまた耳打ちした。

「何言ってるのよ！ 葵姉さんのプレゼント選ぶんでしよう!?？」

「バーカ。んなことしたら不自然だろ」

「でもサイズとか分からないじゃない！」

「その位テメーで考えろ。いいな？」

「むうっ……分かったわよ」

そんなわけで三人ばらけた。

「さて、何を買うか……」

慶はとりあえず、一階に降りておもちゃ屋のガンプラコーナーへ向かった。

(さて、葵が好きそうなモバイルスーツ……葵、グフ、いやそれは安直過ぎる。それに葵が鞭を持つタイプには見えない。と、なるとズゴックとか？や、それ俺が好きなだけだし……ハンブラビ？ダメだ、葵のオツパイデッカいし……)

などと思考を巡らせた結果、ダブルオーガンダムに決定した。そのMGを買って慶はおもちゃコーナーを出て、ブラブラ歩き回ると、視界を塞がれた。

「あ？」

「だーれだ？」

「ババア」

「このまま目、潰しとく？」

「冗談ですごめんなさい」

言うまでもなく葵だ。

「どしたの？」

「私は買い物終わったから。って、慶も終わったのね」

「ああ。今欲しいか？」

「後にするわ」

二人はテキトーに近くの店に入った。暖房入ってるから。二人はエスカレーター足の元のベンチに座ると、慶がすぐに立って近くの自販機で缶コーヒーを二本買いに行つ

た。

「ほい」

「あら、ありがとう」

「誕プレなそれ」

「あら、ありがとう」

なんて言い合いながら二人はコツンと乾杯して一口飲む。

「慶はさ、選挙はどうするの？」

唐突に葵が聞いた。

「参加しないよ」

「へ？そ、そうなの？」

「当たり前だ。俺は王様なんて器じゃない」

「そうかなあ、頭もいいし……」

「頭良くて王様になれるわけじゃないだろ。農業・牧畜業、水産業、林業、狩猟業、鉱業。第一次産業だけでこの数だ。それだけじゃなくて第二次、第三次とまだまだまとめなきゃいけないものはあるし、これらは内政の一部でしかない。他にも他国との貿易だの外政だのなんなのって考えただけで頭が痛くなる。そんなんやりたがるやつのが知られんわ」

「……………」

「なんだよ」

「ううん、ちゃんと考えてるんだなって思ってた」

「当たり前だろ。仮にやるとなつたとして、革命が起こるような政治には出来ない。全国民の生活を俺がまとめなきゃならないんだ。税金にしてもなんにしてもな。そんなの俺には合わないよ」

「うーん……むしろそこまで考えてるのって慶以外にいないと思うし、慶こそお似合いだと思っただけど………」

「とにかくやらない。俺はせいぜいサポートするまでだ」

「じゃ、質問を変えるね。慶を除いた9人で、誰の力になりたい?」

「葉」

「」

と、即答した時だ。店の中央のレジで悲鳴が聞こえた。

「?」

「なに?」

真ん中には拳銃を持った覆面の奴が5人ほどいた。

「出口は抑えた!」

「動くな！全員、妙な真似したらぶっ殺すぞ！」
強盗だった。

第15話

そんなこんなで、強盗に入られました。慶は困った表情を浮かべながらも落ち着いてエスカレーターの下に葵と一緒に隠れていた。

（奴ら、こんなデパートなんか占拠してどうするつもりだ？身代金を目的か？いや、デパートを占拠するのに五人だけってのは少な過ぎる。いや、この際目的はどうでもいい。奴らをどうするかだな。拳銃を持つて以上は穩便には済ませられないだろう。この客の数だとあいつらの拳銃の腕がどうあれ誰かには当たるだろうし……クソツ、リア充どもが。だからクリスマスは嫌いなんだ。死ね）

と、ボヤきつつも慶は強盗を見た。

（考えるのめんどくせーな。もうここで大人しくしてるか）

そう思って慶はふうつと息をついた。

「何か思いついたの？」

葵が聞いてきた。

「逆だ。考えるのメンドクサーからほとぼりが冷めるまで待機。ドーセ監視カメラで何処に逃げようと後を追える」

「そっか……」

「奴らの目的にも寄るんだけどな。身代金とかじゃなくても……こう、テロリストみたいな目的だったら話は別だ」

「テロリストみたいって?」

「『この国のやり方に意義を反するー!』みたいな?そういうのだったら自由にはさせられないな」

「そうね」

「ま、変に暴れたりしなけりや撃ってはこないだろ」

「そう言つて2人はエスカレーターの下で一息つく。慶は気付かれないように写真を撮った。」

『強盗なう☆』

で、Twitterに投稿。すると、隣の墓がふるふると震えてることに気付いた。

「……………怖いのか?」

「当たり前よ。こんな状況で落ち着いていられるわけがないわ」

「……………俺、落ち着いてる」

「慶が異常なだけよ」

言われて慶はため息をついた。すると、「次は二階を制圧するぞ」と、声がした。

「! 上には岬が……!」

声を上げる葵。その瞬間、ニイツと笑う慶。

「作戦変更だ」

「え?」

「制圧するのは俺の方だ」

すると、後ろからどたと足音が聞こえた。強盗が五人、エスカレーターに向かってきた。その瞬間、慶はバツと飛び出て先頭の奴の顎に拳を叩き込んだ。

「!!?」

「な、なんだお前……っ!」

そう言うのと残りの強盗は拳銃を向ける。慶は殴った奴の拳銃を奪うと、そいつの背中をドンツと強盗に向けて押した。仲間が前に出されたため、撃てない。その隙を見て、慶は懐に潜り込んで、更に前の奴の拳銃を握る拳を払い、さらに腹パンを決めた。

「てめっ……!」

と、殴られた奴が声を上げるが、その頭を浮かんでエスカレーターの取手に叩きつけた。

（こいつら……撃つて来ないところを見るとやつば拳銃なんて使えねえのか。なら、この間合いは俺のものだ）

そう判断すると、さらにもう一人にあつという間に近付いて袋叩きにした。そのまま拳銃を奪った時だ。

「動くなッ！」

その声が響いて、慶は残りの2人に銃口を向ける。敵のうちの1人は慶に拳銃を向け、もう一人は葵の首に手を回し、こめかみに拳銃を突き付けていた。

「！」

「この女がどうなってもいいのか？」

「お前、そいつが誰だか分かってる？」

「はあ？ 誰でもいいだろ」

慶に聞かれるが、強盗はシレッと答えた。が、もう一人の強盗が「あつ」と声を上げた。

「おつ……おまつお前つお前それ……お、お前……お前……」

「あ？ お前お前言い過ぎだろ。なんだよカス」

「そ、その人……」

「あん？」

言われて、銃を向けてる奴は葵を見た。

「あつ……」

「離れた方がいいぞ。現時点で一番人気の人だ。お前ら社会的に死にたいの？」

慶が言うのと、強盗はダラダラと汗を流す。

「さつき、Twitterでお前らの写真ばら撒いたし、警察いつ来るかわからんよ？どうするよ。今のうちに自首するなり単に帰るなりしたほうがいんじゃないか？」

慶がそう言うのと悩む強盗2人。

「じ、じゃあ……帰ります……」

「なんか悪いね」

「いえいえ」

そのまま強盗は倒れた奴らを背負って帰ろうとした。その時だ。

「逃がすかアツ!!？」

慶が片方のの背中にドロップキックした。

「んなつ……て、てめっ嘘だろ!!？」

と、言った奴の背後を取ってバックドロップした。周りの客や葵が思わず半眼になる中、慶は気絶する強盗に言った。

「敵に背中を向けるとか、論外」

*

そんなわけで、無事に三人は帰宅した。

「ただいま」

「ただいま〜！」

「ただいま」

慶、岬、葵が挨拶をした。岬と慶は先に部屋に入る。そして、「いいよ〜」の声。葵が中に入ると、パンパンパンツ！とクラツカーの音がした。

『葵お姉様、誕生日おめでとう〜!!?』

そんなわけで、誕生日会が始まったのだった。

第16話

大晦日になった。

「このパンツ誰の!? 今日自分の洗濯終わったよ!」

「光! 箒は使ったら元の場所に戻して!」

「岬! 窓拭き終わったの!?」

「お風呂掃除係! 洗剤置きっ放し!」

「光! クイックルワイパーは使ったら元の場所に戻して!」

「修ちゃん! サボってないでこの本片付けなさい!」

「洗い物係は……奏。一つ残ってるぞ」

「光! フローリングワイパーは使ったら元の場所に戻して!」

「遙! 窓拭き手伝って!」

「茜姉様! 掃除機は何処ですか?」

「光! 掃除機は使ったら元に戻して!」

「葉、それ一人で持てるか？」

「うんっ。ヘーキ」

「光！高圧洗浄機スチームクリーナーは使ったら元に戻して！」

「そんなのあたし使つてないよ！ていうか何に使うのよそんなもん！」

などと戦争状態の中、リビングの真ん中で慶と葵は誕生日プレゼントのダブルオー
／100スケールを創っていた。

「そうそう。で、ここ。わざと若干残して……そう、そしたら綺麗に削れるっしょ？」

「本当だ……ありがとう。慶」

「いえいえ、当然のことをしたまで」

言いながらも慶は自分のガンプラ（1／100スケールケルデイルム）を作っていた。
「すごいね……。こんなに関節つて動くんだ」

「ああ。最近のは高性能だからな」

「慶はどんなの作ってるの？」

「そっちの機体の仲間の機体、つていうのか？まあそんな感じだ」

「へえ。じゃあ私と慶も仲間ね」

「そーだな（棒読み）」

「何よその言い方」

なんて話してるときだ。ガントツと慶が頭を殴られた。

「つてー！」

振り返ると、不機嫌そうな顔で奏が立っている。

「なんだよ。つーか何すんだよ」

「何サボってんのよ。あんたも葵姉さんも」

「俺と葵は自分の掃除終わってるよ。お前らノロマと一緒にするな」

「な、なんですって!!?」

「俺の掃除場所は自室に階段、葵はコタツ周辺。気になるなら確認してみろ」

「むう……」

「奏、本当に終わってるのよ。けーちゃん要領だけはいいから」

「頭と運動神経と性格もな」

「性格はないかな」

「ちよつと待て声を揃えるか普通?」

反論しても、なぜか不機嫌そうな顔をする奏。葵はなんでか分かってるかのように微

笑む。すると、奏がニヤリと笑った。

「なら慶はボルシチの世話しててくれる?」

凍り付く慶。が、構わずにボルシチを抱いてくる奏。

「まつ、待つて待つて！流石にそれはないんじゃないの!?!?」

「あら、いいじゃない。手が空いてるんだもの。ねえ、葵姉さん?」

「そ、そうねえ……」

葵からのお許しが出て、奏は慶の元へボルシチを運ぶ。

「ま、待つて!奏様!ごめんさい!」

「やだ」

「いやああああ!!?!」

女みたいな悲鳴をあげて慶は葵に抱き付いて逃げた。顔に胸が当たっているのだが、テンパってるのか慶は気にしていない。その様子を見て凍りつく奏。

「あ、葵助けてコノヤロー!」

「あ、あははっ……」

苦笑いで頭を撫でる葵。が、やがて奏からドス黒いオーラが放たれてきた。

「か、奏……?落ち着いて……?」

葵が言うも奏から放たれるオーラは止まらない。魔人ブウみたいになっている。が、慶は気づいていないのか、葵の胸に顔を埋めたまま震えている。その震える慶の肩に何か乗った。

「? なんだこれ……」

なんだか理解する前に慶は自分の肩に乗ったものを触ろうとした。が、それがカプツと噛み付いてきた。

□

顔を真っ白にしながらもそれを見ると、ボルシチだった。声にならない悲鳴が響いた。

*

ようやく掃除も終わり、全員でダブルオーとケルデイルが並べられたコタツに集まり、テレビを見ている。

『櫻田家！チキチキ年末大世論調査会ー!!？王家ごきようだいの中から時期国王を決める選挙に先駆け。今宵、全国民回答による世論調査会を開催いたします！』

「実質、本番の国王選挙みたいなもんだよね」

岬が言うのと、奏が口を開いた。

「あくまで現段階での順位よ。これで王様が決まるみたいな捉え方は……」

「……………がれ……………下がれ……………」

奏の台詞は誰かの念仏で遮られた。

「なんか、慶より下って素直に喜べない……」

「お前いつか殺してやるからな」

で、テレビが言った。

『第9位、修様!!?』

「んなつ……け、慶が、順位を上げている!!?」

「待て修！俺は何もしてない！この前俺、ゲーセンで他校の奴に絡まれて全員まとめて蹴散らしたんだぞ!!?」

「慶？ちよつとお話しましょうか」

葵に連行されていった。

「この様子だと、次は光かしら？」

奏がニヤニヤしながら言った。

「待ってよー！あたしまでけーちゃんより下だつていうの!!?」

「なんかそんな感じするのよ。ねえ、栞？」

膝の上にいる栞の頭を撫でながら奏は言った。栞は奏の胸に頭を置きながら何も言わずに視線を逸らした。

「栞まで!!? そんなわけないわよ！あたしだって……!」

『第8位は光様です!』

「

「ほら見たことか」

すると、慶と葵が戻って来た。が、慶は涙目だ。

「死んじやおつかないもう」

「慶!? どうしたの!?」

「なんでもねーよ……」

葵は慶に何を言ったんだろうと思いつつも全員何も聞けなかった。すると、またまたテレビから声がした。

『第7位は輝様です』

「妹の栞より下なんて……兄としての威厳が……!」

と、悔しがる輝の頭に慶が手を乗せた。

「大丈夫だ輝。あそこに兄としての威厳なんてない奴もいるし、そもそも栞はこの世の生き物の頂点に立つ天使なんだ。俺たちなんかと威厳が違う」

『続いて6位、栞様です』

「兄様、生き物の頂点6位ですが」

「ちよつと栞に投票しなかったゴミクスども全員殺してくる」

「慶?」

にっこり笑う葵が怖かったのでやめといた。

「しかし、けーちゃん快進撃だね〜」

岬が微笑みながら言った。

「そーだよ。万年最下位だった癖に」

光もそれに乗って言う。

「へ？俺、8位じゃないの？」

「8位は光だよ」

「……………」

顔色が悪くなり、ドツと汗が浮かぶ慶。

「おい国民、どういうつもりだ…………」

「そりや、強盗とかスリとか退治してるし、当然じゃない？」

「……………あつ」

遙に言われてようやく慶は理由がわかった。

「なんで俺の目の前でばかり問題が起こるんだよ…………。コナンくんかよ俺は…………」

「でもまあ…………までよきつと。流石にこれ以上はないわよ」

奏が口を挟んだ。

「そうだな。同じ下位グループとしてこれ以上上げられるのは困る」

修も腕を組みながら言った。

『それでは、ベスト5の発表です!』

テレビがそう言うのと、全員がそつちを見た。

第17話

『第5位は……』

そう言うのと、みのもんたバりに引つ張る司会。そして、口を開いた。

『岬様です!』

「遥に負けたあー!」

岬がうがあー!と絶望的な声を上げた。そんな中、慶は遥の胸ぐらを掴んだ。

「おい……。てめえは俺より上なんだらうな……」

「ええ? いや知らないけど……」

「上じゃなかったらマジで許さんぞ」

「そんなこと僕に言われても困るよ!」

「お前のその歪みを断ち切る」

「むしろ歪んでるのは兄さんの方だよ!」

『第4位、遥様!』

「よし、殺す」

「待って待って！ぼ、ボルシチ！」

「ごめんなさい」

「ほんと弱いね……」

『では、第1、2、3位は纏めて公開したいと思います！』

その声が響き、全員がテレビを見た。葵か、奏か、慶か。

「おい、まじ頼むぞ。一位なんてなった暁には暴動が起こす」

「やめなさい。猫を飼うわよ」

「やめとくわ」

「猫を飼うわよって……斬新な脅迫だな……」

修が呆れた時だ。テレビにランキングが映った。

一位 慶様！

二位 葵様！

三位 奏様！

「ちよつと自爆テロ起こしてくる」

「待って待って！落ち着い……ボルシチ！」

「落ち着く」

「なっ、なんで!?？」

ボルシチを使った慶と茜の心温まる茶番の後、奏が声を上げた。それに応えるように司会が解説を始めた。

『えー今回は慶様のものすごい快進撃でしたが何があつたのでしょうか?』

『それなんですがね、彼は少し前まで喧嘩や校則違反などで一番人氣がなかつたのですが、その喧嘩の理由のほとんどが苛められそうになっていた人を助けるとかだったようですごく支持を集めていますね』

「ち、ちげーから! 俺別に助けたわけじゃねーから! た、たまたまボコったら結果的に助けになっただけだから!」

『それと、アイドルの米澤紗千子さんからですね。ストーカーに追われていたところ、助けていただいた、ともあります』

「ち、ちげーから! お前なんて助けてねーから! あの時は肩ぶつかって買ったばかりのファンタ落としてブチギレただけだから!」

「あー……最近さっちゃんかけーちゃんのこと顔を赤らめながら聞いてくるのってそういうことだったんだー」

光が声を漏らした。

『他にも定期テスト毎回トップ、バイクに乗ってる姿がカッコイイ、アレはツンデレの素

質有り、などありますね』

「おーい最後の。誰だ殺すぞ本当に」

「ツンデレ……慶……」

そう呟くと奏は妄想する。

『べ、別に奏を助けたとかそんなんじゃないからな！ムカつく奴がたまたまいたってだけだからな！勘違いすんなよ！』

「……………イイ」

「カナちゃん鼻血！」

「ふえっ？」

なんて馬鹿やってる中、慶は炬燵に頭を打ち付ける。

「どうする……どうやって順位を下げる……」

なんてブツブツ呟いてると、父親が部屋に入ってきた。

「おーう、みんないるなー」

「どうしたの？」

茜が聞いた。

「今回、こんな感じの結果が出たと思う。ポイントが高いのも低いのもいたな。だから明日、逆転のチャンスを与えようと思う」

「へ？」

*

そんなわけで、外。ルールは二つのチームに別れて写真のペットを捕まえるようだ。先にとらえて勝利したチーム全員に100pt渡し、そのポイントを譲渡できる。さらにそのポイント1につき一万票の価値があるようだ。

「重要な事前情報として1. この一枚の写真、2. 目標はこの街から外には出ていかないだらうということ、3. 名前はミケだそうだ」

と、父親が言った。そんなわけで、クジでチーム分け。

A：茜、慶、岬、遥、輝

B：葵、奏、修、光、栞

となった。

「よーっし、じゃあさっそく探しに行こう！」

と、岬が言ったのだが、その襟を慶が掴んだ。

「待てバカ」

「んげっ！」

潰れたカエルみたいな声を出す岬。

「何するのよー！」

「お前ら、今回のターゲットがこの鷹だと思ってるバカは何人いる？」

手を挙げたのは四人だった。つまり、慶以外全員。

「どこまで素直な奴が多いんだよ」

「何よ、違うの？」

茜が聞いた。

「ちげーよ。写真の左下あんだろ？ここに猫がいる。こいつがミケだ。鷹にミケなんて名前付けるわけないだろ」

「な、なるほど……」

「向こうも葵いる以上、この事に気付いているはずだ。だから、葉を誘拐する」

「えっ……」

「おい引くな岬。ロリコンじゃないから。シスコンだから。俺は。あいつと遥がいれば俺たちに負けはない。だけど葉の誘拐に夢中になれば先手を打たれる。岬の分身二人と輝、頼む」

慶が言うのと岬は分身し、三人は走って行った。

「茜、携帯の通話入れっぱなしで飛べ。遥が場所を指示する。お前なら建物を避ける必

「要はないだろ」

「う、うん」

「残った岬は全員バラバラで探す。俺と遙は一緒に行動する」

「なんで？」

「俺が向こうのチームならまず遙を消すからな。向こうには修がいる。地球の裏側に飛ばされるかもしれない。まあお前は俺が守るさ」

「兄さん……少し気持ち悪い」

「ホモじゃないぞ」

「その前に一つだけ聞かせてくれる？」

「なんだよ」

「どうしてそんなにやる気出てるの？」

「は？」

遙が聞くと、茜が言った。

「そんなの、決まってるじゃん。誰かにポイントを譲渡するためでしょ？」

「違う。俺はやるからには勝つ男だ。特に奏に負けるのはなんか腹立つ」

「ああそう……」

「じゃ、行くぞみんな」

行動開始した。

第18話

「こつちだよ慶兄さん」

「おう、流石」

「茜姉さんも聞こえてるね？」

『うん。スーパのあたりね』

通話して話ながら移動している時だ。

「つーか岬。お前までなんでいんだよ」

「べ、別にいいでしょ？」

「いや、遥の予知だと可能性が一番高い場所に俺たちが向かうわけだが、0%じゃないところもあるからお前の分身に行かせようと……」

「……………」

「……………あつ、なるほど。遥と一緒にい……………」

「余計なこと言うなッ！」

と、岬が慶をブン殴った時だ。慶は気配を感じて受け身を取ると、遥の後ろに修が現れた。

「遥ッ！」

「えっ？」

慶は遥の腕を引つ張って自分の後ろに隠れさせると、修の姿が消えた。

「何処に……?!?!？」

「テレポートさせる対象がいなくなっただ。そしたら自分だけ移動する事になるに決まってるんだろ。だけどいつ戻ってくるか分からないからさっさと行くぞ。スーパールの近くでいいんだな？」

「うん」

そのまま三人でスーパールの近くへ向かった。だが、

「ここで予知頼む遥」

「うん。………待って、場所移動した！公園の方！」

「OK」

すると、岬が言った。

「けーちゃん！栞捕獲部隊から。栞を公園で発見だつて！近くに葵姉と奏姉、光の姿あり！」

「そいつらの足止めだけ頼む。輝は力を使っても構わないし、なんなら地割れの一つや二つくらい起こさせて足場を奪え」

「言っとく」

「茜、岬、遥。作戦がある」

*

公園。

「フンヌツ!!?!」

輝が地面を殴ると、地面が割れて公園の足場がボコボコになった。

「こら、輝!」

「待って奏。輝が自分からこんなことすると思う?」

「つてことはやっぱり……慶ね」

「あの子は後でぶっ飛ばすとして、奏。ダンディ君のぬいぐるみの時のあれ、お願い出来

る?」

「……あれ高いのよ?」

「私のポイント上げてもいいんだけどなあ」

「任せて」

そのままドローンみたいなのを三機呼び出し、それが空中から猫に迫る。

「葉、ご苦労様。もう危ないから私の上においで?」

「うんっ」

葵が言うのと、葉は抱っこしてもらった。で、ドローンの方。

「やらせるかオラアツ!」

迫ろうとする岬の分身。だが、足場が安定しないと向こうが空中なのもあって中々捉えきれない。ドローンは岬など相手にせずに猫に迫る。

「もらったわ!」

が、パシユツと音がして、ドローンが一機墮ちた。

「200万が……!」

奏がそう言うのと、近くに慶がサイレンサー加工された拳銃を構えて立っていた。

「やらせるかよ」

そのままパシユツパシユツとドローンもどきを全て墮とした。で、慶はもう片方の銃を猫に向けた。こっちは空砲だ。それで猫をびびらすつもりだ。

「触れなければ問題ない」

その時だ。慶の後ろに修が現れ、慶の肩を掴んだ。

「っ!??!」

「少し旅行しててくれ」

そのまま慶は何処かへ消された。そして、修は猫の方を見た。

「さて、こいつで終わらせよう」

だが、その猫の元へ茜が降りてきた。

「チイツ!」

その瞬間、修の姿が消えた。そして、茜背後から声がした。

「慶と同じところへ飛べ」

その時、茜の頭に慶の言っていた台詞が思い浮かんだ。

『足場を崩されたら向こうで機能できるのは修しかいない。が、こちらも茜しかいない。

修は間違はなく邪魔な茜を飛ばしに来る。触れられたら飛ばされるけど、それは茜も同

じだ。触れたものに、重力をかけて吹き飛ばせるだろ?』

そして、修の手が自分に触れる瞬間、振り返って微笑んだ。

「けーちゃんの言ってた通りだ」

「んなっ……!??!」

そのまま茜は修を吹き飛ばした。そして、そのまま空中から猫を追撃する。さらに、

「遙?間違いないのね?」

「僕の予知は絶対だ」

残り6人の岬が猫を包囲した。猫がこの先、どの方向に逃げるかを遥が予知し、岬6人がそのベスト6の方向から岬が突撃した。さらに、上空から茜。その時だ。本物の岬に誰かの手が乗った。

「?」

「ごめんね、岬ちゃん」

光だった。光の能力が発動し、岬は子供になる。すると、連鎖的に他の岬も子供になった。

「しまった……!」

そのまま光は猫を確保しようと飛び込む。上から茜。結果、二人は猫の上で激突し、気絶した。

「あらら……」

苦笑いで葵が見ていると、後から誰かがやって来た。

「お父さん……」

父親だった。

「タイムオーバーだ」

結果、引き分けになった。

第19話

1月3日になった。昨日までの王族としての務めは終わり、パーティやら何やらに参加せられ、全員お疲れムードである。その為、ほとんど全員が昼まで寝過ぎす羽目になった。唯一早起きした葵は玄関に出た。

「ほっ、さむっ」

白い息を吐きながらポストの中を漁ると、もう3日目なのにたくさんの年賀状が届いていた。それらをすべて回収し、炬燵に入ると仕分けを始めた。

(私、奏……これも奏、輝、茜、私、光……)

と、心の中で呟きながら分けているときに、事件は起こった。

(あら、今年は慶のも来てるのね。クラスに友達が出来たみたいで良かったわ。

……あれ?慶?)

どたどたと走って葵は茜、慶の部屋に入った。

「慶!」

「……んー、どうしたのお姉ちゃん……………」

茜が眠た気に起きた。

「昨日まで動きつばなしだったんだからゆっくり……」

「そんな事より！慶は？！？一日から見てないわよ私！」

「けーちゃん……………」

ぼーつとした目で隣のベッドを見た。誰もいない。眠たげな目が見開かれた。

「けーちゃん？！」

全員慌てて起こし、会議。

「と、いうわけで慶の居場所に関当りのある人！」

すぐに修が手を挙げた。

「はい修ちゃん！」

「一日からいないんだったら、ミケの一件で俺が飛ばしてから迎えに行くの忘れてたのかもな」

「すぐに迎えに行きなさい！」

そんなわけで、修は瞬間移動して迎えに行った。南の島には大量の魚や動物の骨と焚き火の跡、そして慶がいた。

「よ、よう……………」

「怒ってないし。……………でも修は殺す」

ボソッと物騒なことを言う慶。

「ほんとにごめんね。私もお姉ちゃんなのに全然気付かなかった」

茜も詫びた。

「いいよ別に。クソダルい新年パーティサボれたと思えばマシに思えるし。……………でも、辛かったなあ。よく泣かなかったなあ、俺……………」

しみじみと呟く慶だった。

*

慶は修を殺す代わりに奪ったお年玉を持って出掛けた。

（何買おうかな……………。こんだけあればMG10個は買えるよな……………）

なんて考えながら歩く。すると、こんな声が聞こえた。

「やだ！離してください！」

「いいから金出せって。お年玉いっぱいもらってんだろ？」

「持つてない！やめて！」

それを聞いて慶はため息をついた。で、ゴキツゴキツと指を鳴らす。

「さて、と。今年一発目」

言いながら路地裏へと入った。女の子が二人の男に囲まれている。

「おーい。そこまでにしとけよ」

気だるげに声を出すと、その三人は振り返った。

「あ？なんだテメエ。関係ねえだろ」

「ほつとけよカス」

「ほつとけ、かあ……ダメだよお前……ほつとかれる奴の気持ち分かってねえなあお前

……分かってないようん……」

「はあ？何言ってるんだお前」

「まあいいや。テメエもついてねえ野郎だ。この子と一緒に金出してもらおうか」

「ついてない、か。確かに。正月から無人島に飛ばされてゲームセットしても迎えに

来てもらえずに無人島生活我慢選手権だ。確かについてない……」

「本当に何言ってるんだこいつ」

「もうめんどくせーや。逃げる？やる？」

「やるに決まってるんだろ！」

「死ねコラアッ！」

と、殴りかかってくる2人。それを二発で壁に減り込ませた。

「……………無人島行ってから少し強くなったかな」

と、呟いた時だ。

(しまった。こういう行動が国民の人気一位獲得の原因になってるんじゃないか……！)

そう思った瞬間、さっさと退散しようとした。だが、

「あ、あのー！」

声をかけられてしまった。仕方なく振り返ると、助けた女の子が立っていた。

「はい？」

「た、助けていただきありがとうございます！？」

その子はペコッと頭を下げた。

「いやそんな気にしないでください。じゃっ」

「櫻田慶さん、ですよね!!？」

(うわあいバレてる)

ガツカリしつつも慶は頷いた。

「そうですけど」

「その、よかったら……お茶しませんか？」

「え、いや……………」

「お、お願ひします！」

勢いよく頭を下げられ、断るに断れなくなってしまった。

「わ、分かりましたから頭上げて……」

「では行きましょう！あ、名前まだでしたね」

その女の子はそう言うと、笑顔で言った。

「米澤紗千子です」

第20話

何処ぞの喫茶店。慶と、先ほど助けられた女の子は一緒に座っている。あ、女の子サングラスしてるからね。言い忘れたけど。アイドルだし。

(米澤紗千子……どっかで聞いた気がしなくもないんだが、なんだっけ？なんか光あたりが騒いでた気がするんだけど)

「そ、その、慶さん」

「あ？」

「二度もたすけていただいて、ありがとうございます」

「二度？なんで？いつ？」

「実は、前にストーカーにおわれていたところを助けていただいて……」

「あー」

(どっかで見たことあると思ったらそれか。あれ……確かそいつって……なんだっけ？)

と、思い出しながらも慶は言った。

「別にいいですよ。ただムカついたから減り込ませただけですから」

言いながら注文したコーヒー（ガムシロ、ミルク3個入り）を啜る。

「それで、今日はどこに行こうとしてたんですか？」

「あー今日は買い物です。一昨日から今日の朝までサバイバルやってたから正月中に買

う予定だったもん買いに」

「サバイバル？」

「とにかく買い物ですよ」

「そうですか。何を買うつもりだったんですか？」

「とりあえずプラモデルかな」

「プラモデル？」

「ガンダムの。とりあえず4機欲しいな」

（なるほど……趣味はプラモデルか）

紗千子は心のメモをみると、深呼吸をした。そして言った。

「あ、あの！もしよろしければ一緒に行っても構いませんか？！」

「ふえ？なんでまた急に」

「お願いします！その……行きたいんです……」

「いやそんな言われても……」

だが、慶はハツとする。

(俺と女の子が一緒↓誰かに見つかる↓スキヤンダル！熱愛発覚！↓俺の支持率大幅ダウン)

「いいですよ。行きましょう」

「！は、はい！」

5秒で手のひらを返す慶だった。

*

櫻田家。

「いやー……流石にけーちゃんには悪いことしちゃったね……」

光がテレビを見ながら言った。

「ああ。そーだな……あの時に『俺のお年玉あげるから』がなかったら確実に俺死んでたな……」

「……修ちゃん、大丈夫？」

「ああ。大丈夫だ」

そう答える修はボツコボコだった。

「むしろ、奏は大丈夫なのか？」

「あー……奏ちゃんは……」

光がチロツと部屋の間を見ると、奏が壁に頭を打ち付けていた。なんか呪いの言葉みたいなのをブツブツ言いながら。

「……………まあ、そうなるよな」

「誰か止めてあげなよ」

*

ビツクカメラ。そのプラモコーナー。

「わあ！これ全部ガンプラなんですか？」

驚く声を上げる紗千子。

「ああ。つと、こつちだな」

慶はMGの方へ。普段ならHGなのだが、正月ということで奮発したらしい。もらった金だし。

「うわあ、金色ですよこれ……」

「百式?……ああ、ゴールドスモーね」

「なんかお金持ちってイメージあります……」

「まあ分からなくもないですね」

なんて話しながらも慶はプラモを選ぶ。

「なあ、どっちがいいと思いますか?」

「へっ!? わ、私!?」

慶が聞くと、ビクツとする紗千子。

「や、この黒いリックディアスと赤いリックディアス、どっちがいいかなーって」

「へ? あ、あーそういう……。何が違うんですか?」

「パイロットが違うかな。俺的に黒い方が好きなんだけど、赤い方は色んな人が乗ってるからさ」

「なるほど……。んー……なら、赤い方かなあ」

「そっか……。なら黒い方にするわ」

「ええっ!? なにそれ!」

「誰も米澤さんが選んだ方を選ぶなんて言っていない」

「ずるいよー!」

「それが人間だ」

「なんか大袈裟だし！」

なんて話しながらリツクディアスを買った。その後もお互いに色んなところを周り、気が付けば夕方になっていた。

「そろそろ帰るか」

「そうだね」

「送るよ。家まで」

「え？いい、いいですよ」

「ストーカーが多いんだろ？」

「う、うん」

「しかしストーカー多いとか、アイドルみたいだな」

「はっ？」

「えっ？」

「……………や、なんでもありません。そうだ、今日の8:00からテレビ見てみてください。
10chで」

「へ？なんで？」

「いいから。お願いします」

「？ お、おう」

「あと、その……アドレスの交換出来ますか？」

「別にいいけど……LINEじゃダメなのか？」

「じゃあ両方で」

「うい」

*

紗千子を送った後、慶は帰宅した。

「ただいま」

「おかえりいっつー！」

ガバツと飛び込んできた奏。それに抱き着かれながらもまったく無視しながら慶は家の中へ。

「あ、けーちゃんお帰り」

「おう、光」

言いながら慶は時計を見た。19:30。

「なあ、20:00から見たいテレビあるんだが、いいか？」

「お、けーちゃんが珍しい。何チャン？」

「10」

「おーあたしと同じ。いいよ」

「さんきゅ」

「今日はさつちちゃんが出るんだー！Mステ！」

「ふーん……音楽番組か……」

「そんなのも知らずに見たいとか言ってたの!?!?」

「はいはい、さつちちゃんねえ……」

そんなことを考えながら奏を引き剥がしてその辺に捨てながらソファアに座って携帯を弄った。

「は? さつちちゃん?」

「え、なにどしたの?」

「光、さつちちゃんの本名は?」

「はあ? 米澤紗千子だけど?」

「………よ、米澤さん……?」

慶は携帯を見てアドレス帳を確認。米澤紗千子の文字。

「………す、スキヤンダルになるのむしろ向こうだったかも……」

「どしたの?」

「や、なんでもない。サイン頼んどきや良かったなーって」
とりあえず今度会うときに頼もうと心に固く誓ったのだった。

第21話

3月になりやがった。葵は卒業し、春休みに入り、それぞれの学年が一つずつ上がるうとするこの頃、奏は張り切っていた。

(慶の誕生日プレゼント……何がいいかな)

そんな事をかんがえながら街を歩いている。

(あの子の喜ぶもの……まず鞆や衣類は論外ね。ゲームかガンブラ、漫画の大人買い……)

すると、見掛けたのはブックオフ。

(いえ、中古品はやめておきましょう)

そう決めるととりあえずヤマダ電機に入った。ここなら本もガンブラもゲームもある。とりあえずガンブラコーナーへ。正体が奏だとバレると選挙に響くので、帽子と伊達眼鏡をかけている。そして、メモ帳を開いた。慶の持つてるガンブラを全て記入してある。

(……………ダブらない様に選ばなきゃね)

ちなみにこの日のためにガンダムシリーズのアニメを全て見た奏である。で、改めてメモを見直した。

(……………なるほど。慶は実弾系の武器を使うモビルスーツが好きなのね。と、なる……………)

奏は候補の中にハイゴッグを入れておいた。

(次はゲームね)

ゲームコーナーへ向かった時だ。奏の携帯が鳴った。

「もしもし?」

『あー俺。慶』

ギョツとする奏。

「なっ、何?」

『いやーもうすぐ茜の誕生日だろ?だから誕生日プレゼント買うの手伝ってくれ』

(ほっ……………そっちか。良かった)

と、思いつつ言った。

「別に構わないわよ。何処にいるの?」

『駅前のスタバ』

「分かった。今行くわね」

そのまま通話を切った。

(慶とデート♪)

とか考えながら。

*

だが、待ち合わせ場所に着いた瞬間、奏は固まった。慶が知らない女……いや知ってるけど知らない女と一緒にいたからだ。

「つまりねけーちゃん。もう春になるから冬物より夏物の方が……」

「なるほど……。あ、奏来た」

慶がそうつぶやくと手を振ってくる。それに対して奏は氷の微笑で返した。

*

「で、どういうこと？」

2人にジト目で睨まれる慶。

「いやだからどうということもなにも2人に手伝って欲しいんだって。茜へのプレゼン
ト。俺、女心とか皆無だし」

「そのようにで」

声を揃える2人。心底ビビりつつも慶は言った。

「あー……とりあえず紹介するわ。さっちゃん」

「……………さっちゃん？」

その紹介を聞いてさらに機嫌の悪くなる奏。

「で、さっちゃん。こつちのおっぱい魔人が奏」

「……………どうもです」

「失礼ですが、」

と、奏が口を挟んだ。

「慶とはどのような関係で？」

「お友達です。ね？けーちゃん」

「え？あ、ああ。まあ」

「……………けーちゃん？」

声を低くしてそう復唱する奏。

（えっ、俺今なんかマズイこと言ったかな……）

「けーちゃんだったら優しいんですよ。今日もここのお金奢ってくれるみたいで」

「そりや、まあ付き合ってもらってるわけだし……」

「なら私の分も出してもらおうかしら？」

「いやお前は姉だろ。そうだ、むしろお前が俺の分奢れよ」

「……………はあ？」

ギロリと睨む奏に心底びびる慶だった。

「お、奢らせていただきます……」

そんなわけで、修羅場になった。

第22話

そのまま三人でヤマダ電機へ。

「おいお前ら。茜の誕プレでなんでヤマダ電機だ」

「いいじゃない、意外と喜ぶかもよ電化製品」

奏がしれっと答えた。

「いや意外性狙いですか……」

「いいから黙って付いて来なさい」

「俺が付き合ってもらってるはずなんだが……」

納得いかない顔ながらも慶はついていった。で、到着したのはガンプラコーナー。

「つてお前ら！誰の誕プレ買いに来てるか分かってんの？？」

と、いうツツコミも無視して二人は選んだ。すると、慶は「おっ」と声を上げる。

「へえ、ガーベラじゃん。もう発売してたんだ」

「？ それなに？」

紗千子が聞いた。

「ああ、これはガンダム試作4号機。カッケーだろ」

「そうね。でもガーベラって何処かで聞いたような……」

「おつ。お前ガンダムいける口か？そのガーベラはガーベラテトラじゃない？」

「確かキララの機体だよね！」

「あーそつち選んじやつたかー……」

ガツカリする慶。すると、奏が口を挟んだ。

「ガーベラ・テトラ。元々はガンダム開発計画においてガンダム試作4号機。強襲、突撃、白兵戦用というコンセプト。ガンダム開発計画が漏れた後に外観をジオン系MSであるかのように仕様変更してある」

と、ポケモン図鑑のような説明をした。

「……………でしょ？」

「お、おう……。奏って、ガンダム好きだったの？」

「ちよつと興味出ただけよ」

「いや絶対嘘ですしおすし」

紗千子も少し引いていた。

「で、何よ。これ欲しいの？」

「あ、あー。いや別にそういうわけじゃないんだが、俺は今はほら、サイサリスかドーベ

ルウルフが欲しいし……」

「ふーん……分かった。もういいや。行こう」

「は？もういいの？」

「うん」

そのまま奏と慶が去ろうとした時だ。

「ま、まって！少しでもだけようあるから！」

「は？ガンプラコーナーで？」

「い、いいから待ってて！」

そう言うと紗千子はガンプラの方へ。

「ガンプラ買うのか？」

「ほら慶はこっちに来なさい」

「は？いや待ってろって……」

「だからこっちで待つわよ。乙女心くらい考えてあげなさい」

「はあ？」

「早く」

「わ、分かったよ……」

仕方なく慶は離れた。

*

そのまま三人でしばらく買い物をした。結局、慶が茜に買ったのは鞆とGNアーチャーのMGだった。ちなみに少し前の奏と修の誕生日にはセラヴィーとアリオスをプレゼントしている。

今は帰宅中。

「いやーいい買い物したわ」

「慶、せっかくだから米澤さんを送って行ってあげなさい」

「!」

「はあ? いやいいけど……」

「じゃ、なるべく早く帰ってこないでね」

「なにそれ、俺に帰らぬ人になれってか?」

「だいたいあつてる。じゃ、またね」

そのまま別れ、慶はまた紗千子のマンションの前。

「じゃ、またなさつちゃん。今日はマジ助かった。サンキューな」

「う、うん。それでさ、けーちゃん」

言うのと、紗千子はバツと手に持っていた紙袋を慶に突き出した。

「はいっ」

「あん？」

「誕生日、おめでとう」

「……………えっ？これ俺に？」

「中、開けてみて」

言われて慶は紙袋を受け取り、中を見るとドーベンウルフが入っていた。

「おおおおお！ドーベンウルフじゃないか！マジでくれんの？？本当に？？」

「うん」

「マジかアアアア！！？俺お前好きだわ！」

「ふえっ！！？」

「や、マジでサンキューな！今度絶対なんかお礼するから。じゃな！」

言うだけ言って慶は帰って行った。

*

慶は帰宅していた。家に帰ったら茜の誕生日会だから少し楽しみにしていた。ケー

キが食い放題だからだ。

「ただいまー」

と、家に入ると、茜がリビングの前で待っていた。

「おう、茜」

「あ、けーちゃん……」

「どした？何してんの？」

「また準備できてないって締め出された……」

「おい、それ茜に言うのかよ。葵の時に比べて雑過ぎるだろ……」

「とにかく大人しく待つことにするよ……」

「じゃ、俺は中に入ってるぞ」

「なんでよ！けーちゃんも誕生日でしょ!!?主役だよ!!?」

「待機、怠い」

「ちよっ……ダメだって……!」

だが、茜の静止を無視して慶は部屋に上がり込んだ。そしたら、パンパンパーンツ！とクラッカーが鳴った。

「……………あ?」

『茜、慶。誕生日おめでと〜!』

「……………へ？」

二人して間拔けな声を出す。

「ふふ、大成功ね」

葵が微笑んだ。そして、遥が解説する。

「葵姉さんは、慶兄さんが待つことをしないことを予測して茜姉さんを待機させたんだよ」

「なるほど……………」

「まあ驚いてたし、サプライズにはなったんじゃない？」

奏がまとめると、まあそれもそうだねーみたいな空気になった。そんな中、葉が一歩前に出た。慶の方だ。

「どうした葉？結婚する気になった？」

「修お兄様がよろこぶって言った、葉から、誕生日おめでとう」

で、手招きする葉。頭に「？」を浮かべながら慶はしゃがんだ。すると、

「んっ」

「」

頬にキスされた。その時だ。慶はうごかなくなった。

「うれしい？」

「

「おにいさま……っ？」

返事はない。隣にいた茜も不審に思い、慶の肩を掴んだ。

「ちよつと、慶？………死んでる」

第23話

ある日の夜中。慶は寝ていたのだが、胸の苦しさに目が覚めた。恐る恐る目を開けると、ボルシチが立っていた。

「○△□※☆☆☆☆ツツ!!?」

声にならない叫びを上げながらベッドから転げ落ち、隣に寝ている茜を叩き起こした。

「茜! 起きろ! 助けて!」

「ん……」

が、中々起きない。そうしている間にボルシチはのっしのっしと慶に向かって歩みを進める。

「やめてえ! 来ないでえ!」

と、声を上げた時だ。

「もお……うるさいなあ……」

「！ 茜！ 助けてください！ 明日辺りにスタバでなんでも奢ってやるから！」

「わかった、わかったから……。で、どうしたの？」

「ぼ、ボルシチが……」

「やつぱりね……。はいはい、ボルシチおいでー」

茜は言いながら起き上がり、部屋から出る。その後を追うボルシチ。下に行つて茜はボルシチにキャットフードをあげる。壁の脇から慶は隠れるように覗いた。

「……いつもいつも飯をねだつたのか。なんで俺を起こすんだよ……」

「さあ？ 仲良くなりたいたいんじゃない？」

「言つとくが無理だぞ。号泣するぞ」

「情けない……。本当に男の子？ 強盗の方がよっぽど怖いじゃない」

「お前は分かつてない。その人類滅亡兵器の恐ろしさが……」

「はいはい、わかつたわかつた。じゃ、そろそろ寝るよ。おやすみボルシチ」

だが、せつかくあげた飯にボルシチは興味を示さない。それどころかビニール袋に嘔み付きはじめた。

「ビニールのがマシだつての？？」

「もういいだろ。ビニールでもなんでもあげとけよ。そいつの好きにさせてやれよ」

慶が言う二人は自室に戻つた。で、ベッドに茜が入つた時だ。

「……………茜」

「なに？」

「その……………眠れないから……………」

「またあ？仕方ないなあ……………。ほらおいで？」

茜が言うと、慶は同じベッドに入った。

「いつも悪いな……………」

「別にいいよ。でももう少し慣れなよ？」

「それはわかってるんだが……………だいぶ前にコタツに足入れたら噛まれて……………」

「あー騒いでたね……………」

「ほんとごめん……………」

「いいよ。私だつて監視カメラで迷惑かけてるもん」

「そうだな。さつき謝ったのなしで」

「ベッドから落とすよ？」

*

翌日。

「と、いうわけだ葉。こいつがなぜ俺のところに来るのか教えてくれ」
「わかった」

で、能力発動。

『彼の元へ行くと涙目になって逃げようとするから面白いwww』

「上等だこんの糞猫がオラアツ!!? 表出るハゲエ! 粉々に粉碎してやるよオツ!!?」

「にゃー」

『よろしい、ならば我が秘伝奥義ー真・六爪桜の舞ー(ルビの振り方は各自テキストに読んでください)で返り討ちに……』

「ごめんなさい参りました」

と、慶は土下座した。すると、葉がボルシチにデコピンした。

「ボルシチ、お兄様いじめちゃ、めっ」

「なう……」

すると、一歩後ずさるボルシチ。そして、葉は泣きそうな顔をしている慶の頭を撫でた。

「お兄様、だいじょうぶ?」

「おっほおおおおおお! 俺もう死んでもいい!」

「だいじょうぶ?」

なんてやってると、奏が呟いた。

「私もそいつの性格なんとなく好きになれないのよね」

「またまたそんなこと言って。本当はけーちゃんがいじめられてるからじゃないの?」

岬が言った。ニヤニヤしながら言った。

「そ、そんなわけないでしょ」

「いや、むしろいつもけーちゃんが普段見せない顔を見させてくれるから好きなのかも?」

「だ、だから違うわよ!」

すると、岬はボルシチを抱っこして慶に放り投げた。

「あああああああツツ!!? 岬テメエ後で木っ端微塵に……!」

パシヤツと奏の携帯からシヤツター音が鳴った。

「後者だったかー」

「……………悪くないわね」

「二人とも、お兄様いじめちゃだめ!」

そんな二人に葉が立ち塞がった。

「うっ、ごめんなさい……」

「葉、本当に結婚しない?」

「けーちゃん、それだから気持ち悪いって……」

岬が割と本気で引いていると、ボルシチはソファで寝転がってる茜の上に座った。
「そういえば、」

と、修がそれを見て言った。

「ボルが茜以外の上で寝てるのってあんま見ないな」

「そりゃ、オツパイ小さいけど柔らかいからじゃね？」

「けーちゃん？明日から一緒に寝てあげないよ？」

「ゴメンなさい……」

「えっ、待つて。あなた達一緒に寝てるの？」

奏が聞いた。

「うん。最近、けーちゃんのことボルシチが起こしにくるからその度にけーちゃんが一人で寝れなくなっちゃってねー」

「羨ま……あつ、いやだめよ。姉弟で不健全だわ」

「いや本音だだ漏れだから……」

茜が軽く引いてると、その隣に光が寝転がった。

「それならあたしも小さくて柔らかいよー」

「いや光、お前の方が大きい。無理だ」

「そう？あたしまだ小学生だし茜ちゃんよりは……」

「揉んで見ればわかる。おい、二人とも服を脱げ」
殴られた。

第24話

とある日。葵が自室にいと、ノックの音がした。

「葵、入っていいか？」

慶の声だった。

「いいわよ」

「失礼しまーす」

珍しく礼儀正しく入ってきた。と、思ったらポテチの袋とか抱えていた。

「どうしたの？一緒に食べたいの？」

「あーまあそんなとこ」

「あら素直」

「少し聞きたいことあってさ」

「なあに？」

「葵の本当の能力って何？」

その瞬間、ギクツとする葵。

「な、なんのこと?」

「ウソ下手だなーお前。 ってことは、本当の能力じゃないって俺の勘は正しかったってことだな」

「いいえ。私の能力は完全……」

「見たことは全部覚える……だったか?だが他の兄弟の能力は学力にはプラスにもマイナスにも支障は出ない能力ばかりだ。だが完全記憶だけは明らかに異質だ。やろうと思えば誰でもできる」

「そうかなあ?私は3年前の今日のお昼とかも覚えてるけど?」

「そんなもん、テキトーに言えばどうとでもなる。誰も覚えていないことだからな」

「……………」

「まあどれも俺の推測だけど。違うか?」

「……………お姉ちゃん悲しい。そんな疑い深い弟になっちゃって……」

「うるせーバカ。まあ俺にとっては能力なんてどうでもいいことなんだけど」

「じゃあなんで聞いたのよ」

「気になったから?もしかしたら俺と同じで能力ないんじゃないかなーつと」

「残念な理由だったのね……。でも残念ながら私は能力あるわよ」

「ケツ、ツマンネ。じゃあいいや、なんでもない」

そのまま慶は部屋を出ようとした。だが、扉が開いて鼻に直撃した。
「オゴツ！」

割とモロに直撃したらしく、鼻血を抑えて悶える慶を無視して入ってきた茜は葵に土下座した。

「葵姉様、高校ご卒業おめでとうございます」

「えっ？あつ、いやうん」

「これからは私はお姉ちゃんの手を借りず、一人で登校しなければなりませんね」

「あ、ああ。うん。そっか……」

「うっ……うぐっ、ふぐうううううっ」

「ちよっ……茜!??本気で泣いてる!??」

「うええええええええっ!!?」

「お、落ち着いてよ！ほら、そこにいる慶もいるんだし……」

「葵、いい歳して鼻血出ちゃった……ティッシュない？茜は後で殺す」

「はい」

慶がティッシュを鼻に入れている中、茜は言った。

「今のままではお姉ちゃんに心配をかけてしまうことでしょうか……。しかし私にはお姉ちゃんに頼ることなく登校を成し遂げる覚悟があります。その証明として今からお買

い物に行つてきます」

「一人で!??大丈夫なの!??」

「丁度いいな。オイ茜、テメエ俺に鼻血出させた詫びとしてついでにガンプラ、ドラクエ、モンハン、黒バス全巻、劣等生全巻、あとトイレットパーパー買ってこい。もちろんお前の金でな。一つでも忘れたら町内全裸でうさぎ跳びな。5兆周」

「慶、やめなさい」

葵に止められたのだが、慶は止めない。

「いやいやあ、ハードルは高いほうがいいでしょう」

「高過ぎよ、いくらなんでも」

「分かった！けーちゃん、私頑張る！」

そのまま行った。

「慶」

「何」

「鬼」

「知ってる」

*

そのまま慶は葵の部屋を出た。が、すぐに遙にMS凶鑑を借し、部屋に向かった。

「遙、はいんぞで」

「ふあつり？」

返事を待たずに入った。すると、高速でパソコンを閉じる遙。で、恐る恐る慶の方を見た。すると、真顔だったのだが、目を閉じて顎に手を当てる。そして、目を開くと、目玉だけで遙を見た。で、

邪悪にニヤリと口を歪ませた。

一発で嫌な予感のする遙。その瞬間、慶が飛び掛った。

「ちよつ……！やめつ……！」

「遅いな」

いつの間にか慶はパソコンを奪っていた。

「ちよつ！見るなよつ……！」

「黙れ」

軽く腹パン決めて黙らせると、お腹を抱えて苦しむ遙を無視してパソコンを開いた。映っていたのは茜の写真だった。で、さらに口を歪ませる。

「へえ、何これ？」

「い、いや……それは、その……」

「もしかして、茜お姉ちゃんの観察日記的な？うわあ、シスコンもそこまで度を超えるとちよつとキチイわあ……てか普通に引く」

「ち、違うよ！ていうかパソコン返せよ！」

「残念ながらその願いは叶わない。これは茜に上納する」

「それはやめて！お願いだから！」

「だが断る！」

「んなつ……!!？」

なんてやっていると、ガチャツと扉が開いた。

「何してるの？」

茜が入ってきた。遥の世界が終わる音、確かに聞こえた。

第25話

「と、いうわけだ茜。この弟はパソコンで茜の写真を見ながらハアハアしていた」

と、慶が宣言したものの、茜は遥のお腹をさすっている。

「腹パンされたんだって？大丈夫？」

「平気だよ……。痛いのは一瞬だったから」

「まったく、酷い兄もいたものだよね」

言いながらジロツと慶を睨む茜。どうやら、写真の件はなかったことになりそうだと遥が一息ついたときだ。

「で、なんで私の写真なんて見てたの？」

全然助かってなかった。

「そうだと遥。オカズにするんならこんなペチャパイより奏とかのがデカイぞ」

「あんたは黙って死んで。で、なんで見てたの？」

「死ん……。!??そこまで言うかね普通……。てかお前買い物は？」

「遙に付いてきてもらおうと思っただらこんな事になってたから……」

「一人で行くんじやねーのかよ」

「お、お姉ちゃんの手を借りないって言ったんだもん！」

「てか俺のお使いも含んでんだからマジ早く行けよ」

「あんなにたくさん買ってこれるわけないでしょ!!?」

「さつきは威勢良くうなずいてたくせに……」

「あ、あれはその場のノリで……」

「男に二言はねえだろ！」

「私は女だよ！」

「男らしい胸して何言ってるんだ。俺の方がおっぱいデケエぞ！」

「けーちゃんのは大胸筋でしょ!!?」

で、茜は遙に抱き着く。

「遙あく。けーちゃんが私の胸バカにする……」

「う、うん……」

「で？写真はなんなの？」

「このタイミングで!!?」

「ふーん……言わない気なんだ？」

「ま、待って！そんなこと言ってない！……いや言うとも言ってないけど……」
すると、慶が携帯を開いた。

「あーもしもし岬か？実は遥が……」

「待って待って！もう少しだけ考えさせてください！」

「どーぞ」

「……………」

「タァーイムアァーツプ」

「早過ぎない!?？」

「もしもし岬……………」

「わかった！言う！言いますから！」

遥が言うと慶は携帯をしまった。

「実はこれ、僕たち王族のファンサイトなんだ。これに茜姉さんの写真とかが色々はっ付けられてて。僕はそれを遠回しにやめさせようとしてたんだよ」

「なんだツマンネ」

「ふ、ファンサイトって……………どんなこと話すの？」

恐る恐る茜が聞く。

「それは、可愛いとか、なんだとか……………見えただの、見えてないだの……………」

「見えたって、何が？」

「そんなん決まってんだろ。パンツだよ」

慶があっさり言うのと茜は一発で顔を真っ赤にする。

「おっ、この茜パンツ見えてね？ほらっ」

「やめて！見ないでえ！」

「あ、これブラスケしてる。てかお前いまだにスポブラしてんのかよ……」

「やめてっつてばあ！」

顔を真っ赤にしてパソコンを奪おうとする茜だが、慶はものともせずにはぐす。

「まあ別に俺に見られるくらいならいいじゃねえか。中2くらいまで一緒に風呂入ってたんだし、その頃から体型変わってないし」

「一々、私の体をバカにしないと会話出来ないわけ？！」

涙目でそう言うのと茜は泣きながら「おねえちゃん！」と部屋を出て行った。

「兄さんってさ、」

「ん？」

「ドS？」

「まあ、『ド』が付くほどかどうかは分からんが」

「あっそう……。でもあんま茜姉さんを虐めないであげてね」

「おつ、なんだ。浮気か？」

「いや彼女いないから僕」

「岬」

「違うから。茜姉さんが慶兄さんに虐められて泣き付くのとて大抵は僕か葵姉さんなんだから」

「あー……：そういうやそうか。大変だな。お前の姉と妹は」

「岬は姉だよ」

「へ？そだっけ？」

*

ある日の学校の図書室。慶が本を取ろうとした時だ。別の人と手が重なった。

「あつ」

横を見ると、佐藤花が立っていた。

「あつ、修の彼女」

「かつかのつ彼女だなんて……：まだそんな関係じゃないですよ！保留って話だし！」

「そうすか。これどうぞ」

ひよいつと本を渡した。

「えっ? け、慶くんも読みたかったんじや……?」

「いや、彼氏の分のお弁当作ろうと頑張ってる人がいるなら譲りますよ」

「なっ、なんでわかったの!? ……じゃない! 違いますから!」

「いや遅過ぎますよ……」

「むう……先輩をからかうなんて……。ていうか慶くんは料理とかするの?」

「それなりには出来ますよ。この前、栞のためにマルゲリータピザ作りました」

「よくそんなの作れるね!?」

「ていうか俺は基本的に出来ないことありませんから」

「………: そういえば修くんも慶くんは料理上手って言ってた気が……」

「修くんって呼んでるんですね」

「ちっ違っ……! だからからかわないですよ!」

「はいはい。じゃ、俺はこれで」

「あっ、待って!」

「はい?」

「この本、読みたかったんだよね? よかったら、一緒に見ない?」

「えっ、いいんすか?」

「うん。そうすれば慶くんもまた別の日にここに来ることもなくなるでしょ?」

「や、そういう事じゃなくて……。まあ佐藤先輩がいいならいいんですけど」

「全然大丈夫だよ。ほらあつちの机空いてるし」

「は、はあ」

そのまま慶は後ろをついていった。

「……………あれは佐藤と……………慶か?」

第26話

自宅。慶が茜とモンハンをやつてるときだ。携帯が鳴った。

「悪い茜、電話だ。キャンプ戻る」

「ええっ!? ジンオウガ亜種二頭は一人じゃ厳しいよ!」

「ならお前もキャンプ戻れ。……つと、もしもし?」

『あ、けーくん?』

「さっちゃんか、どした?」

その言葉に耳がピクツと動く茜。

『その、少し相談があるんだけど』

「相談?俺に?なんで?」

『詳しいことは会った時に話したいから。空いてればでいいんだけど』

「When?」

『明日とか……』

「いいよ。何処に待ち合わせ?」

『うーん……あまり人目の付かないところがいいんだけど……』

「ならいいところあるぜ。とりあえず〇〇駅前でいいか？」

『うん。じゃあまた明日ね』

「おー。変装忘れんなよー

『分かつてるよー』

通話は切れた。

「……………アイドルってのも暇なのか？光とかなんかいつも家にいる気がするし

……………。っと、お待たせ。片方は角も尻尾もないからさつきと……………」

「けーちゃん！」

「お、おう何？」

「今の電話の相手、誰？」

「あ？……………あつ」

やつべえーつと頭に手を当てる慶。

「ねえ、誰？誰なの？さつちゃんって言ってたよね？ねえ、誰？誰？誰？」

「ヤンデレかお前は。落ち着けよ。そして少し待て」

慶は電話をかけた。さつちゃんにだ。だが、留守電になる。

「……………やつぱアイドルは忙しいみたいだ」

「ダメ」

「なんでよ！」

「だってお前絶対めんどくさいもん」

「どういう意味!?」

「1、監視カメラを避ける必要がある。2、さつちやんに会うとお前は絶対暴走する。3、向こうはアイドルなのにお前はアホだからバラしかねない。4、王族二人と一緒にとなると向こうにも気を遣わせる。よってお前は連れて行かない」

「ええー！そんなあ……」

絶望的な声を上げて項垂れる茜。すると、慶の携帯がまた鳴った。

「もしもし?」

『ごめんね！電話くれた?今仕事終わったところ!』

また紗千子だった。

「あーいや大した事じゃないからいいよ。ごめんなわざわざ」

『ううん。あ、そういうえげさ……』

と、2人が電話で楽しそうに話すのを恨みがましい顔で睨む茜だった。

*

翌日。慶はバイクに跨り出発した。その上空を茜と何故か遙が尾行する。

「行くよ遙」

「ちよつと待ってなんで僕……」

「いいから行くわよ」

飛んだ。で、慶は待ち合わせ場所に到着。

「おーい、さっちゃん」

「あ、けーくん！」

トテテと慶の元へ走る紗千子。

「五分オーバーだけど謝らない」

「何それー」

なんでやってる二人を上空で見ながら遙は呟いた。

「……………バカツプルか。吐きそう」

「うわあ！本物のさっちゃんだよ遙！」

「お願いだから能力解除しないでね。僕死にたくないよ」

地上でら慶がヘルメットを紗千子に被せている。そして、二人乗りをすると出発した。

「早かったり怖かったりしたら言えよ」

「うん」

言われて紗千子は、顔を赤らめて慶の腰に若干強く抱きついた。

「もつと飛ばすから」

「あれ!!? 飛ばしちゃうの!!?」

なんて話しながら慶の向かった場所は小さなプラモ屋だった。

「着いたぜ」

「プラモ屋?」

「ああ、ここなら誰にも何も聞かれないだろ」

「いやプラモ屋で相談ってシユール過ぎだよ……。いいよ近くのカフェで」

「えー俺新しいガンプラが欲しいんだけど……」

「何しに来たのよあなた……。まあいいわ。10分だけ待ってあげるから買っておいで」

「うーっす」

そのまま走って店に入った。その頃上空。

「ないわー」

「ないわー」

二人は声を揃えた。

*

そんなこんなで、どこぞのスタバ。

「で、相談してもいいかな？」

「ああ。どうしたんだ？」

「桜庭ライトって、知ってる？」

「知らない」

即答だった。妹なのに。すると、紗千子は話し始めた。

「聞いたってよかったわ……。私の後輩のアイドルなんだけどね？その子が、その……ライヴに手を抜いているように見えるの。だけど、才能があるからプロデューサーとかはその子を伸ばすつもりでいる。でも、私は負けたくないの。私は才能とかじゃなくて、地道に努力してここまで来たから……」

「すいませーん！チョコパフェ一つ！」

「話聞いてます？」

「ああ。で、つまりどういうこと？」

「つまり、その……負けたくないの」

「あつそ。闇討ちでもすればいいんじゃない？」

「真面目に聞いてるんですが」

「冗談だ。まあ才能に勝ちたいってのは分かるよ。俺も努力はして来たからな」

「そ、そうなの？」

「ああ。俺だけ王族で能力ないだろ？だから比べられるのが嫌で勉強運動その他諸々努力してきたからなあ……」

「なるほど……」

「けど、途中でやめたよ。努力するのを」

「な、なんで？」

「中3最後の剣道の大会。足の筋やっちゃって出場すら出来なくなった」

「っ」

「その時思ったんだ。俺は何のために努力してたんだっけって。で、周りに比べられないからってすぐに思い出した。けど、なんで周りに比べられなくなかったのかって思った。その問いに答えは出なかった。そして思ったんだ。別に他人は関係ないって。というか、他人と自分を比べたところで下らない優越感が劣等感しか感じられないんだ。競争原理とか言うけど、あれマジ意味分からん」

「……………」

「まあ少なくとも俺の考えだけだな。だからそいつがライブで手を抜いてるのに売れようがどうだろうが関係ない。自分が頑張ればそれでいいんじゃないの?」

「チョコレートパフェです」

「あ、ども」

そのまま慶はパフェを一口いただいた。

「そつか……。そういう考え方もあるんだ……」

「まあ、あくまで俺のポリシーだけだな。お前も自分なりのモットーとかあったりすればそっちに従えばいいんじゃないかね?」

「ありがとう。参考になった」

「あんま参考にしないほうがいいと思うけどな。あ、ついでにその夜神ライトって奴見せてくれよ」

「桜庭ライトよ。ほらこの子」

携帯には光が写っていた。

「ぶふっ!」

「ちよっ、大丈夫?!?」

「ごめっ……平気」

光かよ……こりや家でなんか言っておこうと心に決めた時だ。目の前に封筒を渡された。

「あん？」

「次のライブのチケットです。良かったら見に来てね」

「ああ。行くよ（光が不安だから）」

そのまま慶は紗千子を送って帰った。で、自宅。

「ふう……………」

一息つきながら自室に入ると、中には茜と遥がいた。

「「おかえりー」」

「おお。お前と遥に用があつたんだ」

「えっ」

ギクツとする2人。慶は笑顔で言った。

「尾行してたろ？」

「「ごめんなさい」」

「殺す。40回殺す」

悲鳴が響いた。

第27話

「光」

慶は光に声をかけた。

「んー？何けーちゃん」

「お前、ライブに手を抜いてんだって？」

「えー？そんな事ないよー。普通だよー」

「や、さっちゃんと言ってたから。素人目には分からんが、少なくともわかるやつにはわかったんだろ」

「待って、さっちゃんと知り合いなの？」

「友達みたいなもん。いいか、お前が手を抜くことによつて迷惑だと思ってる奴もいるし、客も金を払って見に来てんだ。俺が言うことじゃないとは思いますが、やるならちゃんとマジメにやれ。いいな」

「……………はーい」

言うだけ言つて慶は。パズドラを開いた。

*

ある日の櫻田家。能力暴走期間となつていた。目の前から消えたりふわふわ浮いたり石をめちやくちや精製したりして居る。

「カナちゃん。どうして石なんて精製してるの？」

「……………石ころはタダなもの」

茜が聞くと、めちやくちや神経を使っている奏が答えた。その横では遥の周りに数字がメチャクチャ光っていた。

「明日の天気は晴れの確率が85%……………明後日は雷の確率が65%……………」

と、思ったらソファア―では8人の岬がやりたい放題やっている。大人になった光が言った。

「岬ちゃん。分身邪魔」

「仕方ないでしょ！引つ込められないんだから！」

さらにリビングの別の場所。

「破壊しちやダメだ……………破壊しちやダメだあッ！うおおおおお！」

輝が必死に力を抑えている。

「机さん、熱いものを直接乗せられると嫌だね。椅子さん、いつもみんなに座られて大変だね」

葉が机と椅子に話しかけていた。すると、葵が帰ってきた。

「ただいまー。あつ、やっぱりみんな始まってたんだ。能力暴走期間……」

その背後に現れる修。

「なんでこんな能力のぼ……」

が、すぐに消えた。そんな中、ゴロゴロしながら慶がポテチを齧りながら言った。

「辛そーだな」

『呑気なもんだなお前は！』

唯一能力のない慶は余裕そうにゲームをしている。すると、立ち上がった。で、まずは奏の横へ。

「な、なに？今集中してるんだけど……」

そして、耳元で言った。

「ジュアツグ」

「だからなによー！」

その瞬間、外で重低音がした。

「な、何?？」

と、茜が外を見に行くとジュアックが外に建てられていた。本物の。

「うわっ! ろ、ロボット!」

「な、なにをするのよ! これいくらすると……!」

「集中しないと別の物作っちゃうけどいいの?」

「はっ! しまった! あー! なんで手錠なんて作ってんの私!」

で、慶は次に輝の元へ。

「膝カックン」

「ふあっ!?!?」

その瞬間尻餅を着き、床に穴が空いた。

「ああああっ! 床がああ!」

そして、次は遥の元へ。

「な、なに……?」

「光が茜よりおっぱい大きくなる確率」

「へっ? ひ、100%……」

「「ちよつと何を予知させてるのよ!」」

突っかかってくる茜と光。だが慶は光を茜に押し付けた。その瞬間、光も一緒に茜と

「浮く。」

「ひゃあつ!」

「茜ちゃん能力切って!」

「出来ないから浮いてるんだよ!」

で、ケラケラ笑う慶。その慶の左手にカシヤツと何かが掛かった。さつき奏が作った

手鎖だった。葵が笑顔で掛けている。もう片方は葵の腕に掛かっている。

「慶? 能力暴走期間が終わるまでしばらく大人しくしてなさい」

「えっ? ちよっ……」

「お風呂とかの時は外してあげるから」

「あの、怒ってる?」

「いいわね?」

「……………はいっ」

怖くて何も言えなかった。

「あ、奏。鍵ある?」

「作ってないわよ」

「はっ?」

「いや、だって手錠しか作ってないもん……」

「つ、作って！手錠の鍵！」

「手錠の鍵ってどんなのかしら……こんな感じ？」

ポーンと出て来た鍵。だが、合わなかった。

「合わないわよ？」

「待つて。今出すから」

「おいおい待てよ。勘弁してくれよ奏」

「はいはい、ちよつと待つて。手錠の鍵……手錠の鍵……」

また鍵を生成した。だが、鍵穴には入ったものの開かない。

「ちよつ……奏？」

「おい輝！これ引き千切れ！」

慶が言うのとめちやくちや神経を使いながら輝が歩いてきた。として、葵と慶の手首を

グツと掴んだ。

「行きますよ」

「待て待て待て！手錠の前に手首が千切れる！やめて！ストップ！」

「は、はあ」

「……………葵」

「な、何？」

「どうすんのこれ」

「今日はこのまま一緒にいるしかないわね……。明日、開けてもらいに行きましょう」
「えっ」

最も長い夕方が始まった。

第28話

飯の時間。必然的に慶と葵は隣になった。で、慶はお茶碗を左手で持ち白米をかつ込む。

「ちよっ……慶？」

「なんだよ」

「あなたが左手を使うと私がご飯を食べられないんだけど」

「なら食わなきゃいんじゃない？」

「いやそうも行かないでしょう。少しジツとしてるか片手で食べてくれないと……」

「めんどくせーよ。俺が食い終わるまで待て」

「あなたねえ……。分かったわよ」

言うとき葵は左手で食べられるものから食べて行く。例えばほら、刺して食べられる物とか。

「お姉ちゃん。大丈夫？アレだったら私が食べさせてあげるけど……」

ぶかぶか浮いた状態で茜が言った。

「そんな状態でどうやって食べろって言うのよ……。パン食い競争みたいになるじゃない」

「ご馳走様」

慶が食べ終わった。

「はやっ!?」

「ほら、早く食え」

「へ？」

「なんのために早く食ったと思ってんだ」

言ううと慶は照れ臭そうに顔を背けた。

「あー！けーちゃん照れてる！」

「黙れ岬……どの岬だ今言ったの」

「へ？」

今日の家族の約半分は岬だ、その為、飯係の奏も大変だったので茜が手伝っていた。

「しかし、手錠が葵姉さんと慶で本当良かったよな」

「どういう意味？」

修の何気ない一言にさつきからとても不愉快そうにしていた奏が聞いた。だが、修の

姿はすぐに消える。が、また現れた。

「い、いやほ」

シュンッ

「……他のと違っ」

シュンッ

「……えさんは外に干し……」

シュンッ

「……る能力じゃな」

シュンッ

「……じゃん？」

「ごめん。何言ってるかさっぱりわからなかった」

「だからこういうとだろ」

慶が改めて言った。

「葵とか遙とか岬以外の能力は他人にも干渉するだろ。だから下手したら俺もふわふわ浮いたり瞬間移動したり小さくなったり大きくなったりしてたかもしないんだよ。輝とか栞は小さ過ぎて俺の腰死ぬし」

「あー確かに」

「てか遥はともかく、岬は嫌だわ。周りが喧しそうだし」

『どういう意味!??』

「ほらうるさい」

なんてやりながら飯が終わった。

「さて、今日の金曜ロードショーってラピユタだったよな」

「嘘!ラピユタ!?あたしも観たい!」

言いながら慶は葵とソファーに座る。その葵の隣に光が座った。手錠してるから仕方ないが、葵と慶の距離は近い。それを見ると奏は不機嫌そうに舌打ちするも、能力暴走期間のため石の生成をするために部屋に戻った。すると、ラピユタが始まった。

「……………うーわ、懐かしい…………」

「出たよ。ムスカ」

「あ、出た。ここ本当シートすごいって思うよねー。殴るとは…………」

「あ、飛行石」

「おー。懐かしい」

などと話している時だ。隣の葵がモジモジし始めた。

「どうした?」

「う、うーん…………ちよつと、トイレに行きたいなーなんて…………」

『はあ!!?』

その場にいた光と遙とその他岬が立ち上がる中、慶は呑気に言った。

「じゃあ行くか」

『ええっ!!?』

「早く行くぞー。もうすぐシータとパズーがめっちゃくちや逃げるいいところなんだから」

「ま、待つてけーちゃん!」

ぶかぶか浮いてた茜が顔を赤くして声を上げる。

「と、トイレって事はお姉ちゃんのまん……っ!あそこを見ることになるんだよ!!?」

「別に姉弟なんだから問題ねーだろ。それに繋がってんのお互いの片腕だけなんだから、見られたくなかったら俺はトイレからはみ出てればいいし」

「そ、そうだけど……」

「安心しろよ。動画撮って売ったりはしないから」

「うん。したら国外追放する」

(うわあ、怖え……)

と、思いつつも慶と葵はトイレに行った。

「あつ、そういえば……」

「どうした?」

「トイレの紙って右側に付いてたなって思ってた……」

「あー俺入るしかないのか。てかうんこ？」

「殴るわよ？」

「ごめんなさい……。まあいいじゃん、姉弟だし」

「姉弟だから問題あるとも思うんだけどね……」

なんて話しながら二人でトイレに入る。お互いに向かい合った。

「……………」

「……………」

「……………早く脱げよ」

「いや、見られてると脱ぎにくいなーって……」

「ああ、悪い。目、閉じてるわ」

慶は目を瞑った。ちなみに頭の中ではじゅげむを唱えていた。すると、自分の左腕が揺れた。

(……………ああ、紙か。つーかウンコしてんのに無音なのな。流石、葵様)

で、バシヤアアアツツと音がする。流し終わったなと思いきや目が開けるとズボンとパンツを履こうとしてる途中だった。

「あつ」

「えっ？」

若干、顔を赤くする葵。

「悪い」

まったく顔色を変えずに目を閉じる慶。少しイラつとする葵だったが、なんとか堪えてズボンとパンツを上げた。

「いいわよ」

「おお。じゃ、ラピユタ見るか」

「うん」

リビングに戻った。

*

「終わったー！」

「やっぱいつ見ても最後ラピユタ飛んでく時は切なくなるよねー」

「分かるわー」

「じゃ、お風呂入って寝るわよ」

葵が言うのと、はーいっと全員が声を上げた。そのまま茜やら光やは風呂に向かっ

た。

「葵、今日風呂入んの？」

「うん。当たり前でしょ」

「……………そう。まあいいけど」

なんとなく嫌な予感のする慶だった。

第29話

そんなわけで、風呂。上半身は修の空間移動で脱がしてもらい、下半身は自分で脱いで入浴。あ、一応言うけどタオルくらいは巻いてるからね。

「さて、入ろっか」

「ん」

二人で入浴。

「先に洗えよ。俺は後でいいから」

「そう？ありがとう」

特に気にした様子もなく、葵はシャワーの前に立ってお湯を出した。

「？ けーちゃん？」

「なんだよ」

「なんか、顔赤いよ？」

「い、いやなんでもない……」

「あー、照れてるんだ？たかが姉弟なんだから欲情しないんじゃないの？」

「や、その……見る分には何も思わないんだけど……その、こっちが見られるのは……」

「……なるほどね」
言いながら葵は悪戯っぽく微笑んだ。普段、太々しい慶がタジタジしているのだ、こんな痛快なことは滅多にない。

「そうだ、慶。良かったら背中洗いっこしない？」

「はあ？」

「ただ待つてるだけじゃ暇でしょ？」

「あー……まあ、うん」

「じゃ、後でお願いね」

で、葵はシャンプーをする。無論、右腕には慶の左手が付いているから、なるべく右手を使わないように。で、洗い流すと、今度は慶が頭を洗う番。それも無事終わると、とうとう体を洗う。

「はい、お願い」

体を洗うスポンジを渡されて、慶はゴシゴシと洗った。

「気持ちいい」

「なんかエロいな」

「スケベ」

「男はみんなそうだ」

「きやー。襲われるー」

「それはないかな」

なんて話しながら背中が終わった。で、葵が体の正面を洗っている時だ。事故は起きた。葵の右手にぶら下がってる慶の左手が葵の胸に触った。

「ひゃっ」

「あっ」

お互い、思わず黙り込む。

「……………えっち」

「事故だろ今のは」

「ふふっ、冗談よ」

その後も尻に触ったりとアクシデントはあったものの、なんとか洗い終わり、次は慶が洗う番。

「じゃ、お背中お流ししますね〜」

「そいつはどーも」

なんてやりながら背中を洗ってもらう。

「あーこれ確かに気持ちいいわ」

「でしょ？昔はこうして一緒に入ってたもの。なんか懐かしいわね」

「ああ。そういうえば奏は今でもたまたまに誘って来るんだよな。なんなのあいつ」

「えっ、そなの？」

「うん。対応に困ってる」

「……………少し注意しとくわね」

「助かる」

なんて話してるときだ。葵はニヤリと笑って見せた。で、

「おっと滑った」

と、わざとらしく言って後ろから慶に抱き着いた。

「ふあっ！！？」

予想以上に動揺した慶、思わず後ろにひっくり返った。

「えっ、きやあつ！」

そのままどしやつ！と葵が慶の上に被さるように倒れた。

「つって……………」

やらなきやよかったと後悔しつつ、葵が目を開いたときだ。目の前にエリンギがあった。

「……………へ？」

顔が真っ赤になる葵。そして、慶の目の前にも多少ひじきが生えたダブルの穴が目の前にある。

「あっ……………」

二人はしばらく固まった。

*

風呂から出て、睡眠の時間。当然、同じベッドに入った。が、なんか気まずい空気が流れている。

「……………」

「……………」

お互い、何も喋らない。ていうか何を言えいいかわからない。なんとか葵が口を開いた。

「その、二人で寝るのも久しぶり……………でもないか、この前ボルシチに虐められて一緒に寝たわね」

「あ、ああ。あの時はおっぱいで窒息させられそうになってびびったわ」

「今日はそんなことない様にするわね」

「まあ手錠もあるしな。やるほうがむずいだろう」

「そうね……」

「そうだな……」

会話が止まる。気まづくなってお互いに離れるように寝返りを打った。だが、手錠で繋がれているため、ピンつと一瞬なった後、反動で逆に向かい合ってしまった。

「あつ」

葵の顔が赤くなる。葵なのに。

（か、顔が近い……）

心拍数が上がっていくのが自分でも分かった。

「あ、葵……」

慶が声を絞り出した。

「な、何……？」

「そ、その……」

「う、うん……」

で、気恥ずかしそうに慶が言った。

「……あの、うんこしたいんだけど」

ブチツとブチギレた葵は慶の腹を思いつきり蹴った。

*

慶は脱糞中。慶は左手に手錠がついているので、葵は廊下に出ていることが可能だった。待っている最中、考え事をしていた。

(私、さつき何を期待してたんだろう……)

第30話

翌日。なんか重くて葵が目を覚ますと、目の前に慶の顔があつた。いや、目の前というより胸の上だ。

「ッ!?」

思わず動揺する葵だが、慶が余りにも気持ちよさそうに寝ているので起こそうとも思えない。

(でも……このポーズって襲われてるように見えないでもないような……)

すると、ガチャツツと扉が開いた。

「姉さん、慶。ご飯……」

奏が入って来た。直後、凍り付いた。

「か、奏……?、これは違うの……」

「……………」

葵は言い訳しようとするも、何も言わない奏。

「……………んっ」

そこで慶が目を覚ました。

「……………まだ8時か」

二度寝した。

「いや寝ないで起きなさいよ!」

流石に大声を出す葵。だが、慶は中々起きない。すると、奏がゴミを見る目で言った。

「姉弟で不潔……………お母さんに言う」

「ま、待って奏! 本当に違うんだって……………!」

「ブヨブヨした皮(モンハン)だからこれで装備作れる……………」

言いながら慶は葵の胸を揉んだ。

「話をややこしくするな!」

「ほら不健全」

「寝言聞いてたでしょ!? ……って、やめっ……………んっ」

「姉さんエロイ」

「し、仕方ないでしょ!? ……ってかい加減にしろ!」

最後の部分は慶を蹴ってベッドから落とす時に言った。が、手錠で繋がってるわけ
で。葵も一緒に落ちた。

「グツフオアツ！」

「きやつ！」

結果、慶の溝に葵の肘が突き刺さり、慶を起こすことには成功した。が、今度は葵が慶の上になる。

「ほら」

「これは偶然よ！」

「どうだか？」

すると、奏は写真を撮って去っていった。

「あーあ……………」

「な、何すんだてめえ……………」

「黙りなさい」

*

茜は佐藤花とお出掛け。で、慶と葵はさっそくこの手錠の鍵を開けに出発した。葵は能力の使用を回避するために伊達眼鏡を掛けている。

「……………似合うな」

「ありがとう」

バイクは使えない。手錠のせいで。だから二人は歩いている。

「で、どこに行くんだよ」

「電車で少し行つたところに鍵屋さん？があるらしいわよ」

「なるほどな。あとさ、」

慶は辺りを見回しながら言った。

「……………すつげー見られてんだけど」

「そりゃあ、こんな王族が仲良く手錠してたらねえ…………」

「仲良いかどうかは微妙だけどな」

「えっ?」

乾いた声を上げる葵。

「慶……………わたしの事、嫌いなの?」

「はあ?……………あつ、いやそういう意味じゃなくてだなつ」

「ふふつ、冗談よ」

「んなつ……………!て、テメエ!」

「ほら行くわよ」

「チツ」

で、電車に乗る。休日ということもあつてか、結構混んでいた。そのため二人は立つしかなかった。

(慶と電車に二人で乗るなんて久しぶりだな)

そんなことを考えながら窓の外を見ている時だ。自分のお尻が触られる感覚がした。

「っ……？」

痴漢だ、と一発でわかった。だが、人が多過ぎて誰が触つてるのか分からない。不安と恐怖で思わず涙が出そうになったときだ。

電車の窓がズガシャアッ！と割れた。よく見ると、男が頭を窓に突っ込んでいる。気が付けば自分のお尻に当たっていた手はなくなっていた。

「おい、誰に断つて俺の姉上のケツ触つてんだコラ」

慶が痴漢の頭を窓に叩きつけて、窓を突き抜けたのだった。

「くくくッ！くくくッ！」

「あつ？聞こえねえよ。何？」

走行中のため、何も言えない強盗。ていうか風圧で顔がすごいことになっていた。

「くくくッ！」

「いやまあ分かるよ？出来心だったんだよな？気持ちちはわかる」

会話してるし！と、乗客の全員が思った。

「でもね、王族に痴漢はダメでしょう。まあ俺は優しいから謝れば許してやるよ。ほら、謝れ」

「ごべんばばい！」

「あ？何？聞こえねえよやり直し」

鬼か！とも思った。

「ごっつ！ごえんあい！」

「聞こえませえくん。はいもう10回いつてみよう」

10回^{!!}?などと周りがリアクションしていると、電車のスピードが落ちていった。

「あん？」

すると、電車が止まる。そして、駅員が入ってきた。

「ちよつと何をやって……あ、葵様に、慶様^{!!}？」

「あ、ちようどいいや。こいつ、痴漢。あとよろしく」

そのまま慶は葵の手を引いて逃げようとした。だが、その肩を駅員が掴んだ。

「待ってください。この窓は慶様がやったんですよね？」

「は、はあ」

「痴漢止めるために電車止めますか普通」

気がつけば乗客の全員が慶を睨んでいた。

「……………ご、ごめんなさい」

「とにかく、後でお話を聞きます。葵様もいいですね？」

「は、はあ」

結局、事情聴取（という名の説教）を受けていて鍵を開けることは出来なかった。店が閉まってて。

「まったく……………慶のお陰で……………」

「悪かったよ……………。葵が痴漢されてたから力入っちゃまって……………」

「慶……………」

「半分はストレス発散だけど」

「本当に台無しの極みね」

*

家。

「でもどうするの？今日もまたこのままいるつもり？」

「それしかないだろ。はあ……………また風呂お前と一緒に入んのかよ……………」

「仕方ないでしょー。私だって恥ずかしくないわけじゃないんだからね」

「さいですか……」

なんて話しながら二人はテレビを見ている。すると、修が言った。

「ていうか、俺が手錠を瞬間移動させればよくね？」

「……………あっ」

解決した。

第31話

期末テストが終わり、季節は夏となった。そんな中、慶はネカフエにいた。漫画をダラダラと読んでいると、自分の部屋のドアが開いた。

「お兄様、これ読んで？」

葉が入ってきた。手に持っているのは魔法少女まどかマジカの漫画。

「う、うん……。そのアニメはやめとこうか……。気持ちはわかるけどリバーズカートでミラーフォース潜んでるから……」

「……………分かった」

素直に従い、葉は引き返していった。慶と葉はネカフエに來ている。と、いうのも色々な行事が重なって、家には慶、葉、茜、岬しかいない。その分、家事とか全部四人でやらなければならぬわけだが、葉はまだ出来ない。だから、慶はお得意の交渉術によつて葉の世話係として一緒にネカフエに來たのだった。

「お兄様、これ」

戻ってきた葉が持っていたのはエンジェルビーツの単行本。

「は？」

見れば、音無が天使に刺されている部分だった。

（あつ、忘れてたわ）

エンジェルビーツは多少グロい。葉にはまだ早かったかとも思いつつ慶は頭を撫でて言った。

「あー……じゃあ、別のアニメにしとくか？」

「うんっ」

慶は銀魂を流して再び漫画に戻った。

*

帰宅。

「ただいま……」

「あつ、おかえりー」

テンションの低い慶がそう言うと、パタパタと茜が玄関に来た。で、葉の前にしやがみ込む。

「葉もおかえりなさい」

「ギャーギャーやかましいんだよ。はつじょうきですかこのやろー」

「葉がそう言うのと固まる茜。だが、葉はそれを無視して家の奥へ歩く。」

「ち、ちよつと!」

茜は慶の耳を引つ張った。

「何教えたのよあの子に!」

「銀魂見せたただけでああなった……。ああ、俺の葉たんが……」

「けーちゃん、冗談抜きで気持ち悪い」

*

「はあ? 茜を覆面ヒーローに?」

慶と奏が二人でポーカーしてると(慶24連勝中)、葵が入って来たのだ。

「そう。素性を隠せばきつと茜も積極的に人助けが出来るし、選挙前に正体を明かすことで人氣も急上昇するはず」

「待てよ。あいつ王様になるの嫌がつてなかつた?」

「あら、知らないの? あの子、王様になって監視カメラを廃止するために頑張ってるの」

「よ」

「うーわ……動機が不純過ぎるだろ……」

と、慶の眩きを無視して葵は奏に言った。

「茜の支持率を上げるにはこれしかないと思うの。特別な変装道具生成してもらえないかな……。お願い……」

「嫌」

「奏〜!」

今回の話は俺は関係ないな、と判断した慶はトランプをシャッフルし、三人分配った。

「葵、やるか?」

「あ、うん。じゃあ、お邪魔します……」

で、ポーカーやりながら会話。

「茜と一緒に全国を回ってて思ったんだけど……」

「はあ?全国回ってたの?」

「うん。それで、王様とか関係なくあの性格のままじゃこの先辛いことばかりだと思うの」

奏が黙って聞く中、葵は続ける。

「曲がりなりにも人前で堂々としていられたという実績でもあれば……」

「勝負でいいのか？」

「あ、うん。少しずつ自身もついていくと思うんだ」

「フルハウス」

「スリーカード」

「フラツシュ。だからお願い！」

「お願いされながら負かされたの初めてなんだけど……。まあいいわ。話が長すぎて気が変わってしまったわ」

「奏っ！」

「ツンデレ」

「黙れ愚弟。ちよつと待ってて」

言うのと奏は部屋を出た。数秒後、眼鏡を持ってきた。

「はい」

「ただ眼鏡を取ってきたように見えたけどこれは……」

「ジャミンググラス、掛けると周りから個人を特定されなくなる眼鏡よ。ただし、生成コ
スト削減のために効果は茜が装着した時のみ発動。更に、この性能を知っている人間に
は効き目が薄いわ」

「うーわっ……」

「……………」

慶も葵も目を腐らせる。だが、

「信じられないなら……………」

「わっわあ！ありがとう奏！」

「そんな事よりもつかいやる？次は大富豪とか」

てなわけで、借りることになった。

*

で、茜の部屋。

「と、いうことなんだけど……………」

大体の事情を説明した葵はさっそく茜にジャミンググラス（笑）を渡した。「私もできることなら人見知りには治したい。やってみる！」

で、メガネをパイルダーオン。

「ど、どうか……………」

「う、うん。いつもと雰囲気違う…かな……………」

「で、でも…………正義活動って言っても、一人じゃ自信ないかな……………」

「うーん、そうねえ……」

葵は顎に手を当てて考えた。

（でも、茜の選挙のためでもあるんだし……他の人にやらせるわけには……あつ）

「いるわよ。もう一人協力者が」

「へっ？」

*

「絶ツツツ対嫌だツツツ!!?!?!?!」

慶だった。

「まあまあ、茜を助けるためだと思って……」

「なんで俺がこいつの人見知りのために正義活動なんかしなきゃなんねえんだよ！」

「いいじゃない。ほら、ゲーム買ってあげるから」

「いいだろう。任された」

（チヨロい）

と、思いつつも慶にも眼鏡が渡される。

「これはジャミンググラス改……」

「はいはいそれはもういいから。ジャミンググラスでも催眠ガスでもいいからさっさと終わらせようぜ」

すると、慶の腕を茜は握った。

「よろしくね！ナイト・ブルーム！」

「えっ、何それ」

「ちなみに私はスカーレット・ブルームだから！」

「ちよっ、名前とかお前が決めちゃったの？」

そんなわけで、バカ2人のバカ作戦が始まった。

第32話

そんなわけで、二人は早速翌日から正義活動開始。

「と、いうわけで早速。パトロールね」

「おい待て……」

「どうしたの？」

「なんで俺の衣装までスカートなんだよ！」

慶は茜と全く同じ服を着ていた。

「男物まで用意するのはめんどいってカナちゃんか……」

「やっぱやだよ！ゲームいらなから帰る！」

「ダメだよ！もう約束しちゃったんだから！」

ちなみに陰でこっそりと慶のスカート姿を写真撮ってる奏だったが、とにかく2人は

出掛けた。片方は飛んでもう片方はバイク。

「うう……スカートってなんかヒラヒラする……」

「けーちゃん！そこの信号右ねー！」

「ヒーローをけーちゃんって呼んじゃうのかよ……」

イヤホンを耳に入れて携帯をいじりながら、そしてノーヘルでバイクを運転しているというヒーローにあるまじき行為をしている慶。すると、警察が通った。

「そのバイク。止まりなさい！」

「……………」

「君！止まりなさいって！」

「……………あつ？何？俺に話しかけてる？」

「そうだよ！止まりなさい！道路交通法違反だつての！」

「何？！聞こえないよ！」

「や、だから道路交通法違反だつてば！止まれつて！」

「無理！パトロール中だから！」

「いや何が？！いいから止まりなさいって……！」

「信号変わるまで待って！話ならいくらでも聞くから！」

「いやそれまでに事故起きたら危ないでしょ！止まりなさい！」

「何？！聞こえねーよ！」

「都合の悪い時だけしらばっくれてんじやねえよ！」

「今忙しいから無理だ！オロチの覚醒にはベイツールが必要なんだよ！」

「いや知らねーよ！早く止めろって……！」

「馬鹿野郎ツ！時間が止まることなんてねえんだぞ!!？」

「なんの話!!？」

で、焦れつたくなった慶はバイクを急ブレーキさせて、後輪を持ち上げて後ろの白バイの運転手の顔面にぶつけた。

「ブフツ！」

「うるせつつつてんだろ！今いいとこなんだから邪魔すんな！」

すると、周りに白バイが三体ほど止まる。

「てめっ！よくもやってくれたな！」

「うるせーな！忙しいつつつてんだろハゲ！」

「禿げてねえよ！まだ毛根は死んでないはずだ！」

なんてやりながら殴り合いが始まった。

*

「茜様に免じて許しますが、次は逮捕しますからね」

正義活動初日から警察のお世話になった慶だった。隣にはジャミンググラスを外し

た茜がいる。

そんなわけで、二人はトボトボと警察を出た。

「まったく……正義活動1日目から警察のお世話になるなんて聞いたことないよ」

「いいじゃねえか。新しいヒーローの形ってことで」

「良くないわよ！」

「とにかく、さっさと行こうぜ」

そんなわけでスタートは最悪だったものの、二人のヒーロー計画はスタートした。元々、重力を操る人と基本完璧超人の2人が手を組んでいたため、解決できないことは何もない。木の上の風船取るのもクジラ助けるのもその他諸々も難なくクリアした。

で、今は自宅。

「大活躍だな、二人とも」

修が言った。すると、慶が不機嫌そうな顔で答える。

「俺の正体はバレてないみたいだけだな。なんか本当に女の子と思われてるらしい」

ちょうど、ニュースで『スカレットブルームとナイトブルームの正体に迫る!』みたいな特集をやっていた。

「確かに服装とメガネ掛けるだけでほとんど別人だからな。そこの女の子より全然可愛い」

「修。殺すぞ」

ギロリと修を睨む慶。すると、テレビが言った。

『ではここで、ブルームヒーローズの決めポーズをお見せします』

「おお！来た来た！俺の考えたポーズ！」

「どんなの？」

「まあ見とけよ」

奏に聞かれるも慶はニヤニヤしながらテレビを見た。そして、テレビでスカーレットブルームとナイトブルームが構えた。

『流派！』

『東方不敗は！』

『『王者の風邪よ！』』

『全新』

『系裂』

『天破狭乱！見よ、東方は！赤く燃えているうううううツツツ！！？！！？！！？！！』

で、ビシィツ！と二人はポーズを決め、テレビの中の全員が拍手する。

「どうっ？？」

「完ツ全にGガンパクってんじゃない」

ため息をつく奏。

「いいだろ。カッケーじゃん」

「そもそもブルームどこいったのよ」

「知らねっ。てかお前なにその鼻血」

「へっ？あつ、また出ちやつてた……」

急いで鼻血を止める奏を捨て置いてテレビは世論調査に移った。

「……………あれ？なんで正体隠してるのに私の支持率が……」

「演説の効果がでてるんだよきつと！」

全力で誤魔化しに行く慶。

「でもなん……………」

「茜、ケーキあるんだけど食べる？」

葵の援護射撃でなんとか誤魔化した。

「そういえば小さい頃の茜はやんちゃだったなあ」

修が思い出したように言った。

「この街の平和は私が守るんだ！とかいってたぞ」

「本当ですか姉上！カッコイイです！」

「昔の話だから……………」

輝の台詞に茜は顔を赤らめる。すると修が立ち上がった。

「流派、東方不敗は！つて最近もやってるじゃないか」

「やめてよおおおつ！」

で、机に伏せた。

「もおゝこんなことなら家族だからつて正体明かすんじゃないよ……」

「えゝ？別にもう国中の人が……」

と、言いかけた光の顔面に慶の脚がめり込んだ。壁に減り込む光。

「ちよつ……けーちゃん！！？何してんの！！？」

茜がガタツと立ち上がる。

「……………蚊だ」

「脚で！！？」

すると、減り込んだ壁から光が鼻血を垂らして出て来た。

「ちよつと何するのけーちゃん！」

「つせーな！空気読め！」

「だつてあたしのクラスの子達も言つてたよ！茜ちゃ……」

さらにもう廻し蹴りを顔面に叩き込んで、また顔面が壁に突つ込む。

「だからけーちゃ……」

「蚊」

言いながら慶は光の食べかけのケーキを齧った。

第33話

それから一週間ほど、1日も欠かすことなくヒーロー活動を続けた。で、今はまたパトロールなう。二人は街の上を飛んでいた。ていうか茜が。

「茜、その……も少しゆっくり……」

「はあ？」

「早くて怖い……」

「はいはい……。ていうか、ちゃんと地上を見ててよね。困った人がいたら降りないといけないんだから」

「ういっ。わかった」

「ほら、これくらいでいい？」

「も、も少しゆっくり……」

「まったくもう……」

「ああ、そのくらい……。あー助かった……」

と、慶が茜の肩に掛けてる腕の力を抜いた時だ。ぶら下がった腕が茜の胸に当たっ

た。

「つつ!?ち、ちよつと慶!?どこ触つて……!」

「はあ? オンブされてるだけだけど?」

「胸に手が当たつてるよ!」

「あ? マジ? あー悪い。どこ触つても変わんねえから分からなかつたわ。まあ別にこのままでも姉弟だし問題な……」

と、言いかけた慶の腕を歯が掴んで地上に叩きつけた。

「問題あるよ!……あつ」

今更、上空から投げ付けた事実気付く茜。慶は物凄い勢いでコンビニの屋根に激突し、突き抜けた。

「痛て……。あんにやろ……。あれ?」

そのコンビニでは強盗が行われていた。

「……………あれ??」

「なんだテメエ!」

強盗は二人。客は二人(内一人が慶)、店員が一人だった。

「や、えつと……。ピカチュウ(裏声)」

「嘘付けエ! なんだかよく分からねえが邪魔するつてんなら容赦はしねエぞ。オラアツ

！」

殴りかかってくる強盗A。その拳を躲して慶は強盗の腹に拳を叩き込んだ。

「ゴフツ！」

「あぶねえなこの野郎」

その時だ。ガキリと拳銃を向けられた。

「動くな」

「……………さすがに、素手で来てるわけないか……………」

慶の頬に汗が流れた。思いの外、相手は落ち着いている。下手に動くと自分や自分以外の奴が撃たれかねない。

「ナイト、ブルームだったか？ご苦労なこった。ヒーローごっこなんてよ。お前の正体がどこのどいつだか知らねえが、もう片方の王族に付き合わされ、こんな目にあってるんだからよ」

（本当に俺だつてバレてねえのかよ…………）

と、思いつつも慶は自分のスカートの下の足に括り付けてある拳銃を抜く機会を伺っていた。

「しかし、お前かわいいな。本当に何処の馬の骨だ？」

その瞬間、慶は作戦を思いついた。そして、口を開いた。

「うるせえよチンカス」

めちやくちや低い声でそう言った。思わずキョトンとする強盗B。その隙にスカートをめくつた。で、拳銃を抜いて強盗の持つてる銃を弾いた。

「んなつ!!?」

リアクションしてる間に顔面にドロップキック。後ろに倒れたところを慶はまたがって拳銃を顔面に押し付けた。

「俺は男だ」

「……………」

警察に通報した。

*

「もう!けーちゃん一人で倒したら意味ないでしょ!!?」

「バーカ、お前に拳銃持つてる奴相手にさせるわけに行くか」

「そ、そう……………」

「なあ、そんなことよりさ。俺のこのカッコってそんなに可愛い?」

「は?」

「や、だから俺だつて分からなくなるほど可愛いかな……」

「あー……うん、まあ……」

「そ、そう……」

そのあと、「女装……女装か……」などとブツブツ呟き始めたが、茜は無視して引き続き正義活動を再開した。

*

帰宅した。

「あー疲れたー!!」

茜はそのままソファーにダイブ。慶は二階に上がった。で、葵の部屋に入った。

「入っていいか？」

「えっ」

中では葵は着替え中だった。一瞬、動きを止めたものの、慶はそのまま中へ入り、ベッドに腰をかけた。

「葵……相談があるんだが……」

「待って、何を何食わぬ顔で着替えてる人の部屋に入つてこないで」

「いや、相談っつーか質問だな。いい?」

「や、だから着替えてる人の部屋に……」

「これ葵だから相談出来ることだからな。本気で信用してっから聞けることだからな」

「その前に私の心、察して」

「女装つて、どう思う?」

「お願いだから話を……今なんて言つた?」

聞き返すが慶は何も答えない。ふつと顔を背けるだけだった。その瞬間、慶の両肩を

ガツと掴んで揺さぶる葵。

「目を覚ましなさい慶!」

「まつ……ちよつ! 死………つ!」

「あなたはそつち側じゃないはずよ! お願いだから戻つて来なさい! ねっ!?!」

「ガツ……ちよつ……激しッ……!」

「私はあなたを社会的に殺させたくないわ! お願いだから落ち着きなさい! ねっ!?!」

ねっ!?!」

「いやお前が落ち着つきやつ……舌噛んだ! 舌噛んだからたんま!」

すると、ようやく収まった。

「で、どういうこと? 何があつたのか詳しく説明しなさい今すぐに!」

「や、だからさ……そのつ、俺が茜とヒーロー活動始めたじゃん？」
「そうね」

「それでさ、茜の支持率は上がったし、外歩いてても余り茜は周りを意識しなくなったと思っただよ」

「うん」

「だけど、ナイトブルームの方は誰も俺と気付かない余りか本当に女だと思ってる奴も多いじゃん？で、今日コンビ二強盗ボコったときにさ……可愛いつて言われたのよ……」

「……………」

「で、スカートの下に俺は短パン履いてるわけだが、そこをまた可愛いだのなんだのネットで言われてるし、てか今思えば俺、茜と同じくらいしか身長ないし、なぜか茜も岬も光も『けーちゃん』だし、なんつーのかな、自分に自信がなくなってきたというか……あれ、なんだそれ……なんか自分でも何言ってるか分からなくなってきた。まあとにかくそんな感じ」

「慶。貴方しばらくナイトブルーム辞めなさい」

「はあ？なんでまた急に」

「辞めなさい。ていうか辞めてください」

「いや別にいいけど……」

「それで眼が覚めると思うわ」

「わ、分かった」

第34話

それから一週間くらい、ナイトブルームは姿を消した。活躍するのはスカーレットブルームのみとなっていた頃。

「どう？ 女装したいーみたいな衝動は収まった？」

「元々そんなに深かったわけじゃねえよ」

「ふーん？ あんなに深刻そうにしてた癖に？」

「いや、一歩間違えれば変態だったからなあ……。でもナイトブルームは辞めたくねえ。せつかく合法的に暴れられてたのに」

「まあコンビニ強盗で発砲って聞いた時にはビックリしたわね」

「仕方ないだろ。相手意外と落ち着いてたし」

「そつちじゃないわよ。怪我なくて良かったって意味よ」

「相変わらずお優しいお姉さまですね」

「ありがとう」

なんて話しながらテレビを見てみると、なんか臨時ニュースみたいな事をやってい

た。

「お？なんや？」

『えーこちらの銀行です。ただいま、銀行強盗が入っている模様です。あか……スカーレットブルーム、いや茜様だけ？ま、どっちでも伝わればいいや。茜ブルームが中にいるようです』

「えっ？」

「ていうか茜ブルームって何」

『目撃者の証言によると、銀行強盗やっていると見つけた茜ブルームが中に入って行った瞬間、銃声が聞こえたそうで……』

「はあ!!？」

「じ、銃声……!!？」

『腰を抜かして動けなくなっているところ、人質の一人にされてしまい、シャツターが閉まったそうです』

「当たってねえのかよ！いや当たってたら困るけど！」

最後の部分まで完璧にハモらせて突っ込む2人。

「茜……とりあえず警察に……！」

「無駄だよ。警察に連絡したところで強盗の計画の内だろうし、つーか目撃者がいるん

ならとつづくに連絡してると思う。ていうか、下手に刺激して茜を人質にされたら最悪だし」

「じ、じゃあ……どうするの?」

「……………こういう時のための、ナイトブルームだろ」

言いながら慶は着替え始めた。

「ほ、本気!?」

「ああ。ヒーローものは片方が捕まったらもう片方が助けるのが王道だろ。エースキラー然り、ヒツポリット星人然りれ」

「なんで両方ともエースなのよ」

「……………ウルトラマン地味に詳しいのな」

「チョイス古くない?平成でも『ウルトラマンダイナ&ティガ、光の戦士たち』とか『ウルトラマンメビウス&ウルトラ兄弟』とか…………」

「うるせーな。いいだろ別に。てか言ってる場合じゃねえ。ちよつと行ってくるわ」
「ちよつと慶……………」

が、無視して慶は自分の部屋へ入った。で、拳銃をスカートの下に隠し、部屋を出た。部屋の前では葵が心配そうな顔で待っていた。

「いいの?危ないし…………それに、また女装したくなっちゃったら…………」

「いいんだよ。茜のためだ」

「そう……………」

「さて、じゃあ行くか」

そう言うと、ナイトブルームは出撃した。

*

銀行に到着。シャッターは閉められていて、周りは警察に取り囲まれている。慶は隣のビルに入り、屋上からバレないように飛び移った。

で、まあなんやかんや上手いこと移動して銀行のトイレの中に入った。

「まあ、まずはこんな感じか……………」

言うど慶はトイレの入り口のドアを強く締めた。バタンツと音がして、金を集めてる強盗の一人がそれに反応する。

「おい、なんか音しなかったか?」

「そう思うなら見てこいよカス」

「カスって言う方がカスだ」

なんて軽く口喧嘩しながら一人が確認しに行った。で、トイレの中に入る。が、誰も

いない。

「……………気のせいかな」

そう思つて戻ろうとした時だ。個室から慶が出て来て、一撃で気絶させられた。で、慶はそいつの服装を剥いで衣装の上から着て、武器だけ奪つて、体を縛つて顔面を便器にぶち込んだ。

「さて、行くか」

拳銃を一丁はポケットにしまい、最後に覆面を被る。中をそーつと覗くと敵は後四人。

(下手には動けないか……………まあ一応変装してるし大丈夫だとは思うが)

で、普通に出てきた。

(……………なるべく口数は少ない方がいいよな)

「よう、なんかいたか？」

「ああ、花子さんだった」

「そいつは危なかつたな」

なんとか誤魔化せたようで慶が銀行から出るときにこいつら裏切ろうと決めた時だ。

「慶！助けに来てくれたの!?？」

茜が大声で正体をバラしやがった。

第35話

バカがバラした時、慶は不敵に笑った。

「は、はっ。誰だ慶っていうのは？」

「いや、何かツコつけてんの!? そんな場合じゃないから! 助けてよ!」

「助ける? なんで強盗が人質を助けなきやならねんだ? マジなめんのもいい加減にしろよ!」

「そっちがなめてるんだよ! 何惚けてんの? いいから助け……!」

「ああもうっ! なんでバラすかなあお前! 分かったよ! 正体バラせばいいんだろ!? へえーんしんっ! トオウ!」

惚けるのを諦めて、慶は強盗の衣装を脱ぎ捨ててスカーレットナイトとなった。

「ナイトブルーム、行きまーす!」

言いながら見参し、スカートの下の拳銃とさつき奪った拳銃を構える。

「うおおおおお!」

「ナイトブルーム来たあああああっ!」

「正義の味方だろ!? ふてててんじゃねえよ！」

「この女装癖が！」

などと声上がる中、慶も声を上げた。

「うるせーうるせーうるせー！ 女装趣味じゃねえつつの！ 誰がお前らみたいなの助けるか！ いいから財布出せつてんだよチンカスどもがアツ！」

言いながら慶は拳銃を人質の群れに向ける。

「と、いうわけで強盗。これから俺はお前らの仲間だ。金はお前らだけで分けていい。その代わり2万だけくれ。今月ピンチなんだよね」

「おう、いいぜ」

で、全員の財布を回収し、強盗たちは銀行を出ようとした。だが、

「待て。正面は警察がいる。屋上から逃げるぞ」

「そんなん人質使えば済む話だろうが」

「馬鹿たれ。奴らに気付かれずに逃げればその分だけあいつらをここに釘付けに出来るだろ。俺の侵入ルートを通るぞ」

で、全員でまったく気付かれないように抜け出した。

「車は？」

「近くのパーキングに停めてある」

「バツカお前あそこはどう足掻いても警官に見られんだろうが。全員着替えて人目のつかない道を堂々と歩くぞ」

「それ堂々として言うのか？」

「とにかく、行くぞ。この街は監視カメラで囲まれてる。ここから何人かは強盗服に着替える。そして、あえて監視カメラに映る道を通るんだ。その後に着替えて監視カメラの映らない道から集合場所に集まれ。いいな？」

もはや完全にリーダー格となっている慶だった。

「で、その集合場所ってのは？」

「監視カメラがない場所に決まってる。監視カメラがない場所、学校だ」

「目立ち過ぎないか？」

「今日は休日だろうが。ここに来る理由の奴は部活しかない」

「な、なるほど……」

「まあ目立ち過ぎるってのは本当だ。だからルートを絞る。あそこの一年棟の階段なら休日は誰も通らないはずだ。そこの屋上だ。いいな？」

『おう！』

この後、当然慶はそこを警察に教えて一網打尽にした。

*

その夜。ナイトブルームの正体は櫻田慶様だった！みたいなニュースがやっていた。

「……………死にたい」

「まあまあけーちゃん。大丈夫だよ」

光が慰めるが、慶は頭を上げない。

「死にたい……………」

「同じこと二回も言わないの」

「うるせーバーカ。世間には俺は女装趣味だぞ」

「そう思われてもおかしくないくらい可愛いもん」

「真顔で言うな。また蹴りたいのかカス」

「いや、真面目に」

「……………女装、か……………」

「なんか言った？」

「や、なんでも……………」

と、否定したものの慶の頭の中では女装の言葉が残っていた。

第36話

学校の帰り道。慶はジャンプを買った。で、いつも通り読みながら帰宅してる時だ。赤信号なのに気付かず、堂々と歩いた。その結果、車にはねられた。

*

病院。慶の病室。

「修ちゃん！」

茜がやって来た。声を掛けられて振り返る修。

「けーちゃんは？」

「命に別状はないそうだが、意識は戻ってない」

「ジャンプ読みながら歩くなっっていつも言ってるのに……良い薬よまったく……」

「カナちゃん」

「なあに？」

「貧乏ゆすり半端ないんだけど」

「べ、べべべべつに焦ってないし！」

「いや聞いてないし」

なんて話していると、遅れて遙と岬が光、輝、栞を連れてやってきた。

「事故ったって？」

「大丈夫なのけーちゃんは!?？」

「死にはしないってさ」

「良かったあ……」

岬が椅子に座り込む。

「お兄様……死んじやいや……」

涙目で下を俯く栞。その栞に輝が言った。

「大丈夫だ栞！慶兄様は無敵のヒーローなんだ！交通事故くらいじゃ死なない。むしろ車を兄様がはねるんだ！」

「いや、意味わかんないから。ていうか死なないって言われたばつかじゃん」

輝の力説に冷たく突っ込む光。

「でも、トラックにはねられたみたいだし、骨折くらいはしてるかもしれないわね……」。

その時はみんなで慶を支えてあげましょう」

その葵の台詞に「おーっ!」と、全員が拳を突き上げた。すると、ベッドから「ん……………」と、声が出た。

『慶?!?』

全員がベッドの上を見る。慶は兄弟達を見ると、目をパチパチさせた。

「……………だれ、ですか?」

「へ?」

「僕を、どうするつもりですか…………?」

涙目で慶はそう言った。

「け、慶…………?冗談よね?」

「けーちゃん?」

葵と光が冷や汗を流しながら言った。

「な、なんなんですかあなた達…………」

警戒してるような声を上げる慶。すると、修が言った。

「とにかく、先生を呼ぼう。話はそれからだ」

*

「記憶喪失？」

話を聞いてる葵、奏、遙が声を出した。人数が多いから三人だけ聞いて、残りの人たちにはあとで説明することにしてある。

「ええ。事故で車に吹っ飛ばされた時に記憶も吹っ飛ばされたみたいで……」
「あらら……そうですか」

「まあ彼にとつて刺激になるものを見せれば戻せるとは思いますが、まあ気長に行きましよう。戻るまでは私達も精一杯力を尽くします」

「はあ、よろしくお願いします」

そのまま話は終わった。

「……困ったわね」

「大丈夫？ 奏姉さん」

「平気よ遙……」

とりあえず慶と他の兄弟達が待つ病室へ。

「ねえ、本当にあたしのことも覚えてない？」

「ご、ごめんなさい……えっと、光さん？」

「さん付けなんてやめてよ。光って呼んで？」

「慶兄様！僕は輝です！」

「な、なんか似たような名前ですね……」

などと盛り上がってる中、修が葵に聞いた。

「どうだった？」

「それが、記憶喪失みたいで……」

「なるほどな……。まあそういうことならさっそく家に連れて帰ろう。外傷はないんだろ？」

「ええ。トラックにはねられた癖に無傷」

「あいつつてご飯にボンドでもかけて食べてんのかな……」

修と葵が話してる時に茜は奏に聞いた。

「カナちゃん、大丈夫？」

「平気よ。ねえ、人の記憶っていくらくらいで買えると思う？」

「本当に大丈夫!?？」

第37話

早速退院し、帰宅する。慶の腕に奏がしがみ付いている。その度に慶は顔を赤くしていた。

「あ、あの……奏、さん？」

「なに？」

「もしかして……僕と奏さんは恋人だったりするんですか？」

それに全員が嘖き出した。

「なつななななで!? 何言ってるの!?」

「だ、だって……なんかベツタリくっついてますし……む、胸も、当たってますし……」

「や、それは……」

「もしかして僕って、奏さんに貰われて養子みたいになったみたいな感じですか？」

「そ、そんなわけ……」

と、言いかけた奏だったが、「悪くないわね……」と、呟いた後、言った。

「ええ、そうよ」

奏以外の全員が嘖き出した。

「や、やっぱりそうですか!?? なんか他の人と比べて距離近いしボディータッチ激しいしなんかあると思っただんですよ!」

「ま、まあね。私、心配したんだからねけーちゃん♪」

誰だお前!?? と、全員が反応する中、慶は気恥ずかしそうに聞いた。

「じ、じゃあその……カナちゃんって、読んでもいいですか?」

「ゴツファアツ!!?」

「カナちゃん!??」

血を吐いて倒れた奏に慶が駆け寄った。その2人を捨て置いて残り8人は思った。

(((((俺、知ーらねっ♪))))))

*

そんなこんなで、自宅。

「ほら、ここが私達の家よ」

「大きいんですね……」

「その敬語禁止、家族なんだから」

「そうですか……そうだね、カナちゃん」

で、微笑み合う2人。

「ほら入るぞ」

修が言う中へ入る。「お邪魔しまーす……」と、慶が小声で言った。

「けーちゃん！ほらほらこっち。リビング！」

光が手を引つ張つて案内する。

「あれがテレビで、あれがソファー、あれが机だよ！」

「光、何かを思い出させるってそういうことじゃないぞ」

遥が冷たくツツコンだ。そして、そのまま提案する。

「とりあえず、みんなの能力を見せてみない？僕たちの能力を見たりすれば、何かしら思

い出すかもしれない」

「なるほど……。じゃああたしから！」

光が前に出た。そして能力によつて高校生くらいにまで成長して見せた。

「うわっ」

「どう？生命操作」

「光ちゃん……大人になつても可愛いですね……」

「えうつ!?」

顔を真っ赤にする光を捨て置いて、今度は輝が前に出た。

「僕は怪力超人です!こんな感じで……」

言いながら輝はその辺のソファアールを持ち上げた。

「おお……小さいのにすごいね」

「何か思い出しました!?」

「いや皆目」

言われてシヨボンとする輝。次は岬だ。

「ほっ」

そう言うと8人に増えた。

「おお……これはまたすごいですね……」

「でしょー?」

「あら、本当に記憶がないのね」

言いながら岬の1人が慶の後ろから抱き着く。

「つて、コラー!誘惑するなー!」

などと本体と分身による心温まる茶番の次に出てきたのは修だ。

「俺は瞬間移動。こんな感じ」

言うと修の姿が消えた。

「へあつ!?」

そして、トツと上の階で着地する音がした。

「……………なるほど。便利ですね」

みたいな感じで能力を紹介していった。全員終わったところで、「あつ」と修が声を漏らした。

「そういえば面白い物してなくね?」

「そういえばそうね……。今日の面白い物係誰?」

「あー! 私だったあー!」

大声で嘆く茜。

「な、なんですか?」

「あか姉は極度の人見知りでお出掛けが嫌いなんだよ」

「そうですか……。では、僕がお付き合いますよ」

「本当に!?」

茜がガバツと身を乗り出す。

「はい。義妹の為ですから」

ニツコリと微笑む慶。

「うん、ていうか私が姉なんだけどね……」

「いきましよう。お腹空きましたから」

「そうだね。カナちゃんは行く?」

「私はいいわ」

「そっか。じゃ、行つてきまーす!」

そのまま二人は出掛けた。その背中を見ながら奏は眩いた。

「……………どうしよう」

「私は知らないからね」

冷たく葵が言い放った。

第38話

買い物へ向かった。慶と茜は2人並んで歩く。すると、自販機の前で慶が立ち止まった。

「茜さん。喉渴いてませんか？何か奢りますよ」

「へ？いい、いいよ別に。買い物なんてすぐだし」

「いえ、僕が記憶喪失になってしまったことで迷惑かけてしまっているの、何か奢らせてください」

（この人誰？？ていうか普段の方がよっぽど迷惑なんですけど！）

声に出さずもヒビる茜。慶は返事を待たずに缶コーヒを買ってしまった。

「どうぞで」

「あ、ありがと……」

そのまま二人は近くのベンチで一息ついた。その時だ。

「あれ？けーくん？」

声をかけられて振り返ると紗千子が立っていた。

「つて、さつささささつちゃん!!?」

「?」

慶の頭の上には「?」マークが浮かんでいる。それを察したのか茜はなんとか理性を抑えて言った。

「あ、えと……さつちや……米澤さん」

「あ、茜様。初めまして。米澤紗千子です」

「ああ、ご丁寧にどうも。で、けーちゃんなんですけど……今、記憶喪失でして……」

「……………今なんて?」

「や、だから記憶喪失でして……」

「」

固まる紗千子。そして、「そんな……」と呟きながら肩を落とす。その紗千子に慶が言った。

「申し訳ありません。今は覚えていませんが、必ずあなたのことも思い出してみせます。だから、落ち込まないでください」

「けーくん……」

思わず涙が出そうになる紗千子と茜。茜は別の理由だけ。そして、続けて慶が口を開いた。

「それで、貴女と僕はどういふ関係何ですか？」

「へっ?………あー」

紗千子は口を開いたまま固まった。そして、ピンと良いことを思い付き、言った。

「彼女です」

「ブッフオアツ!」

缶コーヒーを噴き出す慶と茜。で、茜が「へっ?そ、そうなの……?」みたいに困惑している、慶は膝をついた。

「ど、どうしたのけーくん?」

「ふ、二股じゃないですか!なんて奴だったんだ僕は……」

「へっ……?けーくん、彼女いるんですか?」

「はい……。どうやら僕は王族のカナちゃんに貰われたはずだったんですが………どうやら不倫していたみたいです……」

しよぼんと肩を落とす慶。それに少なからず紗千子は驚いた。奏と慶の関係の真相を知っている茜はオロオロするばかりだった。そんな茜の気も知らずに慶は言った。

「こうなったら仕方ありません。米澤さん、カナちゃんと僕と三人で話し合ひましょう」

「は、はあ?」

「あなたは僕の2人目の女性かもしれませんが、それでも僕を愛してくれた女性の一人、

「ここは三人で決めるべきです」

「や、あの……」

「け、けーちゃん？」

「茜さん、申し訳ありませんが僕は買い物より大事な用事が出来てしまいました。失礼します」

「ええっ!?？」

そう言ううと慶は紗千子の手を引っ張って自宅へと引き返していった。

第39話

そんなこんなで、慶、紗千子、奏、葵の四人で席に座る。奏と紗千子は顔色を悪くしながら思った。

(どうしてこんなことになった……)

で、グルグルと思考を巡らせる。

(なんで? ちょっと見栄を張っただけでなんでこんな事になるの? そりゃ私も悪いことしたとは思うけど……)

(まさかけーくんが養子だったなんて……ただでさえその事実でメンタルズタボロにされてるのにここで嘘つきましたーなんて言ったらカミーユの如く精神崩壊起こすよ)

と、全力で後悔してる中、葵が手を挙げた。

「あの、慶? どうして私もここに居るの?」

「裁判長です。最終判断で僕に下す裁きをお願いします。死ねと言うのならば切腹もします」

(「(どんだけ責任感強いんだこの人!)(」)

心の中でツッコむ三人。

「ちなみに慶、仮にこの二人のどちらかが彼女だと嘘付いてたら?」

「その場合は、ちよつと僕はそんな人とは関わりたくないですね……。今言えば笑つて済みますが……。結論が出てから『実は嘘でしたーてへペろ☆』みたいなのは腹立ちますし何よりウザいので」

その瞬間、二人はブルツと身体を震わせる。

(と、いうことは偽物はけーちゃんとは絶交するということ? そんな事になったらこつちが切腹したくなるわよ!)

(偽物の人は即刻死刑宣告喰らったと考えるべきね……。あ、あれ? ちよつと待つて?)

(よく考えたら……)

(私、偽物だ……)

二人の頬を冷たい汗が流れる。

(と、いうことはあのアイドルが慶の彼女になるつてこと?!?)

(流石にけーくんは絶交させられるのは嫌だ。だけど……。ここで『実は偽物でしたーてへペロ☆』なんてやったらけーくんは軽蔑されることは間違い無いし、何よりアレだ。恥ずかしい)

(だからと言つてここで絶交は嫌だし……どうするべきか。いや待て、これは逆にチャンスなんじゃない?)

(ここでテキトーに難癖付けて……)

(本物を蹴落として、私が本物の彼女になればいいんだ!)

そう思い2人が口を歪ませた時だ。葵が立ち上がった。

「葵さん?」

「ごめんね慶。後で好きな物なんでも買つてあげるから」

「へ?」

すると、葵は思いつきり慶の頭を殴った。

「ほげっ!!?」

そのままパタリと気絶した。で、奏と紗千子を見てニツコリと微笑んだ。

「二人とも、ちよつとお話しようか?」

二人は恐怖を見た。

*

30分後。慶が目を覚ました。

「えつと……あれ、ここどこ？確か、ジャンプ買った帰り道に……トラックにはねられて……あれ？」

記憶が曖昧で視界もボーツとしている。が、すぐに視界は戻った。目に映ったのは奏。

「おい奏。何があつたかわかんない？なんか記憶が曖昧で……」

「知らない」

「………なんか汗凄いいけどどした？」

「知らない………ごめんなさい………生きててごめんなさい………」

「奏^{!!}?どうした^{!!}?」

一方、紗千子も仕事を二週間休んだ。

第40話

とある日の夜中。夜中の2時。慶はゲームをやっていた。

「っし、ボス倒した……。って、もうこんな時間か」

目覚まし時計を見ながら呟いた。隣のベッドの茜はすでに寝息を立てている。

「切りいいしここでやめとくか……」

そう判断すると、布団の中に潜った。だが、

「歯あ磨いてねえや……」

そう思い出すと慶は立ち上がった。で、洗面所に向かい、歯をシヤコシヤコする。ふと何かの気配がした気がして、扉の向こうの風呂場を見た。ピチャツと水滴が落ちた気がした。

「……………いや、ねえって。ねえよ。大体、歳いくつだと思ってるんだ」

そう思いながら鏡を見ながら歯を磨く。鏡の中の自分を見ながらシヤコシヤコしていると、自分の後ろに誰か黒い影が映った気がした。内側からズコツと頬に歯磨きが刺さ

り、止まる。

「……………疲れてんなこれ。間違いなく赤疲労だわこれ。やべーよ轟沈するよこれ」
で、気を紛らわすためにリビングへ向かった。で、電気をキッチンまで全部つけて
シャコシャコする。

『逃げられると思うなよ…………』

「ツ!?？」

そんな声が聞こえた気がした。

「む、無音はつまんねーよな。いや別に怖いとかじゃなくて…………」

そう決めると、慶は少しでも気を紛らわすため、テレビをつけた。その瞬間、

『お前の後ろにだあああああああアツツツ!!?!?!?!?!?!』

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアツツツ!!?!?!?!?!?!」

テレビに頭と目から血を流して白い顔をしている女が映り、反射的に自分の後ろに裏拳をブン回した。だが、誰もいない。ハアハアと息を乱していると、テレビから声が出た。

『と、このように呪われる場合があります。殺人はやめましょう。警視庁からでした』

「どんなCMウツ?!? 広告するほどこの街治安悪くねえだろ！お前らが呪われる！今すぐ呪い殺されろ！」

で、ハアーツハアーツと呼吸を整え、テレビを消した。

「んだよコンチクシヨウ。もういい寝る。それがベストだこの野郎。警視庁め、明日親父にチクつてあのCMやめさせてやる」

言いながら慶はリビングだけじゃなく、廊下まで電気を付けっ放しにして洗面所に入った。

「……………」

念のため、風呂場の電気もつけて、さっさとうがいをする、つけた電気は消さないで自分の部屋に戻った。

「……………」流石に自室の電気までつけたら眠れねえや」

そう判断すると、慶は自分のベッドに入る。そして、目を閉じた時だ。

『お前の後ろにだあああああああツツツ!!?!?!?!』

「ツツツ!!?!?!?!」

急いで目を開けて振り返るが、誰もいない。

「……………」俺つてもしかして霊感あるのかナー……………」

背筋に冷たい汗が流れた。そして、ゲームをつける。ボス撃破後のムービーでも見て気を紛らわそうと思つたからだ。

『……………つし、これでこの町は大丈夫だな』

『ああ……やったな……でも、本当に大丈夫か？ やつがこの程度で終わるとは思えないんだが……』

『大丈夫だつて。奴の死体もそこに……何っ!!?』

『奴の死体が消えた!!? 一体何処に……』

『お前の後ろにだあああああああアツツツ!!?!!?!!?』

『ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアツツツ!!?!!?!!?』

『ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアツツツ!!?!!?!!?』

思わずゲームの画面を叩き割った。で、ゼーハーと呼吸を整える。

(間違いない……。俺、呪われてるッ！)

そう判断し、慶はチロツと茜の方を見た。で、ツンツンと肩を突く。

「あ、茜さあくん……」

「……」

「お願い、起きてえ？」

「………んにやつ、何い………?」

「そ、その……一緒に寝てほしいなあーなんて……」

「はあ………? 何を馬鹿言ってるの………? 大体、今何時だと……」

「お願い……。じゃないと俺、呪い殺されちゃうよ……『お前の後ろだあーっ!』みたい

な……何も言っていないのに後ろからバツサリ何もかも持つてかれちゃうよ……」

「何言ってるの……？分かったよ、おいで？」

「ほんとごめん……」

「ん」

で、同じベッドの中に入る。

「にしてもどうしたの？急に……」

「いや……ちよつと、な……」

と、これまでの事情を説明する。

「あははっ、考え過ぎだよけーちゃん。まあ怖かったなら甘えさせてあげるから、おいで？」

言いながら微笑む茜。その笑顔が余りに優しく見えたもんだから、慶は気恥ずかしくなって背中を向けた。

「う、うるせつ。おやすみ」

「うん、おやすみ」

言いながら茜は優しく後ろから慶を抱き締めた。普段なら拒絶するが、今はそれによつて恐怖が緩和されていったもんだから、慶はそのまま身を茜に預けた。その時だ。

「けーちゃん」

静かにひっぱる慶と喧しい茜。だが、慶の力は強くともクラス全体は引っ張られてい
る。

「チイツ、仕方ない。福品、一秒だけ頼む」

「へ？お、おう」

後ろで引っ張っている福品に慶は言い放つと、前で引っ張っている茜のズボンを下ろ
した。

「えうっ!!?」

『ツツ!!?』

敵のクラスの前の方で見えた奴全員は顔を真っ赤にし、固まった。

「今だ、引っ張れ!」

さらに慶の号令で味方チームは思いつきり引っ張った（福品、茜以外）。

「キヤアアアアアアアツツ!!?!!?」

茜が急いでズボンを上げる中、試合終了のピストルが鳴り響いた。

*

「けーちゃんのバカ!最ツツツ低!」

さつきから怒っているのは茜だ。慶は携帯を弄りながら言った。

「だから悪かったって。勝つためには仕方なかったんだよ」

「だからって普通脱がす?!?」

「他に良い方法が思い付かなかったんだよ。今度パフェ奢るから許して」

「私のパンツはパフェ以下か?!?」

「じゃあジャンポパフェ」

「サイズの問題じゃないわよ!」

なんてやり取りはしばらく平行線を辿り、結局遊園地葉と茜のチケツト奢りで済むことになった。なんてやってると、二年の騎馬戦が始まった。

「つと、始まったか。じゃ、俺は席外すわ」

「ど、どこ行くの?」

「ちよつとな……」

返事を濁すと慶はスナイパーライフルを取り出した（麻醉銃）。で、校舎の屋上に登り、白組の鉢巻をしている奴に狙いを定めた。

「安らかに眠れ」

パシユツと音を立てて奏を撃ち抜いた。それを見た修がため息をついて瞬間移動した。

「よしつ、続いて二人目……」

と、言いかけた慶の頭をぼかんと殴り、スナイパーライフルを取り上げる修。

「馬鹿かお前」

「いつてえなこの野郎」

「そういう事はよせよ。これは没収な」

スナイパーライフルはシュンツと消滅した。

「あつ！てめつ……」

「じゃあな」

そのまま瞬間移動で修は逃げた。

*

「アホ！バカ！死ね！カス！ゴミ屑！」

「いや言い過ぎだろ！」

目が覚めた奏になじられてるのは慶だ。

「あんたね、普通騎馬戦で狙撃する？バカなの？」

「騎馬戦の文字には『戦』って文字が書いてあんだろ。これ即ち戦争だ。それなら狙撃く

「らいあつてもおかしくねえだろ」

「理論が飛躍しすぎよ！」

「まあ気持ちいいくらい見事に当たったし、奏に当てられたし、俺は満足だぜ」
「結局、私に当てられたから満足しただけじゃない！」

などというやり取りも平行線を辿り、遊園地デート一回で許された。

第42話

体育祭。ようやく慶の出番となった。障害物競走だ。障害物は平均台↓ネット潜る奴↓跳び箱↓袋に足突っ込んでピョンピョン跳ねる奴↓パン食い↓最後に走って終わりという少し変わった感じ。

しかも、一位の組みは地味に高得点もらえるので本気を出す組も多いのだ。そこにまさに本気をぶち込んだ赤組。慶はアンカーだった。

「花蓮、出番になったら起こしてくれ」

「はあ？つたく……しよーがないわね……」

一人一周なので、起こすことは可能である。そして、第一走者の花蓮がスタート位置に立った。

「けーちゃん！起きなさいー！」

茜が言うも無視して鼻ちようちんを出す慶だった。なんてやつてる間に、パアンツ！とスタート。それと共に第二走者の福品がスタート位置に立った。

*

「ほら、起きろっ」

花蓮にビンタされ、ようやく目を覚ます慶。

「お、おお……。何位？」

「ビリから二つ目」

ちなみに4クラスである。

「距離はどのくらい？」

「半周も半周弱かな」

「ならないけるな」

言いながら首をコキコキと鳴らす慶。そして、アキレス腱を伸ばしながらスタート位置に立った。丁度、後ろからクラスメートの女子が走って来ている。

「……………行きますか」

バトンのタスキを受け取り、スタートした。最初の平均台。それを前にしてもまったく減速せずに一秒もしないうちに渡り終えると、ネットをスライディングでこれまた減速せずに潜り終えた。

「おおー！」

「いいぞー！けーちゃん！」

ちなみにこの様子をビデオカメラで全力で撮影している奏だった。で、次の跳び箱。声援が気持ち良かったのか、跳び箱の上でロンダートするアレをやってみせた。

「うおおー！」

「スゲー！」

「逆にキメエー！」

などと声が上がる中、修は「手加減しろよ……」と呟いた。で、袋に足を突っ込む奴で一人追い抜くと、パン食いを一発でクリアし、ラストの直線。前にはあと一人だけ。

「加速っ……っ！」

そう呟くと慶はさらに加速し、一気に追い抜いた。で、ゴールラインを切り、パンを齧った。

「美味え」

拍手が起こる中、慶はそう呟いた。

*

「いやーすごかったねけーちゃん」

お昼休み。茜、慶、奏、修で飯を食べてるときに茜が言った。

「まあな。差が差だったから少し本気出した」

「ふんっ。少しは加減しなさいよ」

「見てて一番興奮してたの奏じゃ……」

ボグッと奏が修を黙らせた。

「余計な事言わなくていいの」

「……だからっていきなり殴るってなくね？」

鼻血を垂らしながら言う修を無視して奏は聞いた。

「で、慶の次の競技はなんなの？」

「あー。クラス競技と二人三脚と最後の組対抗リレーだな」

その瞬間、奏の耳がピクツと動く。

「………二人三脚？」

「ああ」

「……ああ、茜とよね。そうよね。そうでしょうね？」

「なんで確認から問い詰める形になってんだよ」

「ちなみに私じゃないよ？」

茜が言った瞬間に奏の目の色が変わった。

「……………誰とよじゃあ」

「花蓮とだよ。本当は茜と出るつもりだったんだが、どうしても茜が無理って言つてな」

「だ、だつて恥ずかしいもん！あんな競技。リレー種目じゃないしい……………」

「いやリレー種目のがよつぽど目立つと思うんだが……………」

最後に修が言う。「あつ、確かに……………」と茜が呟いたのはともかく、慶は聞いた。

「つーか、俺の競技なんて観てどうすんだよ」

「ビデオに収め……………あつ、いや失敗するざまを見下して笑うのよ」

（言い直した）

修と茜はおにぎりを齧りながら同じ事を思ったが、慶はツツコまなかった。

「お前ほんと性格悪いーのな」

「あなたにだけは言われたくないわね」

「ま、そう思うなら見とけよ。俺と花蓮のコンビネーション見せてやるから」

「ふーん、そつ」

興味無さげに思わせておいてうずうずしながら奏は答えた。

「しかし慶。お前のクラスは二人三脚は男子に人気じゃなかったのか？」

「人気だったよ。俺はじゃんけんで勝ち上がったんだ。そういう修は負けたのか？」

「いや？俺はジャンケンしてない。佐藤と組めってほとんど決定事項だった」
「けっ、リア充爆死しろ」

と、会話していると茜が入って来た。

「ねえ、なんで男子に人気なの？」

「あ？そんなん決まってるんだろ。女の子との距離が近いからだよ」

「……………けーちゃん最低。カレンに手を出したら許さないからね」

「ふはははは！合法的におっぱいが触れられる距離にまで近付けるんだ！これほどいい
競技はない！」

高らかに笑う慶だった。

第43話

そんなこんなで、二人三脚。花蓮と慶は軽く足を延ばす。

「いやーまさかお前と俺が組むことになるなんてな。正直、姉の友達感覚だったわ」
「昔はよく一緒に遊んだじゃない。茜と三人で」

「そーだっけ？ 忘れたよそんなもん」

「うーわ、ひどっ」

なんて話しながら足を紐で結ぶ。

「太もも柔けーなー。茜とは違っ」

「何触ってんよ勝手に！」

容赦ない蹴りが飛んで来たが、余裕でガード。

「いいだろ別に。てか許可とつたらいいの？」

「なわけないでしょ!!? あんた本当にいつまで経っても変わらないわね」

「はっ、人間という生き物がそんな簡単に変われると思うなよ」

「そうそう、そういうところも相変わらず」

ちなみにそのやりとりを見ながら割と本気で殺意の波動を放っている奏だった。そんなわけで、二人三脚はスタート位置に立った。肩を組む慶と花蓮。

「ラフプレーと正々堂々、どっちがいい？」

「聞くまでもないわよ」

「OK」

ニヤリと邪悪に笑う2人。その様子を見ながら奏は茜に聞いた。

「ねえ、なんかあの子さ。慶と同じ顔してるけど大丈夫なの？」

「大丈夫じゃないよ？」

「はっ？」

「昔からあの二人ってダメなんだよね。けーちゃんの悪巧みについていける数少ない人の一人だから。カレンって」

「なんでそんな二人を組ませたのよ！」

「わ、私に聞かれても……あははっ」

「クラス委員でしようがあんたは！」

で、レーススタート。慶は早速、自分の鉢巻をとって、隣で走ってる奴の足を掬った。ちなみにこれ、0・1秒の早技である。で、転んだ一瞬を狙って花蓮がそのチームの足の鉢巻を解く。これも0・5秒。よって、そのチームは失格となった。

そして、また二人は邪悪に笑った。

「行くぜ」

「おう！」

そのまま、元々早い上のラフプレーによって断トツゴールを果たした。

*

続いて、クラスの男子全員によるタイヤ取り。ちなみに女子は竹取物語だ。あの竹を取るやつな。で、慶の指揮のもと、クラスは動く。

「いいか、敵兵の群がっているタイヤは無視しろ！なるべく空いてる、もしくは2人以下のタイヤを取りに行け！必ず2人組以上で行動しろ！いいか、我が櫻田茜に勝利を収めるのだアアアツツ！！？！！？」

『うおおおおおおおおおツツ！！？！！？！！？』

クラス全員の士気がさらに高まり突撃した。すると、トランシーバから声が出た。

『こちら一番隊長福品、こちらタイヤにラクビー部がいます。応援頼みますぞーぞー！』
「了解した。俺が今から行く。だが、無理だったら引き摺られる前に手を離せ。タイヤより貴様らの命の方が大切だぞーぞー」

『大将……どーぞ』

「今行く！」

で、通信は切れた。慶は福品の元へ走りながら呟いた。

「これでは道化だよ……」

と、まあ上手い具合に敵だけじゃなく味方もコントロールし、圧勝した。

*

「あんた……凄いわね。呆れるを通り越して軽蔑するわ」

「通り越したら尊敬しねえか普通……」

奏の台詞に納得いかないと言いたげに呟く慶だった。

「いいだろ、勝ってんだから」

「ほとんどラフプレーじゃない」

「バツカお前正々堂々とも勝ってんだろ」

「味方まで騙してるじゃない」

「悪いな、頭良くて」

「うざっ」

ちなみに今はどつかの木の根元。二人つきりで話している。ふと気になって慶は奏を見つめた。

「……………」

「な、何よ」

「やっぱお前オツパイでけーなって思ってた」

「くたばれ変態」

「とても茜と一つしか変わらないとは思えん」

「あ、あんた本当に何言ってるの……………」

「汗でブラが透けてるって言ってるんだよ」

「本当に死ね変態！」

*

そんなこんなで、最後のリレー。クラス代表は当然、慶と茜だ。

「うー……………出たくなかったのに……………」

「まあそう言うなって。体育祭なんだから生徒しかいないし大丈夫だろ」

アキレス腱を伸ばしながら慶が言った。

「それに、アンカーの俺よりマシだろ」

「アンカーだけ一周走るからねー」

「そもそもなんで三年差し置いて俺がアンカーなんだよ。意味わかんねえよ」

「それはほら、けーちゃん王族だし早いじゃん」

「お前も王族だしはえーだろ」

「女子だもん。ていうかそんなに早くないし」

なんて話しながらもスタート位置に並ぶ2人。そのままスタートした。

「茜、終わったら起こしてくれ」

「はあ……はいはい……」

一年生が走り終え、茜にバトンが渡る。

「櫻田さあああああんツツツ!!??!!??!!??」

応援席から声上がる。

「恥ずかしいからやめてよ……」

と、眩きながら茜は走る。で、自分の前の3年の男子生徒に渡した。茜に渡されたというところもあり、バカみたいに張り切って出発。そのまま茜は慶を起こす。

「ほらっ、けーちゃんっ、起きてっ……」

「んっ……おお、おはよう。っーかなんで疲れてんの?」

「リレーだからだよー！」

「そりやそうか……」

何て言いながら立ち上がる慶。軽く首をコキコキ鳴らすと、言った。

「じゃ、行くか……」

そのままスタート位置に立つ。後ろからは三年生の女子生徒が来る。慶の周りには3年の男子生徒ばかり。それでもまったく緊張した様子なく、慶はリードを取った。現在は白組がリード。慶はバトンを受け取った。

「今日の私は、阿修羅をも凌駕する存在だッ！」

と、訳のわからない事をほざきながら走り出した。前を走るのは陸上部の元エースだ。距離はほんの1mほどの差だが、縮まらずにも離れない。ひよつとしたら、ひよつとしたらあるんじゃないか？みたいな空気が流れてきた。そして、半周が終わり残り半周。

「けーちゃーん！頑張れー！」

茜の声が聞こえた。その隣で奏（さつきまで走ってた）がビデオカメラに慶の姿を納めていた。それに応えるように慶も加速する。

「っ」

「ッ」

二人は走る。その時だ。慶が転んだ。顔面から地面にヘッドスライディングする。世界が静止する中、そのまま前の三年生は走ってゴールした。

「……………」

全員が黙り込む。勝った三年生すらも黙り込んだ。慶は中々起き上がらない。転んだ姿勢のまま微動だにせず、固まっていた。周りの生徒も、「あれ？なんか変じゃね？」「寝てんのあれ？」「微動だにしねーんだけど」みたいに騒つく。

「慶！」

不審に思った奏と茜が駆け寄った。

「大丈夫なの？？」

「けーちゃん！」

すると、「うつ……………」と声が聞こえた。

「どうしたの？どこか痛いなの？」

「起き上がれないの？」

聞かれるが返事はない。と、思ったら枯れた声でこう言った。

「……………やべーよ、恥ずかしくて顔上げらんねーよ……………悪いんだけど、このまま閉会式行つてくれる？」

「行くか！起きろ！」

蹴られた。

*

体育祭が終わり、自宅。転んで泥だらけになった慶はシャワーを浴びた後、葵に手当してもらっていた。結構な勢いの後に豪快に転んだため、顔や腕、足などに擦り傷がある。

「痛た！痛いつつーの！腕取れるから！」

「我慢しなさい。男の子でしょ？」

「ナイトブルームは女の子ですよ！」

「いや、あなたは櫻田慶よ？何言ってるの？」

で、膝に絆創膏を貼る。すると、葉がやって来た。

「お兄様、だいじょうぶ？いたくない？」

「おう。ていうか痛いという感覚を教えて欲しいまでもある」

「そう、じゃあ味あわせてあげる」

「いだだだ！いてえよバカ葵！」

すると、葉が絆創膏を持って慶の膝の上に乗った。

「しおりが、貼ってあげる」

「えっ？マジで？ちよっ……そんなことされたら元氣500万馬力サイクロン号になっ
ちやうよっ！」

「バイクになるのかよ」

修がツツコンだ。で、葉はティッシュを消毒液で濡らすと、慶の頬の傷に当てた。

「いたい？」

「むしろ気持ち良いでござる！」

「よかった」

で、絆創膏を貼り終えた。

「どお？」

「拙者もう死んでもいいでござる」

「死んじゃ、めっ」

「あっ、すいません」

第44話

翌日。振り替え休日だ。てなわけで、約束の奏と慶のデートの日である。奏が鼻歌を歌いながら服を選んできると、服を決める相談役の茜が声をかけた。

「カナちゃんなんか機嫌良いねえ〜」

「そう？普通よ♪」

「とてもそうは聞こえないよ……」

茜が呆れ気味にため息をついた。

「本当にカナちゃんはけーちゃんが好きなんだねえ〜」

と、何気なく茜が言った瞬間、ピタッと奏の動きが止まった。と、思ったら顔を真っ赤にして言った。

「ちっ、ちちち違うわよ！だ、だりやつ……誰があんなヘンタイゴミバカクソ愚弟のことなんか好きになるもんですか！あんな奴を好きになるくらいならフナムシを好きになった方が100倍マシよ！」

「ふ、フナムシ……？」

「まったく……いきなり変なこと言わないで……。それより茜、やっぱり清楚系で行った方がいいかしら？」

「好きにすればいいじゃん……。ボディーラインを強調とか私はしたくても出来ないから……」

「それもそうね」

そのシレッとした反応にイラツとしつつもなんとか堪える茜。

「よし、これに決めたわ」

そう言うと奏は着替え始める。決まったのなら出て行こうと思って茜が立ち上がった時だ。ガチャツと扉が開いた。

「おい奏。あくしろよ」

慶が入って来た。茜は「あちやー……」と言わんばかりに額に手を当て、奏は手に持っていたシャツで自分の身体を隠す。

「つて、なんで半裸？露出狂の練しゅ……グホツ」

「出てけえ！」

椅子を投げられた。

*

で、2人並んで駅へ向かう。

「あー……いてえ」

「わ、悪かったわよ……」

「椅子投げられたの初めての経験だわ。つたく……」

「で、でも人を露出魔扱いしたんだからおあいこよ」

「へいへい。で、なんだっけ。遊園地？」

「そつ。たまにはいいでしょ？」

「まあお前も生徒会で頑張ってたんだしな。いいんじやねえの？」

「へっ？わ、私頑張ってるように見えた？」

「なに、頑張ってたのかよ」

「い、いや？すごく頑張ってたよ。うん」

「へえ、ほんとに頑張ってたんだ。俺は見てなかったから知らんけど」

「なにそれテキトーに言ってたの!?!？」

「まあな」

「なんか喜んで損した……」

そんな話を話しながら歩いてると、駅に到着した。てか、めんどいからもう遊園地到

着でいいよね。約束通り慶の奢りでチケットを購入。

「ほら、奏。チケット」

だが、奏は受け取ろうとせず、顔を赤らめてモジモジしながら言った。

「ね、ねえ。慶……」

「あん？」

「き、今日だけでいいからさ……わたしのこと、昔みたいにカナちゃんって、呼んでくれない？」

「カナちゃん」

「いやそうじゃなくて。永続的に」

「なんでまたそんなめんどいことしなきゃなんねんだよ。大体、俺が中三の時に馴れ馴れしく呼ぶなっつってきたのそっちだろ」

「いい、今はいいのよ！」

言われて慶はため息をついた。で、改めて呼んだ。

「行くぞ、カナちゃん」

「！ うん、けーちゃん！」

「それはやめろ。なんかお前に呼ばれると鳥肌立つ」

「どういう意味よ！」

そんなこんなで、デートスタートである。

第45話

さっそく二人はジェットコースターの列に並んだ。振り替え休日なので、普通の人にとっては平日という事もあり、あまり混んでなくてすんなり乗れた。

「ジェットコースターなんて久しぶりだわ。ね、慶……」

言いながら慶の方を見ると、ものっそい汗をかいていた。

「……………どしたの？」

「は？何が？」

「いや、尋常じゃないくらい汗かいてるけど。なんかあつたの？」

「いやー今日は暑いなおい。この遊園地暖房入ってんじゃねえの？」

「いや外で暖房入れてどうすんのよ。もしかして怖いの？」

「は？怖いって何？ちよつと英語で話されても分かんないんだけど」

「純然たる日本語よ。ていうか英語でもあんた分かるでしょうが」

最初は多少心配していたものの、段々とからかいたくなってきたいる奏。

「ふうーん、そつ。まあそれならいいわ。この後も安心して色んなものに乗れるしね」

「……………いろんなもの?」

「あれとかそれとかこれとか」

奏の指差す先には色んなジェットコースターやら空中ブランコやら何やらと色々あった。それを見るたびに震える慶だが、「はっ」と笑ってみせた。

「怖くねんだよ。まだお前の方が怖えよ」

「なんか言つた?」

にっこり微笑む奏が怖い。

「いやなんでもないです」

「お、来たわね。乗るわよ」

「お、おう」

今更、自分に気合を入れる慶。で、二人はジェットコースターに乗る。

(よりによって一番前エツ!!?)

一番前に乗せられ、座らされた。二人の肩にガコンと安全バーが降りてくる。

(逃げられなくされた)

「あの、慶?なんか顔色悪いんだけど」

「はあ?悪くねえし。お前の目が濁ってるだけだろ」

「へえ、そう?なら早く出発しないかな」

(こ、この野郎……)

なんてやってる間にグワンツと動き出した。そのままゆっくりとレールの山を登り始めた。

*

青白い顔をして降りてきた慶。

「し、死ぬ……」

「あら、怖かったんだ？」

「はあ？怖くねえし……むしろあと10回くらい乗ってもいいねうん」

「じゃあ乗ろつか。あと10回は無理だけど……3、4回くらい」

「えっ、ちよっ、嘘っ」

乗せられた。

*

そのまま死にかけて降りてきた慶。

「ん〜……。面白かったあ。次は何乗る？」

「鬼か！少し休ませろ！」

「怖くないんじゃないの？」

「ジェットコースター5回も連続で乗ったら誰だって疲れるわ！」

「そう？じゃあ休憩しよつか。なんか飲む？」

「それくらい自分で買うからいい」

「それくらいお姉ちゃんに奢らせなさいよ」

「……………別にあんま人いないんだし、選挙の顔作んなくてもいいんじゃないの？」

言うのと、奏は少し黙り込んだ。で、「別にそういうんじゃないけどな」と小声でポ

ソツと呟くと、すぐに笑顔を作って言った。

「いいから。何がいい？」

「……………ジンジャエールで」

「了解」

そのまま近くの売店に走って行った。その後ろ姿をぼんやり眺めると、ポケットがブルツと震えた。

AKANE『カナちゃんとデートどう？』

櫻田慶『死ね』

即答して奏を待つてると、また震えた。

AKANE『なんでそういう事言うかなー。で、どうなの？楽しい？』

櫻田慶『初っ端からジエツトコースター連続搭乗記録チャレンジみたいなことさせられて死にかけてる。今、あいつ飲み物買いに行つてる』

AKANE『うーわ……それは辛いわ。何回乗つたの？』

櫻田慶『はいばーびじょんだいありー』

AKANE『5回!?？けーちゃんジエツトコースター苦手なのに平気なの!?？』

「あれ？通じた？」

と、眩いた時だ。

「はいっ、お待たせ」

「おお、さんきゅ」

奏が戻つて来て、慶は飲み物を受け取ると、

櫻田慶『カナちゃん戻つて来たから後でな』

と、返して携帯をしまった。その直後にヴーツとポケットで震えたが無視。

「で、この後どうする？」

「飲んでからでいいだろ」

「聞いただけじゃん」

ジンジャエールを口に含んでから、少し考えて口を開いた。

「げっふ！げっふ！エツフツ！」

「ど、どうしたの？！」

「ジンジャエール、喉に……」

「で、どこ行きたい？」

「切り替えはえーな……。スイッチかよ。どこでもいい。なるべく穏やかな奴」

「じゃあメリーゴーランド」

「穏やかっつーかファンシーだな。てか恥ずかしいからパス」

「うん……。それは私も恥ずかしい」

ならなんて言った、と思いつつも口には出さなかった。

「で、どーすんだよ」

「一番近いとこでいいんじゃない？」

「えーつと……地図によると一番近いのは……」

と、奏が指差した先は、お化け屋敷だった。

第46話

「さて、じゃあ行こうか慶？」

勝ち誇った笑みで慶に言う奏。だが、

「おう」

と、すんなり立ち上がった。

「あ、あれ？怖くないの？」

「本物のお化けは怖いけどここはお化け屋敷だろ？中身は人間って分かってんだ。怖か
ねーよ」

すると、「つまんねー」とでも言わんばかりに奏はため息をついて立ち上がった。

「そう。それなら行きましょう」

「カナちゃんは怖くねーのかよ」

「そんな子供じゃないわ」

「じゃあ先に悲鳴を上げた方が後でなんか奢りな」

「いいわよ」

で、二人はお化け屋敷へ向かった。

*

(つて、何よこれ！外見より本格的じゃない！)

と、心の中で悲鳴を上げてるのが奏だ。モチーフは病院で、患者服のお化けやら何やらが出てきて中々にリアリティがある。一方の慶は、

「あつひやつひやつひやつひやつ！大腸はみ出てやがる！あつひやつひやつひやつひやつ！」

と、爆笑していた。

(あんだなんか地獄に落ちればいいのよ！)

心の中で呪う奏。その奏に慶はニヤリと笑って聞く。

「怖いか？奏」

「は、はあ？全然怖くなんか……」

「……………おい、おまえ後ろ」

「ひやつ、なに？」

振り返るが何も無い。

「いやなにもないけど」

「な、なによ！ビククリするじゃない！」

「ていうか、今『ひやつ』って悲鳴上げたよね」

「はあ？……あつ」

「はい、後で奢り〜」

「ち、ちよつとズルいわよ！そんな……」

と、言いかけた奏の手を慶は握った。

「やっぱり怖いんだろ」

「こ、怖くないわよ！」

「手汗がすごいけど」

「お、女の子に普通そんなこと言う？！」

「怖いなら無理すんなよ」

言われて、奏は少しビクツとする。

「別に俺はお前の怖がつてる姿見てどうしようとか思っていないから」

「……………」

「ちよつと弱みになればいいかなくらいにしか思っていないから」

「あんた最低だ！」

「さ、震えは止まったら。行くぞ」

慶が手を引き、奏がついていく。

「ううっ……私がお姉ちゃんなのに……」

「そうかい。そりやドンマイ」

いつの間にか手を繋ぐどころか腕に引っ付いてる奏。そして、そのままゴール付近まで来たときだ。

「あん？」

「えっ、な、何??？」

慶が声を上げた。視線の先には真っ白の着物を着た女が真っ直ぐこっちを見ていた。それになんとなく靈気のようなものを感じた慶。思わずゾクツツとしてしまった。

「……………」

「ど、どうしたのよ?」

「なんでもねえよ。ほらゴールだ」

そのままゴールした。お化け屋敷から出た瞬間、奏は胸を張っていった。

「ふんっ、まあまあだったわね」

「携帯みたいに震えてた癖に何言ってるんだ」

「う、うるさいわね! 大体、あんただって出口のところまで震えてたじゃない!」

「あ？ああ、あそこにいた白い人はなんとなく雰囲気出てたからな」

「はあ？そんなのいなかったわよ？」

「えっ？」

「えっ？」

慶に嫌な汗が流れる。

「……………」

「慶？」

「う、うん。気のせいだなうん……。カナちゃん、飯にしよう」

「う、うん」

*

そのまま二人で飯を食ってその他諸々のアトラクションに乗った。で、なんやかんやで夕方。

「そろそろ帰ろうぜ」

「あ、待って」

「えー。まだなんか乗るのかよ……」

「いいから。次ラストだから」

「何乗るんだよ」

「観覧車」

「恋人かっつての」

「んなつ……な、なわけないでしょ!?!? 自惚れんなバーカ!」

「お前がバカ」

なんて話しながらも二人は観覧車の中に入った。

「おお……おいおいおい、高えなおい」

慶は窓の外を眺める。

「ガンダムより高えんじゃねーの?」

はしゃぐ慶を見ながら奏は微笑んでいた。

「ねえ、慶」

「あー?」

「今日は楽しかった?」

「まあな。怖かったけど」

「そっか、良かった」

「それは俺の台詞だ。奢ったのは俺の方だからな」

言うと慶は座った。

「ねえ、慶」

「あ？」

「二人きり、だね」

「そーだな」

奏は慶の隣に座る。

「……………なんだよ」

「……………」

奏は何も言わない。そのまま慶に顔を近付けた。

「おい、近いぞ」

だが、奏は無視して慶に手を伸ばす。と、思ったら慶の頬のご飯粒をとった。

「あ？」

「お昼の時からずつとついてた」

「マジかよ！え、なんで言ってくれなかったんだよ！」

「その方が面白いもん」

「うーわ！マジ恥ずかしい奴じゃん！」

と、慶が喚いてる時だ。ガタンツと観覧車が止まった。その結果、奏と慶の唇が重

なった。

「っ」

「……………」

目を見開く二人。そして、慌てて離れた。そのまま気まづい沈黙が流れることしばし。動き出した。

「……………」

「……………」

奏は真つ赤な顔をしたまんま動けなかった。すると、ヴーツと携帯が震えた。櫻田家の家族LINEだ。

櫻田慶『姉に童貞取られたったお☆』

「変なこと送ってんじゃないわよー」

た。

「バカ、光！死ぬ！死ぬから早く回復しろ！」

「え、えつと……回復薬グレート、回復薬グレート……ど、どこ？」

「知らねーよ！もういいから、エリア移動しとけ！」

慶が言うと、光は急いで移動する。

（なんであいつはいつも通りなのよ……私だけ悩んでバカみたいじゃない……）

「えー嘘お!!?なんでアオアシラがこっちにいるのよ！」

「そいつ大して強くなーだろ！てか回復薬グレート飲んだらさっさとこっち来いよ！」

「死ぬ！カヤンバ！」

光と仲良くゲームしてるから余計に腹が立つ。その2人に墓から声がかかった。

「二人ともー。食器運ぶの手伝いなさーい」

「はーい」

で、食器を運ぶ。すると、茜が声をかけた。

「あつ、カナちゃんも手伝ってよー」

「……………はあ？」

「な、なんで怒ってるの？」

「別に」

「いや明らかに怒ってるじゃないですかー」

「イントネーションむかつく」

そのまま奏は不機嫌そうに手伝った。すると、茜は慶の服の裾を引っ張った。

「ちよつと、カナちゃん何したの？なんかすごく不機嫌だよ？」

「ん？ああ、キスした」

「はあ……それですかあ……いや待って、今なんて？」

「や、だからキスした」

その瞬間、カツシャーンツと食器の割れる音がした。葵がコップを落としたのだ。気が付けば、全員が固まっている。

「いやー二人で観覧車に乗ってたら奏が俺の頬の米粒取ってくれてさ。その時に観覧車がガタンツと止まっちゃまって勢い余ってキスしちゃったんだよね」

と、能天気な解説する慶の両肩を掴む葵。

「つてことは、事故なのよね？姉弟の中で起こってしまった間違いとか禁断の恋とかじゃないのよね？私がお父さんとかお母さんに怒られることはないのね？」

「そ、そうだけど……てか指が食い込んでる痛い痛い痛い」

すると、ホツとした雰囲気の流れる。

（そうだよね……慶にとってはそんな認識だよね……）

と、奏は少し自虐的にフツと微笑んだ。

*

体育祭が終わったと思ったら文化祭である。二学期というのは切羽詰まってるのだ。修学旅行もあるし。HRの間、慶はずって寝ていて起きたら文化祭実行委員になっていた。

「あの、なんで……?」

もちろん、奏↓茜の根回しによるものだった。

第48話

そんなわけで、文化祭実行委員として委員会へ。ちなみにクラス委員の茜も一緒だ。そのまま席に着く。

「つたく、なんで俺がこんな事を……」

「いいじゃん別に。私はけーちゃんと一緒に仕事できて嬉しいよ?」

「ていうか、お前クラスであんま仲良くない人と一緒に組むくらいならって思ってた俺にしたろ」

「うん」

「家帰ったら殺す」

「そ、そんな怒らないでよ……」

なんて話していると、奏が前に出た。

「えーでは、そろそろ始めたいと思います」

と、場慣れした声。そのまま文化祭の目的だの何だののお利口さんにも程がある内容を話して今日は終わりになった。

「あー。つつかれたあ……」

「じゃ、帰ろっかけーちゃん」

「おー」

そのまま二人は教室を出て、廊下を歩く。

「あ、ごめん。ちよつとトイレ行つていい？」

「どーぞ」

茜はそのままトイレへ。慶は暇だったので鞆から監獄学園を取り出した。すると、ペツタペツタと廊下を歩く足音がした。なんとなくそつちをみると、奏が歩いている。

「……………」

別に隠れているわけでもないが、「こつち気付くかなー」みたいな感じで奏を見ていた。が、奏はそのまま自分の前を素通りする。

(……………意識はこつち向いてた、よな)

なんとなく分かる慶だが、今は素通りされた。無視されたということになる。いや、もしくは用がないから特に話しかけなかったただけかもしれないが。

(俺なんか嫌われるようなことしたっけ……)

なんて考えてると、後ろから声がかかった。

「おつまたせー。帰ろっかけーちゃん」

「お、おう。うんこか？」

「殴るよっ！」

「ゴメンなさい」

で、そのまま二人はまた帰宅した。

*

帰宅。

「たっだいまー！」

茜が元気良く帰宅し、リビングに入る。慶はその後に続いてダルそうに。で、鞆をソファアに放つて手洗いうがいをしようとした。が、鞆を放ったソファアから「痛っ」と声が出た。

「あん？」

が、ソファアには誰もいないし、ほかの誰も気付いてない。何より、聞き覚えのない声だった。不審に思つて慶はそのソファアの方へ向かう。が、誰もいない。

「……………」

そこにパンチを試してみた。が、当然空を切る。

「何してんのけーちゃん？」

岬に聞かれた。

「や、ここに誰かいなかった？」

「はあ？いないと思うけど」

「……………」

慶の頭の中に「霊」の一文字が浮かんだ。

「ちよつ、なんか汗凄いいけど」

「いい、いやいやいやいや。なーい。ありえなーい。もう21世紀だよお前。そんな時代に霊なんてバカ言っちゃいかんよ君。確かに宇宙世紀になっても霊見えるどころか飛ばしたりする奴も一部にはいるけど、それはあれな連中だし、人類の革新だし、俺に先読み能力とかないし、ファンネル飛ばせないし、総合するとないつ。絶対ないつ。認めないつ。サイボーグゼロゼロナイつ」

「な、何言つてんの？本当に大丈夫？」

岬が割と本気で心配そうに声をかけた。だが、その後ろに白い着物を着た半透明の女が見えた。

「」

「けーちゃん？」

「岬、後ろ……………」

「へ？」

言われて振り返る岬。側から見たらバツチリ目が合ってる。だが、

「？ なんもないじゃん」

「はえっ？」

「ほんとどうしたの？」

「落ち着け岬」

「その台詞、そっくりそのままピッチャー返し」

「よく見てみろ」

「いや、だから何も……………」

「あれ？」

確かにいなくなっていた。さっきまで岬の後ろにいた女はいない。

「な、なんだ……………気の所為か……………」

「ほんとにどうしたの？」

「や、何でもない。大丈夫だ」

「ならいいけど……………」

なあんだ、気の所為かあ……………と、慶がホッと息をつく。そして、栞でも見て癒されよ

うと思った時だ。味噌汁の味見をしようとしてる栞の口から半透明の手が生えていた。「おっふあぎやぎやつ！」

腰を抜かしてひっくり返る慶。

「ちよつとけーちゃん？ほんとどーしたの？」

「栞イイイイイイツツツ！！？！！？手がアツ！とんでもねーところからから手がアアアアアツツ！！？！！？！！？」

「？な、なにいつてんの？」

「ペってしなさいペツて！ばつちいから！」

「ちよつと慶？どういう意味」

にっこり微笑んで怒る葵だったがそれどころじゃない。ていうか、よく見ると葵と栞の間に半透明の白い着物の女が立っていて、栞の後頭部から口にかけて腕が貫通していた。

「ホツギヤオアアアアアツツ！！？！！？」

悲鳴をあげる慶。

「な、なんか尋常じゃないよ慶兄さん……ついに壊れたみたい……」

遙がドン引きしながら言った。

「言ってる場合か！栞が死……」

と、言いかけた慶の後頭部をガンッと修が殴った。

「落ち着け」

「修！いやだっ……」

「いいから、一度顔でも洗ってこい」

「や、だから……」

「いけ」

瞬間移動で飛ばされた。で、洗面所。顔を洗う慶。

「あー……クツソ……何なんだあれ」

「本当何なんだろうね」

「あ？」

聞き覚えのない声がかかって、みると半透明の白い着物の女がいた。

「」

「やつほ」

「ギャツ……！」

悲鳴を上げかけた慶の声が止まる。

「っ……」

「ゴメンね。少し黙っててねえ」

靈氣的な何かで黙らせられ、呼吸が止まる。

「このままであなたが生んじやうから手短に言うね。私はあなたのお婆ちゃんのお母さんでええす」

「あなたに遊園地で見つかつちやったから、しばらくあなたに憑くことにするね」

「以上でええす。終わり」

そのまま気を失った。

第49話

夜中。慶は気絶からようやく目を覚ました。どうやら誰かが部屋で寝かせておいてくれたようだ。

「あ、起きた〜?」

目の前に半透明の女。

「アギヤツ……!」

が、また呼吸を止められる。

「いい加減慣れてよ〜。もうみんな寝てる時間よ〜?」

「ツツ」

「叫ばないって言うなら解放してあげるけど〜?」

すると、コクコクと頷く慶。で、プハアツと解放された。

「ハア……そ、それで……ひいばあ様?」

「咲ちゃんでもいいわよ〜」

「じゃあ咲ちゃん。まずなんであんなそんな若いんですか？」

「それはもちろん、若い時に私が死んじゃったからだよ」

いきなり踏み込んだ質問をしてしまったような気がして、つい黙り込んでしまっただった。

「なんかごめんさい……」

「気にしないで」

「で、もう一つ。なんで俺に咲ちゃんが見えるんですか？もしかして……」

「能力じゃないわよ？ただあなたの霊感がニュータイプバりに強いだけよ」

「あの、その最後の語尾の間延びした感じのやめてもらえませんか？なんか身震いするんで」

「お化けの宿命だから、勘弁してね」

「そうすか……。てか霊感強いつて……」

「だから相手に霊を飛ばして金縛りさせたりも出来るのよ？」

「マジでか！」

「その代わり、飛ばされた相手は幽体離脱しちゃうから気をつけてね」

「ていうかこれほとんど能力だろ！霊感強いなんて次元じゃねえぞ！」

「だから言ったでしょ？ニュータイプばりに強いつて」

「カミーユじゃねえか！」

すると、隣のベッドから誰かがムクリと起き上がった。

「もおく……どしたのけーちゃん……？夜中に……ていうか、洗面所で何してたの？」

「あ、いやなんでもない。つか何もしてない」

「そう……。晩御飯下にあるから、食べといてよ」

「おお、すまん」

そのまま茜は再び寝た。で、慶はリビングに向かう。で、サランラップに包まれてる飯をかつ込んだ。

*

それから3日くらい経った。文化祭実行委員会が終わり、今日も茜と慶は一緒に帰宅。

「茜、少しいいか？」

「へっ？」

慶はマツクの中に入り、茜も後に続く。

「奢るから」

「ど、どうしたのけーちゃん。頭でも打った？」

「いや違うから。ちよつとな……」

で、二人でポテトのMとジンジャーエールを買い、席に着いた。

「で、どうしたの？」

「実はさ、奏とデートしてから一回も話してないんだよね」

「へ？そ、そーなの？」

「いや話してないっつーか、マトモな会話が無いんだよね。話し掛けてもなんか理由付けられて逃げるし」

「ふーむ……」

「なんでかなーって思ってた」

「そんな事、私に聞かれても……」

「だから聞いてきてくれない？なんかあいつと話せないとなつまんないから」

「へっ？そ、それどういう……」

「あれくらいプライド高い方がからかい甲斐がある」

「ああ、やっぱりそういうこと……」

「とにかく聞いていてくれ」

「うーん……タダでっていうのはなあ……」

と、キャラに合わずニヤリと笑う茜。

「いや、だから前金払ってんだろ」

「へ？」

ポテトとジンジャエールを指差す慶。「読まれてた……」とばかりに茜は膝をついた。

第50話

そんなわけで、二人は帰宅。茜は奏の元へ歩いた。

「ねえ、カナちゃん。けーちゃんと最近話してないけどなんかあったの?」

ブツフォー!と慶は嘔き出した。

(安直!安直過ぎる!ガーベラストレートか!)

案の定、奏は不機嫌そうにジロリと睨んで聞き返した。

「……………急に何?」

「えっ、あー……………いや……………」

案の定、びびりまくる茜。慶は速攻で自分の部屋に逃げた。

(もうあいつはダメだ。別の奴に相談しよう)

で、着替えて葵の部屋へ。あいも変わらずノックなしで入ると、葵が着替え中だったが、全く無視して慶は部屋のベッドに腰を下ろした。

「なあ葵、ちよつといいか?」

「……………その前に何か言うことは？」

「綺麗な体してるね、とか？」

「そ、そう……………」

許された。で、着替え終わって葬は若干顔を赤らめながらもコホンと咳払いして言った。

「それで、どうしたの？」

「や、奏の事なんだけどさ。ここ最近一回もまともに話してないからどうしたんかなって思ってる」

「うーん……………それは私には分からないけど……………。そういえば、キスしたって言ってたよね？あれほんとなの？」

「ガチだよ。事故だけど」

「それだね」

「はあ？あんなんで？大体、ガキの頃はよくしてただろうが。お前も」

「子供の頃の話でしょ？」

「いや、子供でも立場は家族で変わらないだろうが」

「じゃあ、今私が慶にキスしたら？」

「状況が違うだろ。お前がやろうとしているのは故意的だ」

「ひねくれ者」

「普通だろ」

で、困ったわねえと顎に指を当てる葵。

「で、どうすればいいと思う？」

「うーん……。とりあえずその鈍感さをどうにかしたらどうかしら？」

「はあ？ つい最近ニュータイプみたいって言われたばっかだぞ」

「いやそういうことじゃなくて……」

本当にどうしましょうと考えてると、コンコンとノックの音がした。

「あ、どうぞ」

「入るわよ」

「きゃなでっ!!?」

「キャメラみたいに言わないで！」

と、そこを訂正しておいて奏は言った。

「慶。話があるの」

「あ？」

で、奏は慶の前に座った。

「なんだよ」

「その、茜から話聞いてね。ごめんね、別にあんたを避けてたわけじゃないのよ」「いや避けてたよね完璧に」

「いや、だから……この前、遊園地でさ。その、しちゃったじゃない……?」

「キスのことか?」

「オブラートに包みなさいよ!」

「なんで?」

「……もういいわ。とにかく、その……しちゃったから……」

「『しちゃったから……』って意味深に言った方がよっぽどエロいけどな」

「いいから聞きなさいよ!」

で、コホンと咳払いして言った。

「と、とにかく、その……あの時にキスしたのが、恥ずかしくて……慶の顔を見ると、顔が赤くなつちやうから……それで」

「今赤くねーじゃん」

「今はね?!?決心したからね?!?」

「いや決心するほど恐ろしい顔なのかよ俺……今のちよつと傷付いたぞ……」

言いながら慶は葵に抱き着いた。葵は葵で苦笑いしながら慶の頭を撫でた。

「と、とにかく!それだけだからね!じゃあね!」

「で、本題は？」

「話聞いてなかったの!!? もういい！」

そのまま奏は立ち上がり、部屋を出て行こうとする。その奏の背中に慶は言った。

「でも良かったよ。嫌われてたわけじゃなくて」

言われて少しどきつとする奏。で、

「私が慶を嫌うわけじゃないでしょ、バカ」

と言って出て行った。

第51話

そんなこんなで、文化祭当日となった。あれから奏はいつも通り復活し、文化祭の準備も良く進み、ゲストでさっちゃんも光も呼ぶ事になった。

「いいですか、皆さん。我々は文化祭実行委員として裏方で動かなければなりません。楽しむ時間はないかもしれませんが、それでもその他生徒たちのために頑張りますよ
う」

奏が言うと、「おーっ！」と全員が拳を突き上げた。

「それと、空き時間の方はなるべくクラスの方を見てあげて下さいね。それでは、解散
！」

と、言う全員がそれぞれの持ち場に着く。そんな中、茜が奏の袖を引っ張った。

「ねえ、カナちゃん。けーちゃんは？」

「……………いないの？」

「うん」

言われて全員の背中を見る。ほんとにいなかった。奏が慶の存在を見逃すはずもない。

「……………サボりね。見付けたらただじゃおかないんだから……………」

「けーちゃんの担当は確か……………私と一緒に見回りだよね」

「探すわよ茜」

「うん」

*

美術部による体験お絵描き会。そこに慶はいた。

「〜♪」

「さ、櫻田くん……………随分と上手いね……………」

声をかけたのは二年生、つまり慶と同じ年の部長だ。

「ん、おお。まあ絵くらい家でも描いてるからな」

「や、それにしても上手すぎ……………本当に素人？」

「おう。……………つと、描き終わった」

慶が描いたのは奏と栞が気持ちよさそうに寝ている絵。

「なあ、この絵その辺に飾つといてくれる？」

「へっ？いい、いらなの？」

「後で欲しがりそうな奴が来ると思うから」

「わ、分かった」

そのまま慶は出てった。

*

その5分後。ガララツと美術部の扉が開かれた。

「あっ！さ、櫻田先輩に茜ちゃん！」

「ごめんなさい。慶はいる？」

奏が聞いた。

「ほんの5分ほど前に出て行きましたが……」

「一步遅かったか……」

茜が悔しそうにつぶやいた。すると、奏が「あっ」と声を漏らした。目線の先には葉の絵。

「あ、それ櫻田くんが描いていったんです。上手ですよね」

「あんの野郎……余裕まんまでメッセージ残してやがるわね……」

「でも5分前ってことはまだそんなに遠くに行ってないよ！追うよカナちゃん！」

「ええ！でもその前に、」

クワツと美術部の部員に言った。

「この絵、袋に入れてくれる!?」

*

続いて家庭科室。お菓子作り体験会と販売をやっている。そこに慶はいた。

「お、美味しい！何これ！」

家庭科部員の一人が声を上げた。作ったのは慶である。

「そうか？普通だろ」

「そんなことないよ！おい、みんなちよつと来て！」

「おいおい……まあたくさん作ったから食ってくれていいけど……」

で、その場にわらわらと集まってくる部員達。

「あ、部長さん。これ奏と茜が来たら渡しといてくれ」

「へ？う、うん」

そのまま慶はその場を後にした。

*

その6分後。奏と茜が到着。

「こんにちは」

「あつ！奏先輩！こんにちは」

「茜さんもこんにちは」

部員全員が2人を見る。

「ここにけーちゃん来なかった？」

「来ましたよー。すつごく美味しいクッキー作ってほんの6分前にどっか行っちゃいました」

「そっかー。ありがと。カナちゃん、クッキー一つだけもらって行く？」

「そうね」

と、茜が言った時だ。

「あつ、そうだ！2人に櫻田くんから渡してくれって」

「へっ？」

などと声が上がる。最早、ライブ会場とかしていた。

*

「目撃情報によるとこつちにいるわね……!」

「そうだねカナちゃん」

と、さつき全部買ったクツキーを二人で食べ歩きながら歩いてる時だ。

「おーい! 奏ちゃん、茜ちゃん!」

声がして振り返ると、光と栞が立っていた。

「あつ、光に栞!? どうしたのこんなところで」

「ゲストで呼んだのはそつちじゃん!」

「だから時間早くない?」

「そりゃ、兄弟の文化祭だもん。少しくらい見廻りたいよ! で、栞も行きたいって言うか

ら一緒に」

「そっかー」

と、茜と話してるときだ。

「茜、早く行くわよ」

「あ、うん。ごめんね二人とも。今急いでるから」

「? どうかしたの?」

「けーちゃん探してるの。音楽室に」

「けーちゃんが演奏してるの!!? あたしもいく!」

で、4人でクツキーを食べ歩きながら、音楽室に向かう。そして、ガララツとドアが開いた。

「あつ、奏さんだ!」

「茜もいるよ!」

「つて、光様まで!」

などと声がる中、二人はピアノの方へ。

「慶! サボってないで実行委員の仕事をしなさい!」

と、奏が言い切った時だ。曲がまた変わった。曲は『Ring Ring Ring Rain
bow!!』。全員、「なんの歌……?」みたいになっている中、光と奏が前に出た。

「Ring Ring Rainbow!!?」

そのまま盛り上がり最高潮にまで達した中、いつの間にか伴奏者である慶は姿を消していた。

第52話

奏、茜、光の三人は音楽室から出た。

「また逃したわね……。逃げ足だけは早い……!」

「いや、純度100%でカナちゃんのをせいで逃してるんだけど……」

「とにかく、三つに分かれて探すわよ。私は校舎、茜はグラウンド、光は体育館をお願い」
「了解」

(ていうかあたしはいつの間はこのパーティの一員に……)

と、不満を心の中で呟きながらも光も動き出した。

「……………あれ? 葉は?」

*

その頃、慶はグラウンドにいる。右手にたこ焼き、左手に焼きそば、ブレザーの左ポ

ケットに学園祭のしおり、同じく右ポケットにジンジャエールをはみ出させて、頭の上に葉を乗せて歩いていった。

「どこで食べよつか葉？」

「お兄様と、落ち着けるところ」

「ラブホ行くかラブホ？」

「なあにそれ？」

「なんでもない」

なんて話しながら歩いてると、休憩所とかかれた場所を見つけた。

「おつ、あそこでいっか」

「うんっ」

で、二人で席に座り、机の上にたこ焼きと焼きそばとジンジャエールを置いた。ちなみに全部、二人で半分ずつである。

「おつ……学祭のたこ焼きにしちや美味しいな……」

「おいしっ」

二人で口元に青海苔を付けながら食べる。

「さて葉、次はどこ行きたい？」

「うーん……(こ)こ！」

葉が指差したのは慶と茜の教室の出し物だった。

「あの、それ俺も茜も出ないよ？」

「そうなの？」

「おう。実行委員で忙しかったからな」

サボってる奴の口から出た台詞である。

「うーん……じゃあ、お兄様と一緒にならどこでも良い」

「そうか？じゃあとりあえずここ行くか」

慶が指差した先は校舎のおばけ屋敷。本物の霊と知り合ってる慶はもはや恐怖の対象ではなくなっていた。

「怖いか？」

「へーき」

「うしつ、じゃあいくか」

「うんつ」

そのままふたりで飯を食った後、再び葉を肩車してお化け屋敷に向かった。

*

途中、わたあめとソーセイジを買い食いしながらもお化け屋敷に到着。

「さあーて、行くぞー葉」

「うんっ」

と、中へ入ろうとした時だ。ガシツと腕を掴まれた。

「あん？」

振り返ると、奏が立っている。

「あつ、やべっ」

「仕事。なさい？」

だが、慶は急いでお化け屋敷の中に入った」

「あつ、コラ待ちなさい！」

奏も入ろうとしたが、中々凝ったようなお化け屋敷に怯む。

「っ……」

が、なんとか勇気を振り絞って突入した。

その頃、前の慶。

(咲さん、咲さんいるか!?!?)

(どうしたの〜?)

テレパシーである。

(後ろの奏の足止めを気付かれない程度に頼む！)

(どうして？)

(あとで板チョコ一枚でどうだ？)

(行つてきまあゝす)

そのまま慶と葉は急いで突破した。その瞬間、お化け屋敷の中から「ヒイ
ヤアアアアアアツツ!!?!!?!!?」とすごい悲鳴が聞こえた。

「……………やり過ぎだろあの人……………というか霊」

と、思いつつもなんとか逃げた。

第53話

慶は再びグラウンドにいる。栞に食べ物だの何だのを奢り歩いていた。

「ほーら栞。クレープだぞー」

「ありがとう、お兄様」

「ほら、あーん」

「あー、んっ」

で、パクツと食べた。

「おいしっ」

(天使)

ほっこりする慶。すると、手刀が慶の脳天に直撃した。

「って」

「やっと見つけたよけーちゃん」

「って、茜か。なんだよ」

「サボってないで仕事！見張りでしょあんたは！」

「あーそういやそうだな。でもパスだ。今は葉とデートしなきゃならない」

「そんなの理由にならないわよ！」

「まあ落ち着けよ。とりあえずお前の分のクレープも奢ってやるから」

「そ、そんな食べ物で釣ろうとしたってダメなんだからね!!? チョコレートでお願いし

ますー！」

「はい契約成立な」

（ふんつ、口約束に決まってるじゃない。奢らせたら早速するからね）

と、薄く笑う茜。で、三人でクレープの列へ並んだ。

「何がいい？」

「あのなんとかシヨコラって奴」

「うい」

で、バンシイが絵柄になってる財布を出す慶。

「あれ？けーちゃん、財布変えた？前までDXじゃなかった？」

「あー……まあな」

「ふーん……」

で、クレープを奢った。

「あーんっ。んー！美味しい。ありがとうけーちゃ……」

だが、慶の姿はどこにもなかった。

「茜お姉様、慶お兄様が『あばよ』って……」

「また逃げられたアアアツツ!!?!!?」

*

校舎にいたる奏。涙目になりながらお化け屋敷から出た。

（まったく、慶の奴は後で殺す）

そんなことを考えながら歩いていると、「生徒会長！」と自分を呼ぶ声があった。

「どうしたの?」

「それが、スリがあつたみたいで……」

「スリ?」

「ええ」

で、そのスリのあつた場所へ。そこでは女の子が一人泣いていた。

「大丈夫?何があつたの?」

「か、奏様……。そ、その……グラウンドでかき氷のお店に並んでたら……。いつの間にか

なくなつてて……」

「……………そう。どんな財布なの？」

「その……弟がくれた黒いガンダムが柄の財布で……」

「分かったわ。先生に連絡しましょう。あなたも一緒に来てくれるかしら？」

「はい……」

*

慶は一人で体育館で暇つぶししていた。このステージで紗千子と光がライブをやるのだ。今は合唱部の歌をやってるけど。とにかく、その様子を眺めていた。

「……………移動するか」

そう思つて立ち上がろうとした時だ。隣に座る女の子がいた。

「よつす、けーちゃん」

奏に頼まれたことなどすっかり忘れている光だった。

「よう。お前もここにいたのか」

「うん。誰かに何か頼まれてここに来たはずなんだけど……忘れちゃった」

「お前そんなくらい覚えとけよちゃんと……。それよりなんか食いたいものがあるなら奢

るぞ」

「ほんとに!?? ありがとう!」

「おう」

で、二人は外に出た。

「で、何食うんだ?」

「じゃあ、一番高い奴!」

「りよーかい」

「え? いいの?」

「臨時収入が入ったからな」

で、二人はお好み焼きを買った。

「ほらこれ」

「おおおー! 美味しそう。いただきまーす!」

で、光が美味しそうに食べる中、慶は学園祭の様子を見ていた。

*

「あ、カナちゃん」

「ああ、茜」

茜と奏はたまたま校舎内で出会った。

「慶はいた？」

「ううん。グラウンドにいたけど逃げられちゃった」

「そう……。それより茜、気を付けなさい」

「？ 何が？」

「さつき、女子生徒がスリにあつたわ。多分、まだ犯人はこの学校内にいる」

「ええっ!!?ど、どんな子がやられたの!!?どんな財布!!?私も探すの手伝うよ!」

「黒いガンダムの柄の財布みたいよ」

すると、ピクツと茜は反応する。

「黒いガンダム……?」

「ええ。どこかで見たの？」

茜は言おうかどうか迷ったが、口を開いた。

「その財布、持つてる人がいたよ」

「ほんとに?誰？」

「……………けーちゃんだよ」

「えっ……………」

第54話

光と別れ、慶はまた体育館で漫才を見ながらボンヤリしていた。すると、
「けーくん」

声がした。振り返ると紗千子が立っている。

「おー。さっちゃん。いいのか？こんなところにいて」

「平気よ。まだ時間あるもん。それより、こんな所でどうしたの？」

「暇してただけ」

「暇なんだ？」

「おー」

それを好機と見た紗千子は目を光らせた。

「その、よかつたら一緒に回らない？」

「ん？おお、いいよ」

そのまま二人は体育館を出た。

*

「……なんか今日1日でメチャクチャここにきてる気がする」

「? どうしたの?」

「なんでもない」

軽くつまらないことをボヤいた慶。二人でそのまま進む。

「なんか食いたいものあるか? ありや奢ってやるよ」

「ほんと!?? じゃあねえ、たい焼き食べたいな」

「OK、じゃあ並ぶか」

そんなわけで、二人は列に並ぶ。その後も二人で周り尽くして30分くらい経つたところで、紗千子の携帯に連絡が入った。

「あつ、そろそろ戻って打ち合わせだつて……」

「マジかー。じゃあまたな」

慶が去ろうとした時だ。

「ま、待って!」

「あん?」

声を掛けられた。振り返ると、紗千子が顔を赤らめていた。

「何」

「ライブ。来てくれる？」

「あ？あーまあな。可愛い妹のためだし。ライブステージに乗り込んで抱きつこうとするゴミがいたらブチ殺す予定だ」

「そ、そつか……。その、せつかくだからさ。私のために来てくれない？」

「あ？どゆこと？」

「……………こんのクソ鈍感……………と、とにかくそういう事だから！絶対来てよね！」

「おう。約束な」

「……………うん！約束！」

そのまま紗千子は体育館へと戻って行った。

「ふう……………さて、俺も暇潰しに体育館に……………」

と、思った時だ。地面に何か落ちてるのを見つけた。

「あん？」

財布だった。早速中を抜こうと中身を見ると空だった。

「なんだよ……………」

とりあえず預けようと、慶は生徒会室に向かった。

*

生徒会室。奏と茜はとある女の子から話を聞いていた。

「これで三件目ね……」

奏は顎に手を当てて考える。さっきのように、スリにあった生徒が他に2人もいたのだ。

「まったく……誰だか知らないけどぶぎけたヤツね……」

「ねえ、カナちゃん。けーちゃんじゃないよね？けーちゃん、こんな事しないよね？」

「そんなのわかんないわよ。でも、慶が黒いガンダムの財布を持つてるとわかった以上は話を聞かないわけにはいかないわ。ていうか、仕事サボった件もあるし」

そう言つて奏はおデコに手を当て、不安げに目を閉じた。すると、ガララツとドアが開いた。

「おーい、奏」

「！ け、慶！」

「あ？なんだよ」

「よくもオメオメと顔出せたものね！仕事サボっておきながら！」

「あつ……。いや、財布拾ったから届けに来ただけ。これは立派な仕事だよねうん」
「はあ？」

すると、慶は拾った財布を奏に放った。すると、被害者の女の子が立ち上がった。

「あつ！それ私のお財布！」

「えっ？そーなの？てか誰？」

と、リアクションする慶に茜は触れた。そして、重力を掛けて思いつきり地面に叩きつけた。

「うごっ!? あ、茜！てめっ、何すんだよ！」

「カナちゃん、捉えたよ」

「おい！てめえ！」

そして、茜は慶のポケットから財布を出す。絵柄はさつき見た通りバンシイだった。

「あつ！それ俺の財布！」

「なるほど……。バンシイね。確かに黒いガンダムだわ」

で、奏は慶を見下ろす。

「慶、あなたの事を疑ってないからこそ聞かせてもらおうわよ？あなた今まで何処で何してたの？」

「ああ？栞と光とさっちゃんデートしてたんだよ」

その返答に奏は少なからずイラツとした。

「三股……有罪ね。別件で」

「ああ!!？」

「茜、私は黒いガンダムの財布の子を呼んで来るから、そのままにしてて」

「了解！」

「お、おい待ってって！マジでなんの話だよ！おい！」

慶の台詞も聞かずに奏は生徒会室から出た。

第55話

「で、茜。なんで捕まってるんの俺」

慶が言った。

「今、学園祭の中でスリが3件も起きてるの。そのうちの一人が黒いガンダムの柄の財布みたいで、それでけーちゃんもその財布持ってたからとりあえず話だけ聞こうとしたら、なんか三人目の被害者の財布をけーちゃんが空っぽで持ってきちゃったから、一応話を聞いてみただけ」

「疑われてんのかよ……」

「疑いたくなんかないよ」

そう言う茜の顔は少し真面目だった。だが、慶も真面目な顔をする。

「悪いけどな、俺はスリなんかやってねえし、やるとしたら金だけ抜いて財布は戻す」

「うわあ……最低」

「とにかく、そんな下らないことで俺の文化祭を邪魔すんな。ゲーセン行ってくる」

「文化祭関係ないし！というか行かせないわよ。ここで捉えとけって言われてるんだから」

（確かにこの重力から逃げんのは無理だよなあ……）

なんて考えてると、ガチャッと扉が開いた。

「連れてきたわよ」

中に入ってきたさつきの子。さつそく、慶の財布を見せた。だが、

「これじゃあ、ありません……」

「へっ？」

「ほら見たことか」

得意げに言う慶。

「そもそもな、黒いガンダムにも色々いるんだよ。Mk2、サイコガンダム、X2、マスガン、ブリッツ、ガイア、ダークハウンド、ダークマター、有名なテキトーにあげただけでもこれだぞ。この上マイナーなの合わせたら……」

「ガンダム詳しいぜ自慢はいいから黙ってて」

奏にぴしやりと言われて思わず黙る慶。

「仕方ないわね。また一から探すわよ」

「じゃ、俺はこれで用済みだな。今度は花蓮辺りと一緒に……」

「待ちなさい」

奏に引き止められた。

「なんだよ」

「これ以上、他の女の子とあなたを……あつ、いや、あなたをサボらせるわけにはいかないわ」

「お前俺の事好きすぎだろ。さすおにかよ」

「黙れ。だから、あなたも犯人逮捕に付き合いなさい」

「ええっ……」

「栞にあなたが仕事をサボってたことを言ってもいいのよ？」

「付きあわせていただきます」

茜と財布を盗られた生徒がドン引きする。

「と、いうわけで慶は逃げないように私と一緒に行動しなさい。茜は少し休憩でいいわ」

「う、うん……」

「じゃあ慶、捜査に行きましょ♪」

言いながら奏は慶の腕に飛び付いた。そのまま二人は生徒会室を出て行く。

「あ、茜さん……奏さんって普段はあんな感じなんですか？」

「見なかったことにしてあげてください」

*

で、グラウンド。

「で、奏。今まで被害にあった奴らはどんなところで被害にあったんだ？」

「えーつと……1件目がかき氷で、2件目がワッフル、3件目がたい焼きだったわよ」

「……全部グラウンドの店か。その時間帯で特に人の集まった店をテキストに狙ったんだろうな。それが一番スリのしやすい状態だし……そうになると、今もスリをしてる可能性が高いのは今、一番客が集中してる店になるわけで……」

と、ブツブツ呟いてると、奏が裾を引っ張った。

「ね、ねえ。私、あのワッフルが食べたいなーなんて……」

「買ってくればいいだろ。今、犯人について考えてんだ。邪魔すんな」

「んなっ……!」

(どうして私の時だけデートみたいに思ってくれないのよ!)

と、自分勝手なことを考える奏だった。だが、慶はそれらを全て無視して、チロツと時計を見た。

(さっちゃんのリライブまであと30分くらい……それまでに間に合わせないとな)

改めて気を引き締める慶だった。

第56話

とりあえず、二人で今、一番人が集中してると思われる場所へ行つた。

「で、どうやって探すのよ」

「どうするかなー。とりあえず片っぱしから殴る」

「逮捕するわよ」

「ごめんなさい」

なんて話しながら二人で進む。

「とりあえず、現場を抑えるしかないよな……いや、どうせなら罠でも張つてみるか」
「罠?」

てなわけで、慶は屋台の少し離れたところに自分が前使つてた財布を取り出す。

「ちよつと待って。それ罠にしちゃうの?」

「あ? 悪いかよ」

「……別に」

なぜか不機嫌そうにする奏。

「安心しろ、中学の時にお前に誕生日でもらったもんだ。盗らせはしない」

「……………そつ」

返事はそつけないが、超嬉しそうな顔をする奏だった。で、慶はベンチの上に置いた。

「いや……………あからさま過ぎるわよ」

奏がジト目でツッコむ。

「あんなん誰が盗むのよ。どんな馬鹿でも罠だつて分かるわよ」

「俺なら盗るね」

「馬鹿ね」

なんて話していると、その財布に近づいて来る影。

「おい、来たぞ」

「さつそく捉えましょう」

「馬鹿、まだはえーよ。あいつが中身を見て初めてネコババ成立だ」

「お前が馬鹿」

「とにかく、このまま様子を見るぞ。死ね」

「お前が死ね」

で、そのまま様子を見る。すると、一人の男が近付いた。バッチし財布を見た後、財

布の上に何も気付いてないフリをして座った。

「うーわ……」

「うーわ……」

二人して声を漏らす中、そいつはすぐに立ち上がり、歩き出した。

「追うぞ奏」

「本部に財布を届けに行った可能性は？」

「ケツポケットに財布二つ入れてる奴がいるか。それに、元から届けるつもりなら座るフリする必要もない。移動したのは場所を変えて中身を確認するためだ」

「本当に無駄に頭いいわね……」

「だーつてろ」

で、そのまま二人はそいつを尾行する。そいつは校舎裏に逃げた。そして、中身を確認した。

「おい、ちよつと」

慶が声をかけると、そいつは振り返った。

「その財布、俺のなんだけど」

「そつか。ちよつと本部に届けようとしてたんだよ」

「中身見てたくせにか？」

「……………」

「今まで三人からも財布とってたよな。全部出せ。そうすれば、見逃してやる」
すると、そいつは口を歪めると慶を睨んで言った。

「別にスリなんてやらなくても良かったんだ」

「あ？」

「カツアゲするつてのも嫌いじゃないつてんだ」

その瞬間、殴りかかってきた。寸前にかわす慶。

「中身入りの財布ももらう」

「やってみろ」

*

ライブ開始まで5分前。ステージ脇で顔だけ出して紗千子は客を見ていた。

（けーくん、いないなあ……）

「はあ……」と、ため息をつく紗千子。

（でも、お客さんのためにもきちんとやらないと）

なんとか気合いを入れる紗千子だった。

*

校舎裏。ボロ雑巾みたいになってるスリ犯を慶が引きずっていた。ちなみに慶は無傷である。

「ったく、面倒かけやがって……」

「ちよつとやり過ぎよ。その子泣いちゃってるじゃない」

「泣くほうが悪い」

「へえ、そう。じゃあ私がボルシチを貴方に渡しても……」

「ゴメンなさい冗談です」

「最後まで言わせなさいよ。で、そいつ放り込んだあとはどうするの？」

「俺はさっちゃんのリブ行くよ。約束しちまったしな」

「……………あつそ」

「お前なあ……………」

で、慶は困ったようにため息をつくと言った。

「一緒に行くか？」

聞くと、奏は少し目を見開かせた後、嬉しそうに微笑んだ。

「行つてあげる」

「なら来なくていい」

が、慶は冷たく言い放つて去ろうとした。

「ち、ちよつと！行くつてば！」

第57話

時には昔の話をしようか。てなわけで、12年前。

「じゃ、修。お出かけしてくるから、奏と茜と慶のことお願いね」

「はい」

「それと、慶？」

「んー？」

「あなたは絶対に能力を使っちゃダメよ」

「分かってるよー」

そう言うと母親は出かけて行った。

「そういうことだから、大人しくしててくれよ」

と、言う修だった。だが、

「まだだ、たかがメインカメラがやられたただけだ！」

「キャハハハッ！」

慶が言うのとニヤリと笑う奏。

「そうですね。来ないなら茜も連れて三人でいっちゃいますからねっ」
そう言うのと奏は慶と茜の手を引いて家を出た。

「わかったから待ってっで奏」

「まぢませんわーっ」

で、公園。そのまま遊びまくる。

「ぎやははははっ！楽しいよなあ、アレルヤ。アレルヤあツ!!？」

「けーちゃん！ハレルヤはダメっでお父様に言われたばかりですわ！」

「そ、そーだったっけ？じゃあ、えーつと……えーつと……」

「まったくもう……」

「もう十分だろ」

すると、修が口を挟む。

「風も強いし、台詞のバリエーションも減ってきたし、帰ろう」

「一人で帰ればいいですわ」

「そうはいかない。俺はお兄ちゃんだからな」

「ぬうう〜」

「茜も慶も疲れただろ？」

「んー……」

「二人ともそんなやわじゃないですわっ！」

すると、茜のお腹がぐうぐうと鳴った。

「帰るか」

「だめですわーっ!!?」

止める奏だが、修は無視して茜と慶に言う。

「帰ってラーメンでも食べよう」

「修ちゃんラーメンつくれるのっ?」

「おう、3分あればよーだ」

「すごい!」

「ちなみに帰るのはもつと速い。俺の瞬間移動があればな」

「すごーい!」

「ぬううううう!!?」

そのやり取りを見て、奏が悔しそうに修を睨む。その奏に慶が言った。

「ねえかなちゃん!ガンダムのーしんだいつくって!」

「えっ?」

「ほらはやくはやく!」

「は、はい！」

そのままボンツとガンダムをつくる。すると、

「すごーおーい！」

茜がはしゃいだ。それを見て、パアツと嬉しそうな顔をする奏。さらにその様子を慶は見つめて嬉しそうに微笑んだ。

「おいおい……いくら使ったんだよ……」

修が軽く引きながら言った。

「おねーちゃん！こんどはザクがいい！」

茜がそうおねだりすると、少し困った顔をしたものの、奏は言った。

「任せなさいですわ！えーつと、ザク……ザク……」

「これだよ」

慶はポケットからザクのオモチャを出した。

「えーつと、えいっ」

ボンツとさらにザクの等身大が出てくる。

「できましたわ！」

「お前なあ……お金使い切っちゃうぞ」

「どうですか？茜？」

「……………あかくないの?」

「へっ?」

「あかいのがよかった…………」

「で、できますわよ!」

「おい奏。もうお金…………」

「えいっ!」

さらにシヤアザクを作った。

「「おおおおおー!」」

目を輝かせる茜と慶。

「こんなものかしらっ」

「おねえちゃん、すごーい!」

(あとでぜったい怒られる…………俺が…………)

と、修が思った時だ。ザクの足が消えた。

「へっ?」

慶と修の声が重なった。そして、当然落ちてくるジオング状態のザク。

「あっ」

慶はたまたま位置がよかったが、残りの三人の所にザクは落下した。

「し、修ちゃん……？カナちゃん……？茜……？」

震えた声で名前を呼ぶ慶。だが、誰一人返事は返ってこなかった。本来なら、修と奏と茜の命はそこで終わるはずだった。

（お、俺のせいだ……。俺が、ガンダムなんか欲しがったから……）

で、慶は歯を食い縛る。そして、能力を発動した。慶の能力は死者蘇生^{リザレクション}。自分の寿命を一年縮めて、死後30秒以内の死者を蘇らせる能力だ。もちろん、三人の生死を慶は確認したわけではない。だが、慶は死んだかもしれないと思ったから使ったのだった。

（これで、俺の寿命は……）

母親がこの能力を慶に使わせなくなかった理由は二つあった。一つ目はもちろん、慶自身に早死にして欲しくなかったから。二つ目は、慶の精神状態だ。自らの寿命を一年縮める。神経質の慶にその心の負担は大き過ぎた。今にも吐きそうになり、口を押さえ、膝を着く。

（いいんだ……俺の一年が、みんなの一生に繋がるなら……）

だが、今ので三年縮んだ。そう思っただけで、慶は気絶した。

*

この事件がきっかけで、慶の能力は葵と同様、公式では発表されずになかった事にされた。慶自身には「能力を使い切った」と説明されている。

修、奏には「奇跡的に助かった」と説明されたが、二人はなんとなく理由は勘付いていた。

ちなみに茜はショックで事件前後のことは記憶から消えていて、能力が消えたことのみ話された。

第58話

「はあ？演説？」

「うんっ」

茜が紙を差し出した。

「毎回同じこと言ってもアレだからさつて葵お姉ちゃんが……。で、訂正は慶にしても
らいなさいって」

「つたく……。あの野郎」

渋々紙を受け取った。で、紙に書かれている事をチェックする。

「どう、かな。我ながらうまくかけたと……」

「32点」

「赤点ギリギリ!?? な、なんで!??」

「はい、茜さんに質問です。人を惹きつけるのに一番必要なものはなんでしょう」

「は?え、えと……。それは……」

「それは、笑いだ」

「……………はっ?」

「この紙に書かれていることは偉くまともだ。内容も悪くないし、仮に王様になったとして、実行出来そうな事が書かれてる。そこまではいいんだ。だけど、文の中身がお利口さん過ぎてつまらないんだよ」

「ど、どういこと?」

「この内容は、他の誰かでも言いそうなことなんだ。お前がいらないんだよ。お前しか書けない事がないんだ。特徴がないと言つてもいい。顔のないアイドルは売れっこないだろ? そういう事だ」

「あー……………そういうことか。でもそれでなんで笑い?」

「他の兄弟は全員クソ真面目だろ。つまらないこと言うくらいなら笑いなんてしないほうがいいが、真面目で全員が真剣な中、一人だけ愉快な話をすれば『あの人の治める国は楽しそうだな』つてなると思わないか?」

「確かに……………」

「それと文が長い」

「ええ、それはやつぱりほら、自分の言いたいことを詰め込まなきゃいけないわけだから

……………」

「バカ、カス、消えろ、てか消すぞ、5円で売るぞ」

「言い過ぎじゃない!?？」

「人前で話すのが苦手なのに長文しゃべってどうすんだよ。短いほうがいいとは言わないけど」

「そ、それはそうだけど……」

「長文過ぎてお前のあのオン飛びしたような喋り方じゃ聞き手は聞き取れないだろ。だが、内容を要約すれば覚えてもらえる。覚えてもらえるってことは、相手に自分の印象がつくってことだ」

「なるほど……すごいねけーちゃん」

「普通だ。内容をどうまとめるかは俺に聞くなよ、めんどくさい」

「うん。わかった。ありがとねけーちゃん！」

そのまま茜は再び葵の部屋に戻って行った。

*

翌日の夜のニュース。茜の演説に前回までの倍以上の人が集まったことがニュースになっていた。

「すごい！あか姉何したの!?？」

岬が素直に驚いた。

「いやー特に何もしてないよ。ただ演説の内容を少しだけ変えてみたんだ」

「ちよーつと、けーちゃんにアドバイスもらってねー」

たははつと頭を掻いた。

「へえ、けーちゃんにねえ……」

少し意外そうな顔をする岬。

「なんだその顔は。そんなに意外かこら」

「べつつにー？」

「ねえけーちゃん。今日も何かアドバイスちょうだい？」

茜が聞いてきた。

「やだ。人に頼るな。自分で生きろ」

「いやニート志望の人に言われたくない……」

「とにかく断る。めんどくせーよ」

「ふーん？」

すると、茜は言った。

「ボルシチ」

「是非とも手伝わさせていただきます」

第59話

茜にアドバイスをしてから茜はドンドンと票を伸ばしプに再び返り咲いた。

「けーちゃんのおかげだよ！ありがとう！」

「おー」

テキトーに返事して慶はゲームをする。その隣の部屋では、

「じゃ、終戦したのは何年？」

「え、えと……1941年！」

「それは開戦でしようが！」

奏が光に勉強を教えていた。

（まったく……茜の追い上げで選挙も焦ってるってのに……葵姉さんの頼みでも断ればよかつたわ）

で、奏はため息をついた。

「もう！なんで1940年代に開戦して終戦しちゃうの？！？同じ4年なら1939年！1943年でもいいじゃん！」

「そんなの今更言っても仕方ないでしょう。とにかく、年号暗記なんて覚えるしかないのよ。じゃあ、1940年に結ばれた同盟は？」

「え、えと……日米和親条約！」

「同盟って言ってるんでしようが！」

で、奏はため息をついた。

「まったく……どうして私の妹がこんなにアホなのかしら……」

「そもそも！日本の歴史なんて覚えてなんの役に立つわけ?!?日本の歴史からこれから活かせるような事があると思ってるの?!?」

「またとてつもなくすごいこと言うわねあんた。というか、人間は失敗から学ぶことのほうが多いのよ」

「奏ちゃんこそ失敗って言ってるじゃん……」

「とにかく、最初からやり直しよ」

「もう嫌！奏ちゃんと勉強しても全然やできる気がしないよー!!」

「失礼ねあなた！言っとくけど私だって教えたくて教えてるわけじゃないんだからね!!
?葵姉さんに頼まれたから……!」

そこでピーンツと閃く奏。そして、ニヤリと笑って言った。

「光、せっかくだから慶に教えてもらったら？」

「けーちゃんにいい？勉強できんのお？」

「あんた知らないの？慶、勉強学年トップよ？」

「そーなのお!!？」

「ええ。しかも、天才型じゃなくて努力家だから貴方にも合うんじゃないかしら？」

その心は茜と慶を引き離して選挙の形勢逆転を狙うことだった。あと普通に嫉妬。

「期待しないで言ってみるよ」

「いつてらっしやーい」

そのまま光は出て行った。ようやく一息ついて奏は選挙の作戦を考えようと思ったときだ。

「奏」

奏の声が出た。ビクツとする奏。

「光の成績が落ちるようなことがあったら、私選挙頑張っちゃおっかな？」

「一緒に面倒見てきます……」

*

「いやいやいや、可笑しい。なんでそれで俺に頼ろうと思ったの」

「いいじゃない慶。正直、馬鹿すぎてその子は私の手には負えないわ」
「ふざけんなよ。こちとら忙しいんだよ。もうすぐエンドワールドのイベント終わるんだよ」

「知らないわよ。じゃあ、g leeのプリペイドカード1枚でどお？」

「いいだろうー。光、こっち来い来い」

言いながら慶は自分の膝の上を叩く。

「いや……さすがにこの年で膝の上に座るのは……」

「小学生までは俺は妹は溺愛するって決めてんだよ」

「確かに栞が生まれる前はそうだったけど……」

「えいっ」

奏が膝の上に座った。

「重い帰れババア焼くぞ」

泣きながら黙って退いた。

「ほれっ、ほいっ」

「う、うう……わ、わかったよ……」

顔を赤くしながらも慶の膝の上に座る光。

「えへっえへっ……」

「ウザくて忘れてたけど可愛いなお前」

「久しぶりで、ちよつと安心する……」

「ほれほれ、もつと甘えてもい……」

と、言いかけた慶の後頭部を奏は踏付けた。光もろとも目の前のちやぶ台にめり込む。

「イチャ付いてないで仕事しろ」

「……………はいっ」

てなわけで、勉強開始である。

*

「で、どこがわからないって？」

「太平洋戦争の辺り」

「まああの辺はややこしいからな。とりあえず、戦争の歴史ならこの機動戦士……」

その瞬間、慶の横に奏の拳が通った。慌てて説明を切り替える慶。

「は、はあ？ あんなんだあの年号暗記だろうが」

「それができないんだよー！」

「まあ年号暗記にも色々覚え方があるからな。それに歴史は流れを掴まないと出来るもんも出来ねーよ」

言いながら慶は教科書をパラっとめくった。

「例えばこの1940年の日独伊三国同盟な。これがどの国を指してるか分かるか？」

「さあ？」

「全力のアホかお前は。日は日本、それは分かるな？」

「うん」

「まずこのイタリアの伊だが……これは、伊藤くんの伊だ」

半眼になる光と奏。

「イタリアつつーのはな？伊藤くんの国なんだよ。だから、イタリアの伊は伊藤の伊なんだ」

「な、なるほど……」

なぜか納得する光だった。

「で、次に独の文字。これはドイツだ。この時のドイツを治めていたのはヒトラー。これは知ってるだろ？」

「うん」

「なんで独かつつーと、ヒトラーって、プロの独りぼっちの人って意味もあるんだ」

「そ、そーなの!?？」

「ああ。だから、独の文字が使われてる。日本、ぼっち、伊藤。この三つを合わせて『日独伊三国同盟』となるんだ」

「ま、まさかそんな悲しい同盟だったなんて……知らなかった」

光はそのままブツブツと日独伊三国同盟について呟く。

「どうよ奏。この俺の華麗なる……」

と、言いかけた慶の襟を奏は掴んで廊下に引きずり出した。

「変なこと教えるのやめなさいよ。何を嘘教えてんの?」

「バツカお前アホには嘘教えてもいいんだよ。問題で出そうなところだけ押さえとけばな」

「どこの国の理論よ! 光の成績が落ちたら私が葵姉さんに叱られるんだからしつかりやんなさいよ!」

「わーったよ。まあ俺に任せろ」

部屋に戻った。

*

「で、この日独伊三国同盟の覚え方だが……」

「なんか奏ちやんが行くよ俺たちとか言ってたけど……」

「違う。行くよおっぱいで1940年だ」

「何処からオツパイ出てきた！」

奏が突っ込んだ。

「なんだ、お前知らねえのか。あの同盟は三国の指導的地位と相互軍事援助が取り決められたとなってるが、本当は世界のおっぱいをもみしだく会だからね」

「そんなわけないでしょ!??三つの国でどんな会作ってるのよ!完全にヘンタイ国家じゃない!」

「男はみんなヘンタイだ。だから、日本がハワイの真珠湾をぶん殴りに行ったのも、水着のおっぱいがたくさん見れるかもしれないって思ったからだ。それが行くよ一発で1941年になるわけだ」

「どんな一発の使い方!??」

「ねえけーちゃん。一発って何?」

「あん?それはセツ……」

その瞬間、葵のドロップキックが慶の後頭部に突き刺すように飛んできた。ドンガラガツシャーンと慶は吹き飛ばされる。で、葵は慶を担いで部屋を出る直前、奏に言った。

「続き、よろしくね奏」

「……はい」

第60話

ある日。始まりは慶の一言だった。葵の部屋に入ったら着替え中だった。相変わらぬのタイミングの悪さである。

「……………何か言うことは？」

「葵つてさ、奏よりオツパイ、小さくねっ？」

ヴァギャツと音がした。葵が壁を握り潰した。

「もう許さないから。絶対許さないから」

「あつ、いや冗談です」

「いや遅いから。絶対遅いから」

てなわけで、追いかけてっここである。

「ふおおおお！殺される！間違はなく！」

「…っ…っ…っ」

「無言で走ってくるな！本物の化け物か！」

「殺す殺す殺す殺す……」

「いややつぱり黙っててくれればいいです!」

で、そのまま玄関を出て外へ逃げた。が、当然慶のほうの方が速い。さっさと蒔いた。で、フウ……と、息を吐きながらどっかの家の角を曲がった所で誰かとぶつかった。奏だった。

「うおっ」

「きやつ」

「すまねっ、だいじよぶか? って、なんだ奏か……」

「慶? なんだとは何よ!」

「謝って損したと思っただけだ」

「なんですって!? あんたは私のことなんだと思つて……」

プツプウゝツと音がした。

「あつ?」

二人して振り向くと、トラックが迫っていた。

「! 奏!」

慶は奏を庇うように押し倒した。

*

病院。

「いやー弟さんに庇われたおかげでしょうな。直撃なのにほぼ無傷ですよ。その弟さんの体も素晴らしいものです。あなたも無傷ですね」

二人に医者が言った。

「まあでもどこか痛む所はあると思いますから、とりあえず安静にしてください」
「分かりました」

二人は頷いた。で、二人で病院を出て向かい合った。

「で、なんで俺が目の前にいるの?」

「で、なんで私が目の前にいるの?」

ハモった。それと共に大量の汗をながす。

「い、いやいやなあい。ありえなあい。入れ替わりなんてそんなベタなこと、起こるはずがない。今21世紀だよお前。それなのにそんな入れ替わりなんてお前……」

「……………」

奏は黙って鞆から何かを探す。

「おーいなんか言えよお前。なに、お前はそういうの信じる口?バカなの?死ぬの?て

か死んどく?」

で、奏が取り出したのは鏡だった。

あ、念のためここで説明しときます。入れ替わりネタはどっちが何を言ってるのかまるで分からなくなるので、心の方で進めていきます。つまり、今鏡を取り出したのは慶の身体をした奏な。

で、その鏡を慶の前に出す。当然、写るのは奏の顔した慶の顔。

「……………」

「……………」

「おい、奏……………これ……………」

言われて奏は頷いた。

「この鏡、穴空いてるぞ」

「いや、違うでしょッ!?」

慶の台詞に奏が突っ込んだ。

「入れ替わってるのよ! あんたと私が! クロスソウルしてるの!」

「いや黙れよ! 俺は認めねえぞ! 絶対……………」

と、言いかけた慶の目の前の奏の姿が消えた。葵のドロップキックである。

「あ、葵姉さん!?」

「見いつけたあ……」

「な、何!??なんで私に!??」

「へえ、惚けるんだあ……私のあんな姿見て、あんなこと言つといて……」

「な、なんの話か知らないけど私は関係ないわよ!今、慶と私入れ替わってるの!」

「そんな言い訳が通用するかあああああ!」

「ああああつ!!?頭割れる!目ん玉飛び出すつて!慶!あんたからもなんか言いなさいよー!」

「慶……あなた何したか知らないけど人を傷付けといてそれはないわよ……」

「んなつ……!??つて葵姉さん!ギブギブギ……!!?」

あがががつとキヤメルクラッチを喰らう奏を捨て置いて、慶は家に帰った。

第61話

さつそく帰宅して二人は茜慶の部屋でお話。茜は下でテレビ見ている。

「で、どうする?このことみんなに言うか?」

慶が聞いた。

「いや、いいわよ。葵姉さんですら信じなかったんだもの。他の人に言っても無駄よ」
あれ怒り心頭だったからだろ……と、思いつつも慶は口にしなかった。

「まあとにかく、それならバレないようにしといたほうがいいんじゃないか?」

「そうね。しつかり私の代わりをしなさいよ」

「おー。じゃ、早速お前の部屋で待機でもしてるわ。あんま人と関わらないほうがバレないだろうしな」

「はい。あつ、勝手に物色しないでよね。下着とか盗んだら許さないから」
「盗むどころかこれから履くんだけどな」

その瞬間、ハツとする奏。

「待ちなさい！」

「なんだよ」

奏はアダルトティーな下着も持っていた。そんなもん慶に見られたら自殺ものである。

「ち、ちよつと今から履いてもいい下着と履いちやいけない下着選別してくるからここで待ってて！」

「あ、おい！」

慶は止めようとしたが、奏は行ってしまった。

「その体でお前の下着選別してたらヤバイだろ……」

見つかるのを想像しただけでゾツとした。慶も慌てて後を追った。

*

下着の選別も無事に終わり、二人は各自の部屋で過ごす。まずは奏ルーム。慶は早速、デンドロビウムのガンプラを出した。

「いやー良かったよ入れ替わって。これ高くて中々手が出なかつたんだからよ。さて、あとは……」

慶はさらにニツパー、ヤスリ、パソコン、ポテチ、ジンジャエールを召喚。パソコン

で銀魂のアニメを流しながら、ポテチを噛りつつ、ジンジャエールを飲みながらガンブラを作り始めた。

*

一方、慶の部屋。

(……………まったく、茜に選挙負けてきて焦ってるって時にこんな……………)

奏は慶の部屋で選挙対策を考えていた。だが、チラッとベッドを見た。見てしまった。

「……………」

(慶のベッド……………)

何を思ったか、ベッドにダイブした。で、スツツと匂いを嗅いだ。はい、このまま一時間同じことループな。

*

飯の時間になった。

(あのバカ……ちゃんと私らしくしなさいよね)

さつきまでベッドの匂い嗅いでた奴とは思えない思考である。で、下の階に降りて、奏がそーつと中を覗いた。

「はい葉。これ運んでくれる？」

「はい、奏お姉様」

「カナちゃん、その醤油取ってくれる？」

「えー？それくらい自分で取りなさいよ……はいこれ」

「奏、俺はなんか持つてくものはあるか？」

「修ちゃんには……じゃあ、あそこのお刺身お願い出来る？」

「うい、了解」

「奏姉様！僕にもお仕事を！」

「ボルシチが机の上を荒らさないように見張っててくれる？」

「お任せください！」

(あ、あれ……？あそこに私がいるよ……？)

困惑する奏だった。

(それどころか……私より、お姉さんやってるよ?)

すると、慶は奏を見た。

「何やってんのよ慶。あんたも手伝いなさい」

「え？あ、ああ、うん……」

思わず素直に言うことを聞いてしまう慶。

「うわつ、けーちゃん素直！どしたの？」

岬が引き気味に反応した。

「え？い、いややつぱかったるいわ。準備できたら呼んで」

（こ、こんな感じかな……？）

「じゃああんたには食べさせない。光ー、お皿一人分回収してきて〜」

（人によって対応変えるとか何完コピしてんのよあいつ！本当に私としやべってるみたいでムカつくんだけど！）

と、思っていると皿を回収する光が目の前を通った。

「い、いややつぱ手伝うわよー！」

『……………わよっ？』

全員が反応した。

「じゃなくて手伝えばいいんだろー！」

（チツ、バカが……）

慶は心の中で舌打ちすると、再び晩飯の用意を始めた。

*

飯が終わり、風呂の時間。

「さて、じゃあお風呂入ってくるわね」

と、慶が立ち上がった瞬間、奏はピクツと反応した。

「……………トイレ」

二人して部屋を出た。瞬間、奏は慶を壁に叩き付けた。

「ね、ねえあんた。風呂ってどうするつもり？ どういうつもり？」

「だって風呂は入んなきゃダメだろ。それともお前何、風呂嫌だったわけ？」

「風呂に入るってことはあれよ!? 私のを全部見るってことよ!?」

「姉弟で何言ってるんだよ。てかお前の体だぞ。風呂入んなくていいのか？」

「いいわよー日くらい！」

「俺は嫌だ。眠れなくなる」

「ち、ちよつと！」

「あとお前も風呂入れよ。俺は風呂入れる日は入らないと嫌だ」

「っ」

で、奏は立ち止まった。と、思ったら声を絞り出す。

「……………る」

「あっ？」

「だから、入るって言ったの！」

「そう。よろ」

「一緒によ！」

「……………は？」

第62話

風呂。慶は早速全裸になった。

「おうっ!!?」

「何変な声出してんだよ。さっさと風呂入ろうぜ」

「いやだつて……自分の体でいきなり脱がれたら……」

「躊躇ったつてしよーがないでしよ。じゃ、俺先入ってるから」

「ま、待ちなさいよ！私はそんな割り切れないわよ！」

「じゃあどーすんだよ！」

「め、目を瞑ってるから……脱がせて……」

「やだ。ガキかテメエは」

「ま、待ちなさいよー！」

仕方ないので自分で脱いだ。鼻血はなんとか耐えた。だが、

「やっぱ奏のおっぱいデケーな」

の一言でやつぱり鼻血が出た。

*

風呂から上がり、慶と奏は着替える。

「おーい奏。ブラ付けてくんない？」

「はあ？寝るときはブラしないわよ普通」

「え？そなの？」

「そうよ。邪魔じゃない」

「なるほど……ならいいや。でさ奏」

「何？」

「これ、何かツブなん？」

殴られた。

*

寝る前。奏は布団の中に潜りながら考えた。

(けーちゃん……すごく私の真似上手かったな……それだけ私のこと見ててくれてるってことだよね)

そう思うと思わずにやけてしまう。

(私も、けーちゃんの振り頑張らないとなあ)

*

寝る前。慶は布団の中に潜りながら考えた。

(なんか奏の振りすんのもだりくな。明日からは俺は俺のやり方で生きるか……) 　　そう決めて寝た。

*

翌朝。

「えっ？まだカナちゃん起きてないの？」

「ええ……。どっか悪いのかな」

茜と葵が話す中、奏は不安そうにその話を聞いていた。

(何やってんのよ慶……昨日はあんなにちゃんと私のフリしててくれたのに……)
「とにかく、ちよつと様子見に行ってみようか?」

「そうね。いこう」

「ま、待って!」

奏は立ち上がった。自分の目で確認したかったからだ。

「わ……俺が行く」

「? どうしてよ」

「あいつに用があんだよ」

「うーん……じゃあお願いするけど……」

そんなわけで、奏は1日ぶりの自室へ。中に入ると酷かった。転がるポテチの山、何処から……というか能力によって出されたゲームの山。デンドロビウムVSガーベラテトラのジオラマ。

「な、何よこれ!」

「ん、おお……おはよ」

「おはようじゃないわよ!何よこれ!」

「お前がエロい身体してつから中々寝付けなくてな!。眠れるまで暇つぶししてたらマナーなったわ!」

「ち、ちよつと、私のふりしててくれるんじゃないの!?!?」

「めんどくさくなっちゃったー」

「んなつ……!?!?ていうかそのポテチとかどうしたのよ!」

「能力使った。いやー便利な能力だ。ネットシヨップなんかより全然」

「あ、あんたねえ!人のお金で何してくれてんのよ!」

「ままま、落ち着けて。お前だつて俺の身体なんだし能力使えばいーだろ。あつ、俺能力ないんだつたわー。ごめんね」

「こ、殺したい……超殴りたい……」

「ま、とにかく俺たちのこれからするべきことは元に戻る方法を探すことだ。だからお前も情報収集頼むな」

「そ、それはそうね……」

「まあお前の能力で元に戻る薬とか作りやいいんだろうけど……金かかりそうだからな」

「そうよ。もうこんなに使ったんだから……とていうか能力使わないで」

「悪かったよ。とにかく俺たちに必要なのは情報だ。お前は図書館あたりにでも行ってくれ」

「慶はどうするの?」

「三度寝する」

その瞬間、奏の踵落としが慶の腹にめり込んだ。

「ぐふおっ！」

「この身体も便利じゃない……。昨日のお風呂の時から思ってたけど、すごい筋肉質だし……」

「ま、真面目にやります……。ごめんなさい……」

第63話

翌日の放課後。慶は帰宅中。欠伸をし、鼻くそをほじると、後頭部をガリガリと掻きながら歩いてきた。

「ダツリい……。あーそういや今日、ゲーセンで音ゲーのイベントだったな。やつとくか。あと今日から格ゲーで新キャラ参戦だっけ。使つとこーつと。あつ、そういやジャンプの発売日土曜じゃね？買つとくか。あと……」

と、ぶつぶつと呟きながら歩いてるのをすれ違った街の人は全員見ていた。

「か、奏様が……」

「なんか、ルーズになった……!」

が、慶はまったく気にした様子なくゲーセンに向かっていた。その時だ。電話が鳴った。

『もしもし生徒会長ですか?!?』

「あーい、みんなの生徒会長奏さんですよー」

『今日は放課後に集会があるって言いましたよね?!?』

「えっ？ そうなの？ マジかー。じゃ、俺休みで」

『そういうわけにはいかないんですよッ！ 戻ってきてください!!？ もう全生徒集まってるんです!』

「いやめんどくせーよ。もう、ゲーセン着いちやっただよ」

『ゲーセン!!？ 奏さんがゲーセンってちよつと見てみたい気も……じゃない! とにかく来なさい!』

「わかった、わかったからあんま耳元で叫ぶなって……」

そのままブツツと切れた。

*

体育館。30分経つても中々始まらない集会に全員がイライラし出す中、茜が奏に声をかけた。

「ねえ、けーちゃん。カナちゃん何かあったのかな……」

「さ、さあ?」

生返事しつつも思った。

(何やってんのよあいつ……。流石にこれはヤバイわよ……)

すると、ようやく慶がやってきた。そして、マイクを握るとスウウツと、息を吸い込んだ。

「えーただいまをもちまして、集会は終わります。お疲れ様でした。解散つ」

全員が「えっ?」となった。奏はイラツとなった。

「い、いやいやいや。待ってくださいよ生徒会長」

「なんだー。副会長」

「いや私は庶務です。そんなわけにいかないでしょう?なんか話して下さいよ」

「あ?だいたいお前いつまで奏生徒会長に頼り切りになるつもりだ。いいか、俺……わたしももうすぐ卒業なんだ。これから先はためーらだけでこの学校を盛り上げなきゃならねえ、だから、今日は休みにする」

「言ってることメチャクチャですよ!」

「はい、全員休みいっさつさと帰れ」

そんなわけで、解散となった。慶は再びゲーセンへ向かった。

*

その日の夜。自宅ではニュースがやっていた。『奏様!なんか変!』みたいな。それ

を他の兄弟が見てる中、奏は慶の身体能力を利用して慶を締め上げていた。

「ねえ、なんなの？バカなの？死ぬの？どういうつもりなの？」

「ご、ごめんなさい……わざとじゃないんです……俺は俺らしくあろうと思ったただけなんです……」

「だからその体私のだから！私が必死にあんたに合わせた口調になってあげてたつてのに……！」

「ご、ごめんなさい……」

「とにかく、ちゃんとしてよ。私が変に思われるんだから！」

「うい……」

「で、何かわかったの？この現象のこと」

「なんとも言えん。ハッキリしてんのは二人同時に強い衝撃を食らわなきゃいけないってことだ」

（俺の体じゃないから霊能力も使えないし……さすがに咲さんの仕業とは思いたくないな……そうなると詰みだ）

考えながら話す慶。

「もう一度やってみれば戻るんじゃない？」

「嫌だ。今回は俺がお前をかばったから無傷だったけど、次もそうなるとは思わないだ

ろ

「うーん……」

「下手したら死ぬぞ」

「そうね。でもそしたらどうするのよ」

「それは最終手段として考えよう。それまではなんとか別の方法で……」

「やっぱりみんなに説明した方が……」

「証明できるわけねーだろ。信用されないと……」

「ボルシチよ！」

「は？」

「ボルシチなら証明できるんじゃない!?? あなたなら絶対ビビるじゃん! 端から見たら私がビビってて慶は逃げない絵が出来るんじゃない!??」

「やだよ! なんで俺がそんな怖い目に……!」

「いいから行くわよ!」

「ま、待って! ごめんなさ……! 俺力つえーな!」

引き摺られた。

*

リビング。

「ボルシチを呼べばいいの？」

葉が聞いた。

「そうだ葉。頼めるか？」

「お兄様は大丈夫なの？」

「おう！これも俺の修行のためだ」

（奏には俺がどんな風に見えてるんだ……）

心の中で呆れつつもなんとか黙っていた。で、葉はボルシチを呼んだ。

「はい、お兄様」

（よし、これで私はビビらずに慶がビビってくれれば……！）

と、思った時だ。慶の体に鳥肌が立った。

（あつ、あれ？なんで？）

「お、おいしい！なんで震えてんだカナ……慶！」

「わ、分からないわよ！体が勝手に……！」

「だ、大丈夫？お兄様……」

葉に心配された。

(ま、まさか……！体の方が恐怖の対象として怯えてるって言うの!!??ていうかむしろ
どんだけ猫にビビってるんよ慶！)

キツと睨みつけると、慶はいなくなっていた。すでに逃げていた。

「ち、ちよつと置いてかないでよー！」

慌てて後を追う奏だった。

「……………なんか、二人とも変？」

第64話

ハアハアと息を吐く二人。

「おいおい……………どーすんだよこれ……………」

「あんた……………どんだけ猫にビビってんのよ……………体が無意識に拒否反応って……………」

「うるせつ……………そんなことよりどうすんだマジ。ボルシチ以外で何か兄弟に気づかせる方法なんてねえぞ……………。どうする、最終手段行くか?」

「……………」

「正直、リスクが高過ぎると思うが、方法がないんじやどうしようもない」

「そうよね……………」

二人して沈黙が流れた。

「ま、また明日考えるか。そろそろ飯じゃね? 下行こうぜ」

「うん……………」

そのまま二人は下に降りた。

「……………とにかく、今は我慢するしかないな……。今日は葵の誕生日だし」

「そうね……。そうだ、せっかくだから一緒に葵姉さんの誕生日プレゼント買いに行かない?」

「そーだな」

そのまま二人で下に降りた。その時だ。

「あつ、二人とも今日も二人でお出かけ?」

茜が声をかけてきた。

「もう……一ヶ月急に仲良しさんになったよね2人ともさあ。なんかあったの?」
(そう思うんなら気付けや……)

と、思いつつも声に出さない。

「それならお姉ちゃんも連れてってよ!ほら、色々買ってきてほしいものもあるし!」

「はいはいわーったよ。買ってくりやいんだろ」

いつの間にか、奏も慶の性格を完コピしていた。

「じゃ、よろしくね!」

そのまま三人でお出掛けした。

「で、どうする?どこ行く?」

「任せるわ。私は二人の買い物のお手伝いだから」

「はっ、やな姉貴だ」

奏はそう吐き棄てると、唾を吐いた。

(もう完全に俺マスターしてんなあいつ)

と、思いつつも慶は言った。

「まあそう言わないの。それよりどうする？せつかくだからお互いバラバラに買い物しちやう？」

「その前に、二人にお話があるんだけど」

葵が言うと、二人は「？」って感じで振り返った。

「二人は、入れ替わってるの？」

「えっ？」

第65話

はい、バレてたので事情を説明した。

「……なるほどねえ」

「つてか、気付いてたんならなんで言わなかったんだよ」

慶がジト目で聞いた。

「いえ……最初は本当に言い逃れだと思つてたから……だけど、なんか二人の様子が変だなあつて思つて、だけどこういうことつて確信を持つてから聞かないと万が一違つたとき恥ずかしいでしょ？それで、確信が持てるまで聞かなかつただけ……昨日、二人の部屋の前を通つた時、たまたまそんな会話が聞こえてね……」

「そりや助かる。そういうこつた。もう一ヶ月このままだぜ？」

「そうねえ……とりあえず二人一緒にトラックで跳ねてみる？」

「トラックの運転手にも迷惑かかるし、今回も無事で済むとは思えねえだろ」

「そうよねえ……。でも、奏はもう卒業でしょ？」

「問題ない。冬休み前の期末は俺ちゃんと満点取つてやったしな」

「すごいわねあなた……」

「わ、私も満点取ったわよ？」

「お前は当たり前だろ。むしろ留年したような感覚はどうだった？」

「つまらないわよ……。クラスメートも知らない人多くて話し合わせるのが大変だったわ。でも体育の時間は楽しかったわね。体がいつもより軽くて」

「そういえば奏。お前の成績表とりあえずオール5にしといたから。あとでなんか奢れよ」

「私になつてる間に散々能力使ったのでチャラよ」

「お前の場合は内部進学前の重要な成績表だろうが」

「デンドロビウム3万円なんだけど？」

「ぐっ……！」

「あの、その辺にして」

葵が割って入った。

「とにかく、元に戻る方法を探さない」と

「いや、なんかもうどうでもよくなってきたんだよね」

慶が言うと、他の二人は「はあ？」と声を揃えて言ってきた。

「なんかもう慣れてきた。仕方ない気がしてきた。別に俺は奏の身体でも不自由しない

し、問題もない。だから……」

と、話しているとプツプウーつと音がした。後ろを振り向くと、トラックが来ていた。

「「えっ」」

ゴガツと跳ねられた。

*

病院。

「奇跡ですね。奏様が庇っていなかったら皆さん全滅ですよ。まあ運もありましたと思いますすけど……。それでも無事でよかったです。念のため一週間は安静にお願いしますね」

「「分かりました」」

三人は声を揃えて言うと、病院から出た。

「イイイイヤツホオオオウツツ!!?!!?」

瞬間、慶の身体の慶が跳ね上がった。

「もおどつたあ!!?いやつたぜえ!イイイイヤアアホオオオウウツツ!!?!!?!!

」

第66話

正月。家族で温泉旅行に行った。

「旅館貸切なんてよかったのかなあ」

「そうでもしないと誰かさんがくつろげないからねー」

「しゅびばしえん……」

茜の眩きに奏がツツコむと、涙目で申し訳なさそうに謝る茜。で、体を流して女子は湯船に浸かった。

「はあく♪カメラもないみたいだし天国だあ」

「ここにカメラあつたら問題でしょ……」

「安心しろ。ここはプレハブじゃない。本物の旅館だ」

修が言った。

「別にプレハブ小屋だつていいけどさ……」

だが、その次の言葉が出ない。声が明らかに低かったからだ。で、ザパアツと上がる。「って、なんで修ちゃんがいるのっ!?!?」

胸を隠しながら思わず温泉から上がった。

「こ、ここ……ここって混浴!?」

「いやちがう」

「え!?? いやあ男湯だった!?」

「いや、それも違う」

で、修は目を開いて言った。

「俺たちが間違えた」

「出てけ！」

修に向かって茜は桶を投げようとした。

「ま、待つて。俺たち……?」

葵がそう呟くとその隣に誰かが湯に入った。

「ふうく……疲れたあ……」

「け、慶!?? どうしてここに!?」

「あ? 葵? なんでここに?」

「こっちの台詞よ！」

「慶、ここは女湯みたいだ」

修が落ち着いて言った。

「なんか豪快な覗きになっちゃまったな」

「そーだな」

「いいから出て行きなさいよ!」

茜が吠えるも無視。

「け、けーちゃん!」

桶とタオルで身体を隠した岬が声をかけてきた。

「も、もしかして……遥もいるの?」

「ああ、サウナにいるんじゃないか?」

その瞬間、サウナに突撃していく岬。数秒後、遥の悲鳴が聞こえた。遥も大変なんだなあーっと慶が心にもないことをしみじみ思っていると、くいつと誰かに引っ張られた。見下ろすと、葉がタオルも巻かずに慶を見ていた。

「お兄様、一緒に入る?」

「OK」

メチャクチャいい顔で即答する慶。その慶をジト目で睨む茜、奏、葵。

「シスコン」

「ヘンタイ」

「ハンザイ」

「おい待て最後の。どういう意味だコラ」

「お兄様、はやく、あっち」

反論はしたものの、葉に急かされてすぐにまたシスコンの顔に戻って葉の後を追った。

「つーか奏。お前意外と動じないのな」

修が言うと、「どういう意味よ？」と言った顔で聞いてきた。

「いやほら、茜みたいに慌てるとかそういうの無くて意外だったってだけだ」

「あーそれは……いろいろあつて……」

全裸を見る見られるどころかお互いの体を交換までしたのだ。そりゃ慣れるだろう。

「まさか……お前、BLもののエロ本とか……」

「違うー!」

そのやり取りを見ながら、葵は終始ニコニコしていた。

*

旅館に入る前にクジで決めた部屋割り通りに部屋に泊まる一同。

1、パパ、ママ、輝

2、葵、奏、修

3、茜、岬、遥

4、慶、光、栞

(俺も死んでもいいや)

割と本気でそう思った慶だった。

第67話

部屋割り通りに部屋に分かれ、慶は心がびよんびよんしていた。

「さあー栞。こつちや来い来い」

「んっ」

で、栞は慶の膝の上に座った。

「よーしよしよしっ。良い子だなー栞は」

頭をワシヤワシヤと撫でまくる。

「んっ、きもちいい」

すると、光が慶の膝の上に座ってきた。

「おっ、どした？」

「あ、あたしも！中学に上がってからはやってくれないんでしょ？」

「光……お前、満点……。中学入ってからでもやってやるから結婚しよう」

「だめ！お兄様とけっこんするのは栞！」

「ふおおおおおおお！」

思わず鼻血が出そうになる慶。その時だ。ガラツとドアが開いた。「けーちゃん！みんなでトランプ……」

岬だった。が、その顔面に枕が減り込んだ。

「死ね！出てけ！邪魔すんな！」

ブフォツと断末魔をあげてぶつ倒れる岬。

「つたく……邪魔しおつてからに……」

「トランプ!!? あたしもやりたい！」

「えっ」

光が立ち上がった。

「行く? 葉」

「うんっ」

仕方ないので慶もあとに続いた。

*

茜、岬、遥の部屋。

「で、何やんの?」

「大富豪！」

茜が元氣良く答えた。

「OK。ボコボコにしてやるよ。どーせなら金賭けようぜ」

「だ、だめだよ！ 葵お姉ちゃんとかにバレたら怒られるよ!!？」

「バレなきやいいんだよ。あ、もちろん栞と光の分は俺が出してやるからな」

「うーん……どうする遥？」

「僕は構わないよ。慶兄さんには勝てないけど、僕の能力があれば負けはないからね」

「遥がいいなら私も……」

岬も賛成した。まあ大富豪での金の掛け方なんて知らないし、あるかどうかも分からないので、みんなで100円ずつ出してくみたいな感じだ。

で、案の定、栞か光が毎回1位になり、慶、遥、茜か岬という順番になった。理由はもちろん、慶が二人を勝たせてるからだ。

「……………なんかもうやめよう」

「えーなんで!!? 儲かってたのに！」

遥の台詞に光が絶望的な声を上げるが、そりや完全にゲームをコントロールされちゃ周りはずまらなくなるもんだ。

「それよりさ、枕投げやろ！ 枕投げ！」

「やだよ」

岬が元氣よく手を上げたのに対して、遙と慶が冷たく断つた。

「なんでよー!」

「疲れるもん」

「そうだよお前。大体、枕投げやって旅館のどつかぶつ壊して母親にメチャクチャ怒られた5年前の夏を思い出せ」

「あー……確かにあれはやばかったね……」

茜も思い出したように言った。その時だ。茜の顔面にポフツと枕が直撃した。岬が投げたのだ。

「ちよっ……岬!何するの!?!?」

「えいつ!」

まったく話を聞かずに岬はさらに遙に投枕。が、ギリギリ躲した。

「あつぶな!岬!僕はやらないって言っ……!」

と、言いかけた遙に光が投げた。今度は直撃した。

「はい、ハルくん負けえ〜」

ずるりと落ちた枕の下から出てきた遙の顔は鬼の形相だった。

「上等だよ!やってやろうじゃないか!」

そのまま枕投げ大会開催！

「お前らほどほどにしとけよ〜」

と、慶は言いながら立ち上がった。巻き込まれないように部屋に帰るためだ。だが、その慶のお尻に枕が可愛くポストと当たった。振り向くと、栞が悪戯っ子の顔で言った。

「けーちゃん、あうと」

「お、おいおい冗談キツイゼマイシスター。俺に枕投げを挑むなんてザクがクアンタに挑むようなもんだぜ」

だが、栞はニコニコしている。すると、慶の背中にポストと枕が当たった。

「あ?」

振り返ると、光が立っていた。

「みんな!今こそけーちゃん倒すチャンスだよ!」

光の合図で五人はザツと並ぶ。それに慶は「ふはっ」と笑う。

「一応、確認しとくけど、命は全員一つずつでいいんだよな?」

「そだよ。ま、この人数に勝てるわけないけどね」

茜が自慢げに言った。

「はっ、五人?少な過ぎだろ、それじゃ」

その瞬間、遥の顔面に枕が減り込んだ。

「んなっ……!?ま、まったくモーション無しで……!?」

「は、遥!」

思わず遥の方を振り返った茜と岬の間にいつの間にか慶は立っていた。

「えっ」

そして、スパパアンツ!と音を立てて二人に枕を叩きつけた。残り、光と栞のみとなった。が、圧倒的な慶の強さに二人は完全にビビってしまっている。

(ビビってる栞さんと光たん萌え)

と、思いつつ、慶は豪快に言い放った。

「ふはははっ!恐怖と後悔をするがいい!この俺に枕投げを挑んだことを後悔するがい

……………」

「何やってるの?」

ゾクつとする声が響いて、振り返ると葵が立っていた。

「あ、葵……」

「6人とも、分かるわよね?」

「……ごめんなさい……」

気絶してる三人以外はとりあえず謝った。

第68話

温泉旅行から帰って数日。まだ冬休みが続く中、慶と茜はお城に呼び出された。

「と、いうわけで、お前たちにはヒーローショーをやってもらおう」

父親に言われて二人は固まった。

「おい待て親父。どういふことだコラ」

「だから、遊園地でスカーレットブルームとナイトブルームのヒーローショーをやるってわけだ」

「なんで？ は？ なんで？」

「実は、遊園地の方から私に直接頼まれてな。『あなたなら、お二人の正体を知ってるでしょう』って」

それを聞いた瞬間、慶は悟った。

(茜にバレないようにするためか)

ジャミンググラスのせいで茜は周りに正体がばれてないことになってるが、もろバレてるので、こんな回りくどいことをしたのだ。

「ち、ちよつと待つて！お父さんはなんでスカーレットブルームが私だつて!!?」

「私は二人のパパだ。それくらい分かるよ」

で、ニヒツと笑う。

「お父さん……」

（うわあー。すつげえな……詐欺師の才能あるなこいつ……）

感動する茜と呆れる慶。

「まあ、そういうわけだから、頼むぞ」

*

そんなわけで、自宅。リビング。

「ヒーローショー？」

「ああ。で、その脚本を考えたんだが……」

慶は葵に髪を数枚束ねたものを渡した。それをぺらつと捲り、中を見る葵。

悟空『俺は怒つたぞツ!!?フリーザアアツツ!!?!!?』

閉じた。

「最初からクライマックスじゃない！」

「いいだろ別に」

「ていうか悟空って何!?? スカーレットブルームの話じゃないの!??」

「だから言ったじゃんけーちゃん。だめだつて」

茜がため息をついて言った。

「やつぱりかー……てなわけで葵、なんとかしてくれ」

「うーん……なんで私なのよ……」

「そりゃ、葵だからじゃね? なあ茜」

「うん。葵お姉ちゃんならなんとかしてくれるかなーって思つて」

「最初から頼る気満々だったわけね……。まあいいわ」

「あつ、ちなみにナイトブルームとスカーレットブルームの設定はこれな」

シユツと慶が新しい紙を出した。

『ナイトブルーム(18)』

姉の葵をフリーザに殺された怒りと薄ら笑いによって目覚めた覚醒戦士。右手から放つ暗黒魔導砲は太陽系を破滅させる。

必殺技：↓←+A or B 暗黒魔導砲

A+B+C バーストモード解放

武器：金属バットと木刀』

閉じた。で、震えた声で聞いた。

「や、あの、なんで？なんで格ゲー風？」

「や、なんか作ってる間に楽しくなっちゃって……」

「ていうかなんで私死んでるの？あと薄ら笑いつて何？それから武器が親近感あり過ぎよ。あとその暗黒魔導砲っていうの、是非とも見てみたいんだけど」

「なんだよ文句ばっか言いやがって。いいだろ別に」

「駄目よ」

「ちなみにコッチが茜の奴な」

『スカーレットブルーム（18）』

君がスカーレットブルームだ！』

「しかもテキトーじゃない！」

「けーちゃん！カッコいいのって言ったじゃない！」

今度は二人でキレた。

「どう？」

「よく聞けるわねあなた！」

で、葵はため息をつくと言った。

「はあ……まあ、このままじゃヒーローショーにならないわね。みんなで考えましょう」

てなわけで、
会議開始。

第69話

そんなわけで、ヒーローショー会議。いつの間にか、高校生以上全員＋遥が参加していた。葵によって6人にはルーズリーフが配られている。

「誰か案はある人々?」

葵が全員に声をかける。それに茜が言った。

「あ、あまり私は目立たない奴で……」

「駄目よ」

一発で一蹴する奏。

「なんでよ!」

「あんたと慶が主役でしょ? 目立たない主役なんて黒バスくらいしかありえないわ」

「むう……そ、それはそうだけど……」

「とにかく、どんな話にすればいいかを書けばいいんだろ?」

「ええそうよ」

修はそう確認すると、ルーズリーフにスラスラと何かを書き出した。

「こんな感じのタイトルでどうだ？」

『無気力クーデター』

「却下」

弾く奏。

「そんなどつかで聞いたことあるような曲のタイトルダメよ」

「お前よく曲のタイトル分かったな……。俺はこの前、慶がニコ動で聞いてたのをたまたま見かけたただけけど」

「わ、私もニコ動で見たのよ！」

「……………ああ。なるほど。慶の趣味と合わせたかつ……………」

言いかけた修の頬をシャーペンが掠めた。無論、奏が犯人だ。

「お兄様？」

「や、ごめん」

「じゃあこんなのは？」

茜が出したルーズリーフ。

『薄命のナイトブルーム』

「だからダメだってば」

奏が拒否した。

「どうして？」

「何ちやつかり自分を主人公から外してんのよ。ていうか慶が死んじやつてるし」

「こんなのは？」

遥がルーズリーフを見せた。

『ダブルブルームの誕生』

「悪くは無いけど……恥ずかしがり屋を治すためにやるつていうのが真実よ？」

「そこはほら、なんか脚色付けて……」

「どちらにしろ、長過ぎるのはダメよ。30分で終わらせなきゃいけないんだから」

言われて、「なるほど……」と顎に手を当てる遥。奏はジロリと慶をみた。

「ていうか慶。あんたはなんかかないの？」

「おっと奏さん会話したいがためにわざわざ意見を求めるフリなんてしなくても……」

言いかけた修にシャーペンが突き刺さり、ドロリと血が広がった。

「で、慶。あんたなんかかないの？」

「んっ」

ルーズリーフを見せる慶。そこにはシスター服の葉に学生服の慶が描かれていて、タイトルは『とある王族の物体会話』と書かれていた。

「今の短時間でそこまで描き込んだの!? ていうかなんで栞がいるのよ! しかもちゃっかり自分ヒーローにしてるし!」

「その幻想をぶち殺す!」

「あなたの幻想をぶち殺したい! ついでにあなたもブチ殺したい!」

で、奏は葵を見た。

「なんか言つてあげてよ葵姉さん!」

「うーん……。そうねえ、とりあえず真面目にやらないとみんな罰ゲームでどうかしら?」

「と、言うとは?」

「それは……じゃあくじにしよつか。みんなで罰ゲーム書いて、それを箱に入れるの」

「それで私のツツコミが減るならそれでいいわね」

「ま、そういうわけだからみんな。真面目にね」

葵の一言で、ようやく会議が始まった。

*

箱が完成し、会議開始。

「じゃ、とりあえず確認するね」

葵の一言で全員が頷いた。

「狙いは小学生低学年以下の子供ってことだから、簡単なヒーロー物。悪者を茜と慶がやっつけていくタイプね」

それにも頷く5人。

「問題はその脚本だけど……何か意見ある人？」

「はいっ！」

手を元氣よく上げたのは茜。

「とにかく私を目立たないように！」

「はい罰ゲーム」

「な、なんで？？」

慶の冷酷な制裁に声を上げる茜。

「それはさっきだめだって言ったらろうが。これは舐めた発言としか取れないよね」

「うっ……！」

「はいみんな判決は？」

慶が聞くと、全員が顔を伏せた。

「死刑だな。ほら、引け」

「ううっ……わ、分かりましたよー……」

箱から紙を一枚抜く茜。

『公開デープキス』

「何よこれ！」

速攻で紙を机に叩きつける茜。

「誰よこれが書いたの！」

全員に気付かれないように顔を伏せる奏。どうやら、慶に引かせるつもりだったらしい。

「で、誰と？」

「茜が決めちまっついていいんじゃないか？」

「その長男次男！勝手に話進めないでよ！まだやるなんて……！」

「ダメだろ。罰ゲームだし」

「そうだぞ茜。やると言ったからにはやらなきゃな」

「うう……」

で、茜はチラツと葵を見た。

「お姉ちゃん……」

「わ、私？」

「お願い……………」

「う、うんっ……………」

そのまま二人は顔を赤くしながら顔を近付ける。修と慶以外も顔を赤くしていた。そして、口と口がくっ付いた瞬間、パシヤツと音がした。携帯を構えた慶の姿があつた。「っし、激写」

その瞬間、葵と茜からプツツンと音がした。

「慶、ちよつとこつち来なさい」

「えっ? いやちよつ……………たんま。ごめつ……………ねえ、聞いている? ごめん! ごめんってば! てかごめんなさ……………」

結局、話が進まなくなるので罰ゲームはなくなつた。

第70話

「…………ふう、こんなものね」

葵が息をつく。だいたいの流れは出来てきた。まあよくあるシヨールにして、司会のお姉さん（葵）が挨拶していると敵の修と遥と愉快な仲間たち（岬、s）が現れて観客を浚う。そこでブルーム二人が現れて周りをギツタギタにする。そこでラスボス（奏）が巨大モンスターを連れて登場し、苦戦しながらも戦うというものだった。

「問題は、奏の巨大モンスターよね。未知の生き物を作るわけにもいかないし……」
「そうだね。お金も掛かるし」

と、葵、遥と言った。

「いやいやいや、生き物に金はかからんだろ。ほら、命はお金じゃ買えないし」

「それそういう意味じゃ無いわよ」

呆れたように奏がツツコむ。

「じゃあ口ボでもいんじゃね？」

「そんなのいくら掛かるのよ」

「バツカお前そこはおもちやのロボとか俺たちのこのジャミンググラス(笑)のレプリカも作って現地限定で売れば金にもなるだろうが」

「なるほど……」

「こーやって商売は成立すんだよ」

「じゃあそれでいきましようか」

そんなわけで、決定した。

*

ヒーローショー当日。客席には葉や輝、光(引率なので中学生)の姿も見える。

「うーわ……なんでいるんだよ……」

ステージ傍でその様子を見ている慶。

「コラ」

その慶の頭にチョップする茜。

「サボってないで準備手伝いなさいよ」

「わーってるよ赤毛ババア」

「双子でしようが！それにそろそろ始まるわよ」

そう言う通り、葵がステージの真ん中に立つ。

「みなさーん！こんにちはー！」

『こんにちはー！』

と、声上がる。そのまま葵は挨拶的なものを始める。その時だ。

「ハーツハツハツハツ!!？」

高笑いとともに降りてきたのは変な仮面に黒マントの男（修）と、白衣にミニスカートの女（遙）と、全身タイトの8人（岬、内1人は鼻血出てる）だった。

「この桜遊園地は我々、沙九羅駄団がいただく！」

一言一言発するたびに変なポーズを取る修を見ながら、「ノリノリだな……。」と、輝以外の家族が思ったのは言うまでもない。

「さて、そのためにはまず子供たちを浚うとしましょう！」

遙はそう言うのと、客席に向かおうとした。その前に立ちはだかる岬（鼻血）。

「私をさらって！」

言った瞬間、ステージ傍から飛んできた石が頭に直撃し、気絶して放置された。

「さて、どの子にしましょうか……」

（とは言ったものの……知らない子はなんとなく連れていきずらいんだよなあ……かど

言つて王族をさらうと鼻唄だのなんだのなりそうだし……ていうか輝に能力使われそうで怖いし……）」

若干、困つた表情を浮かべながらも辺りを見回すと、見覚えのある女の子を見かけた。
（あれは……確か光の友達の子だったな……）

そう思い出すと、その子のところへ向かつた。

「貴様に決めましたよ！」

そう言いながら指をさすと、微笑みながら言つた。本人的には邪悪な笑みを浮かべたつもりだったが、元々女っぽいや顔立ちの遥の笑顔は爽やかにしか見えなかつた。

「来てもらいますよ」

「は、はい……！」

（あとで光に遥様に彼女いるか聞いたかなきや……！）

明らかに喜ばれていた。色んな意味で。で、ステージの上。

「みんなー！ダブルブルームを呼んでー！せーのっ！」

の、声に合わせて子供達は息を大きく吸い込んだ。

『ダブルスカーレットー！』

「もつと大きな声で！」

『ダブルスカーレットー！』

呼ばれた瞬間、バツ！とステージの上の方から音がした。そして、シュバツ！と二人の女性がステージに降り立つ。と、思ったらスカーレットブルームが言った。

「答えよナイト！流派！」

「東方不敗は！」

「王者の風よ！」

「全新」

「系裂」

「天破狭乱！」

「見よ！東方は、赤く燃えているウウウウウウツツ！！？！！？」

そして、ステージの後ろのほうが発射した。

第71話

「スカーレットブルームにナイトブルームだと？面白い！我ら『黒い黒マント』と『白い白衣』の前に朽ち果てるがいい！」

また一言一言言うたびに変なポーズをとる修……黒い黒マント。

「朽ち果てるのはあなた達よ！この世界はあなた達なんかには渡さない！」

スカーレットブルームがそう言うと、白い白衣が言った。

「面白いですね！ならばまずはあなた達から始末してあげましょう！かかって来なさい……」

「ホワチャアアツ！」

「ゴッフアアツ！」

ナイトブルームの飛び膝蹴りが白い白衣の顔面に諸に入り、鼻血を噴射しながらステージの傍に突っ込んだ。

「んなつ……!?？」

素の声が黒い黒マントから漏れる。その黒い黒マントにナイトブルームは邪悪な笑顔を浮かべて言った。

「先手必勝」

「ひ、卑怯な！行け！桃色のピンクタイツ軍団！」

黒い黒マントの命令でナイトブルームに飛び掛かる桃色のピンクタイツ軍団（岬軍団）。だが、ほとんどがフルボッコにされている。それをゲンナリした表情で眺めている黒い黒マントに葵が言った。

「ちよつと修。なんとかしなさいよ」

「オイオイ冗談だろ。見ろよあの顔。完全に悪役の顔だよ。完全にお楽しみモードだろうが」

「いや、行かないと岬達が全員死んじゃうわよ。子供達も幸い盛り上がってるし、あなたなら瞬間移動があるじゃない」

「……………」

「お願い。あの中に飛び込むのが嫌なら茜の方に行けばいいしき。というか慶の気が引ければいいからさ」

「……………わかったよ」

そんなわけで、黒い黒マントは瞬間移動を使った。

「スカーレットブルーム！貴様の相手は俺がしてやろう！」

言いながらスカーレットブルームの背後を取った。

「修ちゃん助かつ……！じゃないや、かかって来なさい！黒い黒マント！」

一瞬、本音が漏れたがスカーレットブルームは身構えた。で、お互いの拳が交差する。あ、もちろん寸止めな。だが、その二人に岬の分身が一人飛び込んできた。ナイトブルームが投げ付けたのだった。

「！ 大丈夫かスカーレットブルーム！」

言いながら駆け寄るナイトブルーム。そして、茜を抱き抱えた。

「いや、私はけーちゃんに……」

「おのれ、卑怯者どもめ！」

「いや卑怯なのはナイトブルーム……」

「お前の仇は俺が討つ！」

「なら切腹でもなんでもして」

なんてやってる時だ。

「ハーツハツハツハツ！」

高らかなのに乾笑いが聞こえた。見ると、目から嫉妬ビームをスカーレットブルームに飛ばしてる奏……黒きホワイトタイガー・奏が立っていた。

「！ お、お前は……！」

「殺す」

「台詞端折り過ぎだろ！」

だが、奏は間髪入れずに5mくらいのロボットを呼び出した。右手にドリル、左手にチェーンソーを持ったロボだ。

「な、なんか……あれ本物っぽいんだけど……」

「気のせいよ。行きなさいブルームデストロイヤー！」

キュウイイイイイインツツ!!?と音を立ててドリルがナイトブルームに迫る。スカーレットブルームを抱えて後ろに躲す。ドリルはステージにデッカい穴を開けた。

「明らかに本物じゃねえかアアアツ!!?!!?」

「この世界は私のもよ！」

「ほんつつつとに世界制服でもする気かお前は！」

で、ナイトブルームは武器である金属バットを取り出した。

「おいスカーレットブルーム！あいつヤバい。力を貸せ！」

「なっ、なんでカナちゃん本物出してんの……?」

「愛が重ただけだよ！」

「自覚してたんだ……」

そんなわけで、ダブルブルームは応戦を開始した。スカーレットブルームは飛び上がり、ナイトブルームは金属バットを構えて突撃。

「スカーレットブルーム！武器は俺が引きつける！その隙に得意のグラヴィティ・ブラストでぶっ壊せ！」

「了解！」

で、ナイトブルームに向かってくるドリルとチェーンソー。それを金属バットで弾く。

「ナメんなッ！」

ギインッギインッ！と鈍くて鋭い音が響く。どっちだよ。その時だ。ロボの腹からハンマーが出てきた。それがグオオオオツツとナイトスカーレットに向かってくる。

「ッ！」

ガードするも、ステージ傍にぶっ飛ばされた。

「！ ナイトブルーム！」

司会の葵が声を漏らした。そして、ステージ傍に向かってドリルが伸びてくる。ドラガアアアアアアッ！と何かが壊れる音がした。

「け、慶！」

素の声が響いた。今更、「やべっ、やりすぎた」と声を漏らす奏。すると、ガギンツと

いう鈍い音と共にステージ傍から何か回転しながら飛んで来た。ドリルの先端だった。そして、ステージ傍からナイトスカレットがバットを担いで歩いてきた。

「あーびつくりした。流石に死ぬかと思った。あと奏、お前は後で殺す」

そして、再び突撃。すると、腹からハンマーが飛んできた。が、それを踏み台にして飛び上がり、チェーンソーをぶっ壊した。

「今だアアア!!? スカレットブルームウウウウツツ!!?!!?」

「やああああああ!!?」

ナイトブルームの声とともにスカレットブルームはロボを持ち上げながら空中に舞い上がった。そして、地面に頭から叩きつけた。その瞬間、客席からすごい歓声が上がった。

ヒーローショーは大成功に終わった。

*

櫻田家。奏は葵と慶に泣くまで怒られた。

第72話

ある日、慶は寝ていた。その慶の腹の上に何か落ちてきた。

「ゲッフオアツ！」

「起つきろー！」

光だった。

「ひ、光……親愛なる妹に起こしてもらおうのは俺の夢だったが、もう少し穏やかに起こしてくれ……」

「ねえ、お願いがあるの」

「なんだよ」

「実はさあ、動物園に行きたくてねえ」

「はあ？なんでまた」

「虎の赤ちゃんが産まれたんだって！」

「それで？」

「見に行きたいの！」

「行けばいいじゃん。アイドルやって稼いでんだろ」

「お願い、お兄ちゃん」

「よし任せろ。交通費食費入場料お土産代全て俺が出してやる」

「ありがとう！ 栞と輝の分もお願いな！」

「へっ？ ち、ちよつと待ってそれは聞いてな……」

「じゃ！ 明日よろしくね！」

そのまま出て行ってしまった。ちなみに財布の中には45円しかない。

「……………さて、二度寝するか」

現実から逃げた。

*

「と、いうわけで葵お姉様。助けて下さい」

気が付けば土下座していた。

「なんで私なのよ……」

「そりゃあ、俺の3人の姉の中で一番頼れるからだろ」

「そ、そう……そうね」

ストリートに言われて少し顔を赤らめる葵。葵なのに。

「頼むよマジで。金は返すからさ」

「ていうか、そもそもどうしてお金ないのにOKしたのよ」

「俺が可愛い光の頼みを断れるわけないだろ」

「アホね……まあ、お金返してくれるならいいわよ。行きましょう」

「いや、お前いらねーから金だけくんない？」

「……あんたぶつ殺されたいの？」

「や、冗談ですごめんなさい」

*

そんなわけで、翌日。五人は動物園へ。

「へっ？小学生以下入場料無料なの？」

慶がマヌケな声を上げた。

「なんだよ……じゃあ本当に葵いらなかったじゃん」

「電車で、誰が出したと思ってるの？」

「そ、そういやそうだったなー」

で、ご入園。

「すごい！あそこ！猿！可愛い！」

「あつ、待っててください姉上ー！」

パタパタ走る光と追う輝。

「あんま離れんなよー。……………つたく、はしやぎやがつて」

「あら、いいじゃない。子供だもん」

なんて慶と葵が話してると、慶の肩の上の葉が言った。

「なんか、今の会話、パパとママみたい……………」

「うえっ!!?!」

言われて顔を真っ赤にする葵。

「し、葉?き、兄弟で結婚すると思ってるの?」

「葉は、慶お兄様と結婚する」

「俺も葉と結婚する」

「なんか一度通報したほうが身のためみたいね……………」

「それは勘弁してくれ、死んじやうから社会的に」

「どうしよつかなー。……………つて、輝！余り遠くに行かないでね！光もちゃんと見てあ

げてて！」

慌てて二人のあとを追った。

「まっっておにいさま！お猿さん見たい！」

「ああ？でもあいつら先に行っちゃってて……」

「いいわよ慶。二人は私が見てるから葉と一緒にゆっくり後から来て？」

「……………いいのかよ」

「もちろん」

「なら、ゆっくり回るか葉」

「うんっ」

フヒヒ、葉たそと一緒に動物園デートとか死んでもいい。

「さて、葉。何処に行きたいー？」

「おさるさん」

「うんすぐそこだね。好きなだけ見てけ」

「うんっ」

と、まあこんな感じで二人でデートを続けた。

*

数時間後、慶の携帯……略して慶帯にLINEが来た。

あおい『そろそろお昼にしましょう』

それだけ確認すると、慶は栞に言った。

「栞、そろそろ飯にしようだよ」

「分かった」

そんなわけで、飯屋。モンハンコラボのつもりか、こんがり肉なんてものが売っていた。

「おーい、こつちこつちー！」

光の元気な声がして、ようやく合流した。

「さて、じゃあ何食う？俺が買ってきてやるよ」

「僕はこんがり肉がいいです！」

「あたしも！」

「私はハンバーガーでいいわよ」

「栞も、お子様ランチ」

「ういつす。………一人じゃ無理だから誰か手伝って」

「じゃあ僕が手伝います！」

威勢良く手を挙げた輝と飯を買いに行った。

第73話

櫻田家。

「あれ？慶は？」

奏が聞くと、岬が答えた。

「けーちゃんなら動物園に行ったよ？」

「へ？誰と？」

「葵姉と光と輝と栞」

次の瞬間には奏はいなくなっていた。

*

昼飯が終わったあとはみんなで回る。すると、触れ合いコーナーなるものがあつた。光の言つてた虎の赤ちゃんに触れるようだ。

「俺は行かないから、お前らだけで行って来いよ」

逃げようとする慶の腕を引つ張る光。

「どこに行くの？」

「あの、ほんと勘弁してもらえませんか？虎つてお前猫の上位互換みたいなもんでしょ？そんなものに触るつてお前マリオがクリボーに触るようなモンだよ」

「大丈夫だよ。相手は子供だし」

「バツカお前子供の純粹さが一番怖いんだよ」

「もーけーちゃんめんどくさいなあ……。葉」

光が呼ぶと、葉がキュツと慶の袖を握った。で、上目遣いで言った。

「お願い……お兄ちゃん……」

「よし行こうか」

出発した。

*

大量の人の列に並ぶ。輝やら光やら葉がしりとりとかして暇を潰してる中、慶は死刑宣告を待つような気分で立っていた。

「慶、大丈夫？」

葵が声をかける。

「へ、平気っす！」

「いや全然平気じゃなさそうなんだけど」

「大丈夫っす！自分元気っす！」

「ある意味元気良さそうね。でも無理は禁物よ？」

「うっす！」

「やっぱり大丈夫じゃなさそう……」

なんてやっていると、ようやく櫻田家の番となった。周りが「葵様だ！」などとはしゃぐ中、順番に虎の赤ちゃんの頭を撫でていく。そして、慶の番になった。

「けーちゃん！頑張って！」

「兄様！頑張ってください！」

「お兄様……」

などと妹や弟からの声援をもらう中、慶が手を伸ばした時た。虎の赤ちゃんがピョ
ンツと跳ねた。で、慶の頭の上に乗った。

□

□

□

「

全員が言葉を失う中、慶は恐る恐る口を開いた。

「……………えつ、あれっ？何これ。あれっ？虎は？どこ行つたん？」

全員が慶の頭の上を指差す。

「は？何その指。どこに向いてんの？where？」

「あ、頭……………」

葵に言われて慶は恐る恐る自分の頭に手を伸ばした。その瞬間、カプツと指がなんか暖かいものに挟まれた。所々尖っている。

「ありっ？指が……………離れね……………オラアツ！」

無理矢理、頭の上から指を引き抜くと、自分の中指に虎の赤ちゃんが噛み付いてぶら下がっていた。

「……………」

「……………」

「……………んには……………」

後ろに倒れた。

*

気が付けば夕方になっていた。目を覚ますと、葵の背中の上だった。

「……………ありっ？」

「起きた？」

「なんで俺背負われてんだっけ…………」

「それは……………覚えてない？」

「おう。さっぱり。なんで？」

「え、えつと……………い、隕石が落ちてきて…………」

「マジでか。なんでおんぶされてんの？」

「気絶しちゃったけど光達は回りたいって言うから、私がおんぶしてあげてたのよ。たまに輝が能力使って交代してくれたりしたけど」

「ふーん……………なんか悪いな」

「そう思うなら降りてよ」

「やだ。このままのが楽」

言いながら葵の肩に顎を置く慶。

「まったく……………甘えん坊なんだから…………」

「おねーちゃん」

「気持ち悪い」

「で、これどこに向かっているの？」

「動物園からでるとこ」

「なるほどな」

で、慶は3人に聞いた。

「おーいクソガキども。今日は楽しかったか？」

「はい！ライオンとか見れてすごく楽しかったです！」

輝が目をキラキラさせて言った。

「そうか。なら良かった」

「あたしはけーちゃんやんが寝ちゃってたからそーでもなかったー。まったく、虎の赤ちやんに嘸まれたくらいで……」

「あ？嘸まれた？」

「光？」

ニコニコ笑顔で続きを言わせない葵。

「葉は？」

「楽しかった」

「なら良かったよ。いやマジで」

なんて話しながら動物園を出ようとする瞬間だ。

「慶?」

魔人ブウ並みのオーラを感じて振り返ると、奏が立っていた。

「何をしてるのかしら?」

「あ? 帰るところだけ?」

「その現状を聞いているの」

「だから帰るんだってば。何言ってるんだお前つーかなんでここにいんだよ」

と、慶が言っても無駄だった。奏は笑顔で慶の首根つこを掴むと、葵から引つpegがした。

「行くわよ」

「あ? 何処に」

「これから、私と動物園デート」

「はあ?」

「私だけ不公平よね? いいわよね?」

「いいよ」

「ダメとは言わせ……えっ?」

「ほとんど寝てたから記憶おぼろげなんだわ。行こうぜ」

「そ、そう……」

思わぬ返答に戸惑う奏を捨て置いて、慶は葵に言った。

「そんなわけだから、行ってくる」

「遅くなる前に帰ってくるのよ」

「うーっす」

そのまま別れた。

第74話

慶は中学に来ていた。

「つたく……なんで俺がこんなこと……」

岬と遥の授業参観の親役で。慶の学校はあれ、なんか休みになったってことで、体育という事なので体育館にいる。もちろん、女子の方を見るに。

「ねえ、岬」

クラスメートが岬に声を掛けた。

「なに？」

「慶さん、だよね？仲良いの？」

「そーでもないよ。けーちゃんはパパの代理だし」

「でも普通、妹の授業参観なんか来てくれないよ？」

「まあ、けーちゃんツンデレだからなあ……」

「そうなの？」

「絶対そう。そんな気しかしない」

「……………なんとなく分かるかも」

なんて話してる岬の後頭部にバスケットボールが直撃した。保護者の方から飛んできたようだ。

「だ、大丈夫岬?!?全然デレてないけど!」

「へ、へーきへーき。あれけーちゃんなりの愛情表現……」

と、眩いた所に二発目のバスケットボールが飛んできた。

*

で、終わって後片付け。何度も授業を邪魔した罰で慶も手伝わされていた。

「まったく……馬鹿だねけーちゃん」

「つせーよ。お前がツンデレだなんだ抜かすからだろうが」

「だからって普通邪魔しないから。ほら開いた」

岬が体育倉庫の鍵を開けて中に入る。

「とっつげきい〜!」

「きゃあっ!」

後ろからボールのカゴのあの台で突撃され、思わず転んでしまう岬。

「ちよつと何すんのよ!」

「いやごめん。力入っちゃった」

「わざとでしょ!突撃って言ってたもん!」

「まあな」

「まったく……あれっ?」

「どした?」

「やだっ……服がどこかに引つかかって……」

「何やってんだよ……まったく……」

「けーちゃんのせいでしょ!!?」

すると、慶は岬の元へ歩く。

「へ?何?」

「どこが引つかかってんだ……?」

そんな事を呟きながら慶は岬の背中中の辺りを覗き込む。

「ち、ちよつと、けーちゃん!!?」

「あーこれだこれだ。バレーボールのボールの引つかかるところに引つかかって……てか穴あいちやつてら」

「あ、穴!!?」

「今とってやるから……」

「ま、待って！触らないで！自分でやるから……！」

だが、慶は無視して外そうとする。その時だ。顔を真っ赤にした岬の蹴りが慶の腹にクリティカルした。

「触らないでってばぁー！ツツ！！？！！？」

「グホツ！！？」

そのまま後ろのドアに突っ込む。

「いってえな！何すんだよ！」

「触らないでって言うてるでしょ！！？」

「外してやろうとしてたんだろが！その位置はお前とどかねえだろ！」

「な、何を……！って、けーちゃんそれ何持つてるの？」

「あ？」

慶の手には白い布が握られていた。『櫻田』と刺繍入りの。そこでようやく自分の服が破れて半裸になってる事に気付いたようだ。

「き、キヤアアアアアツツ！！？！！？」

その時だ。足音が体育倉庫の外から聞こえてきた。

「やばい……！」

自分は平気だが、岬は半裸。万が一生徒だったら見られるので急いで体育倉庫のドアを閉めた。で、慌てて岬の口を塞ぐ。

「……………!?」

「静かにしろ。半裸誰かに見られたいのか？」

「……………」

だが、この行動はダメだった。外から、ガチャツという鍵を閉める音がした。

「……………えっ？」

二人の思考はフリーズした。

第75話

体育倉庫に閉じ込められた。

「嘘おとおおおおおツツツ!!??!!??!!??」

悲鳴をあげるように叫ぶ岬。

「なんでこうなるの!なんでこうなったの!なんでこんなきやいけないの!最悪だよー!」

「ままま、落ち着けよ。俺が携帯で遥呼べば済む話だろ」

言いながら携帯を取り出す慶。だが、バッテリー切れ。

「……………」

「……………」

二人に嫌な汗がドツと浮かぶ。

「だ、大丈夫だよ。お前この後体育館使うクラスだつてあんだろ……」

「今のが6限だからもう誰も来ないよ」

「……………ぶ、部活やっているとことかあんだろうが」

「今日の放課後は体育館なんか使うみたいだから体育館使う部活はオフだよ」

「……………」

「……………」

「ヘルプ！ヘルプミイイイイイイ！！？！！？誰でもいいからこの重い扉を開放しろお
おおおおお！！？！！？」

「頼りなつ！もう少し冷静を保つててよ！」

「うるせえ！どこか窓はないのか窓は！」

「ない」

「マジかよ……………一応聞くけどお前携帯は？」

「教室よ」

「だよなあ……………」

「そもそもなんで充電切らしてんのよ」

「さつきまで白猫の協力バトルやってたから……………」

「あんたは……………」

「まあ過去に理由なんて求めても仕方ねえよ。未来に希望を探そう。とりあえず落ち着いてどこでもドアが通り抜けフープを探せ」

「あんたが落ち着けえええええ!!?」

「未来に手を伸ばすって言ったろうが」

「何年先の未来?!? 無限パンチでも届かないわよ!」

で、岬はため息をついた。

「はあ……こんな時に遥がいてくれれば……」

「悪かったな。愛しの遥様じゃなくて。ブラコン」

「シスコンに言われたくないわよ!」

「馬鹿野郎! 俺のシスコンは光と栞限定だ!」

「尚更危ないわよ!」

「まあとにかく、ここから脱出する方法考えねーとな」

言いながら立ち上がる慶。すると、後ろから「くしゅんっ」とくしやみの音が聞こえた。

「寒いのか?」

「忘れてたけど、体育着破けてるんだよね……つくしゅ!」

「おら」

着ているコートを放る慶。

「風邪引かれると俺が葵に殺される」

「！ あ、ありがと……。 やっぱりツンデレだ」

「…………… やっぱそれ返せ」

「やーだよー」

ニヒツと笑う岬。それにイラツとしつつも慶はゴキゴキと両手を鳴らした。で、ドアを見る。

「あ、あの、けーちゃん？ やめといたほうが……」

「やってみなきなわからんだろ」

「いや分かると思うけど……」

「オラアツ!!?」

そのまま本気でドアを殴る慶。ゴツ!!?と短く太い音が響き渡る。大きく凹んだものの、やはりドアは壊れなかった。それどころか、

「…………… 指折れた」

「だから言つたじゃない!」

「痛い…………… 泣きそう……………」

「そりや痛いわよ! こんなバカ久々に見たわ。とにかく、大人しくここで待ちましょう。明日になればまた部活やら体育やらあるでしょ」

「それもそうだけど…………… でもここで何もするのは俺のポリシーに反するわけで」

「どうでもいいわよあんたのポリシーなんか」

「まあ、しばらくここで待ってるのもいいか。それより岬。バドミントンやろうぜ」

「今度は何?!?なんでそんな落ち着いてるの?!?」

「お前が落ち着けて言ったんだろ。暇だし寒いからやろって言ってんの」

「うー。別にいいけどさあー」

そんなわけで、バドミントンをやる事になった。体育倉庫で。

*

5時間後、櫻田家。

「まだ帰ってきてないの?」

葵が言った。

「そう。けーちゃんも岬もいないんだよ」

「何かあつたんじやない?」

光がソファアの上でゴロゴロしながら言った。

「うーん……でも慶がいれば変な人に出会しても大丈夫だとは思うんだけど……」

「探してこようか?」

そう言ったのは修だ。

「うーん、そうね。お願いするわ」

「僕も行くよ。能力で探してみるよ」

遥も言った。

「別に慶兄さんはどうでもいいけど、岬は心配だから」

「そう。ならお願い」

「じゃ、行くぞ遥」

「うんっ」

そのまま二人は家を出た。

*

「予知だとこつちのはずなんだけど……」

と、遥と修が到着したのは中学だった。

「こんな所で何してんだあいつら」

「さ、さあ………」

「もしかして、兄妹としての一線を越えたのかもな」

「ええっ!?？」

「冗談だ」

なんて話しながら進むこと数分、着いたのは体育倉庫の前だ。

「……………ますますやっちゃまってそうだな」

「そんなの僕は許さないよ!」

「や、だから冗談だって。とにかく、中の様子でも見よう」

修はそう言うと、遙と一緒に中に瞬間移動で中に入った。中では、

「1782!」

「1783!」

「1784!」

「1785!」

バドミントンをしてる二人の姿があった。

「……………何してんの」

「うおわあっ!?？」

急に声がかかって、思わずビクツとする慶。

「けーちゃん!前、前!」

「へっ?あつやべっ」

「あー終わっちゃったー……」

「終わっちゃったじゃなくて。何してんのって聞いてんの」

「や、体育倉庫に閉じ込められちゃったからあったまると言うようにバドミントンやってたら
思いの外熱中しちゃってな」

「1785回まで連続して出来るようになったよ!」

「出来すぎだろ!」

デュエットでツッコむ修と遥。

「つたくお前らは……ほら、早く帰るぞ」

「えーもーちよつとだけ。今なら2000回はいける気がする」

「葵姉さんに殺されても知らないからな」

「さて、帰る準備するか」

第76話

葵の部屋。

「王様って何すればいいのかな」

茜がベッドにゴロゴロしながら言った。

「ん、例えば国を守ったりとか？」

「それはわかるけど、なんだか漠然としてて……」

「そうだねえ……。町の人たちと触れ合ってみたら何かつかめるんじゃないかな」

「ウウツ……。ちよつと外出てみようかな……。ジャミンググラスもあることだし……」

（それしていくんだ……。ていうか、大丈夫かな……）

自分で言っておきながら葵は不安になっていた。だが、茜は出掛ける準備をしてしまっている。

（心配だなあ……。うーん、こういう時は……）

で、葵は部屋を出て慶の元へ向かった。

「と、いうわけなんだけど、一緒に行ってあげられないかな？」

「やだ」

（ですよね……）

自分でもそう思う葵だった。だからこそ秘密兵器を用意してある。

「この前さ、葉と岬と茜と光と奏でカラオケ行ったのよね」

「あつそ。で？」

「その時にコスプレ衣装があつたんだけど、これいる？」

葵が取り出したのは猫耳メイドの葉と光だった。その瞬間、鼻血を出しながら葵の手を握る慶。

「葵」

「な、何？」

「結婚しよう」

「取引成立ね？」

そんなわけで、慶と茜でお出かけである。

*

「悪いな。今日ジャンプの発売日なんだよ」

「ううん。少し不安だったもん」

念のため、ジャミンググラスを装着してる茜だった。慶は付けてない。

（しかしまあ……見事に街の人は困ってんな……。そりやそうか、茜のヒーローごっこにいつも気付いてないフリしてくれてっからな。……俺の時はあっさりニュースで報道しやがった癖に）

怒りをなんとか押さえ込んで慶は茜と共に歩いた。そして、バス停の椅子に座る。

「なに、バス乗んの？」

「うん」

（あー隣に座って新聞紙で顔隠してるオツさん、ドンマイ）

しかも、さらに悪い事に茜はそのオツさんに声をかけた。

「あの……」

「はいっ!?」

「この国のいいところってなんだと思います？」

「うええっ!?」

困った声を上げるオツさん。

（こ、これはどっちで対応すればいいんでしょうか……。「茜様」? 「スカーレットブルー」

ム」？いやしかし、慶様も一緒にいるし……つて、慶様は眼鏡かけてないし！ど、どうすれば……）」

と、グルグル思考を巡らせた結果、オツさんは逃げた。

「あ、あれ？なんで？」

「ゴメンなさい……オツさん……」

「？　なんで謝ってるの？」

「お前のせいだタコ」

「た、タコ!!？」

*

で、バスで移動した先は土手だった。

「懐かしいな」

「うん。小さい頃はよくここで遊んでたよね。久し振りに橋の下でも覗いてみよ？」

「お好きにどうぞ」

そんなわけで、慶と茜は階段を降りて見てみた。そこには猫の親子がいた。

「まあっ」

「嘘………」

明るい声を上げる茜と絶望的な声を出す慶。その時だ。

「フシャーッ!!?」

威嚇する親猫。

「ひいつ!!?」

「ごめんなさい許してくださいお金ならいくらでも払いますから見逃して食べないでお願い」

「土下座!!?」

泣いて謝る慶にオロオロする茜。その後ろから声が掛かった。

「ちよつと！何してるのよ！」

「土下座」

「はあ?」

「べ、別に悪さしようとしてたわけじゃ……」

と、なんとか言い訳しようとする茜に、後ろからやって来た女の子はシツシツと追い払おうとする。

「知らない人が近付いたらケーカイするわよ。お母さんが子供を守ろうとするのは当たり前でしょ。そんなこともわからないの?」

「ごめんなさい許してくださいママタビでもアラガミでも買ってきますから見逃してください動物ダメなんですすほんと勘弁してください」

「あんたはいつまで土下座してんのよ！……って、慶様!!?」

「ご、ごめんね……けーちゃん、猫苦手だから……」

なんとか慶を落ち着かせると、自己紹介タイム。

「私は玉緒。こつちの妹は美緒。おねーさんは?」

ああ、どう答えるんだろ。スカーレットブルームとか?

「えっあつえつと、さ……佐藤花です……」

「ブフツ!」

本気かこのアホは。

「ふくん……慶様の彼女?」

「ふええつ!!?ち、違うわよ!」

「じゃあ、なんでこんな所に一緒にいるのよ」

「え、えと……」

だめだ。完全にテンパってる。そう判断すると慶が言った。

「花と俺は幼馴染なんだよ。さつき偶然会ったから昔遊んでたところを回ってるところ」

「そ、そうなんですか？」

「ああ」

「そうだ！慶様、私達のこと覚えてない？」

「あ？」

「ずーっと前なんですけど、私と美緒、助けてもらったんです。変な人に絡まれてる時に」

（あー……：そういやそんな事あった気がしなくもない……）

地味に思い出してる慶。

「ああ、そういやそうだったな」

「あれから慶様のファンです！選挙頑張ってください！美緒も応援してます！」

「ち、ちよつと、おねえちゃん……」

「俺は王様にはならないけどな」

「「ええっ？？」」

一発で一蹴した。

「俺は王なんて器じゃねーよ。応援するなら、そうだな。茜辺りに頼むわ」

「茜様……うーん……私の中では茜様は二番目なんですけどね……」

「その方が俺のためだし国のためだ。頼むよ」

慶はそう言いながら玉緒の頭を撫でた。

(あれ?今、けーちゃんはなんで私を勧めたんだろ……)

茜はそれを聞こうと声をかけようとしたが、その前に慶が口を開いた。

「それよか、猫の世話はいいのかよ」

「そうだった!慶様も手伝ってくれますか?」

「猫に触れる事以外の事ならいいよ」

「えー」

「俺に泣かされたいの?猫だけは本当無理」

「分かりました…」

そんなわけで、慶は茜と一緒に皿を洗いに行く。

「しかし、あの2人見てると懐かしいね」

「あ?何が?」

「優しくかった頃のカナちゃん。いや今も優しい時は優しいよ?」

「優しくねーよ。優しさが一番無縁の人物だろうが」

「優しいよ。けーちゃんには特に」

「あいつは俺の事大好きなだけだろ」

「自覚あつたんだ…」

で、洗い終わった皿を玉緒と美緒の元へ届けた。

「ほい」

「ありがとうございます。……はい、ごはんだよー」

「お願いだからこつちに近付けないでね」

「大丈夫ですよ別に……」

「てか、それなら家で飼えばいいんじゃないの？」

「お父さんが猫アレルギーなんです。だから、家じゃ飼えないの」

「ほー」

「でも、お父さんが稼いでくれでお金でこうしてあげられるから、それで十分です」

「……なるほどな」

(間接的にこの子のお父さんがこの猫ちゃんたちを守ってるんだね……)

茜がそう思った時だ。

「お姉さん、触ってみる？」

「えっ？」

「なんか触りたそうな顔してたから」

「じ、じゃあ……」

「茜、頼むからこつちに連れてくんなよ」

「分かってるよ」

なんてやりながら、猫に触れ合った。

*

数分後、

「そろそろ行くね」

茜が立ち上がった。慶も。

「も、もう行っちゃうんですか？」

「ああ。また来るよ」

「あ、あの！」

声をかけてきたのは美緒だった。

「わ、私も、頭撫でてくれませんか……？」

「あ？別にいいけど」

「お願いします」

で、頭を撫でてやった。

「ほい、猫の世話頑張れよ」

「は、はい！」

そのまま別れた。今は帰りのバスの中。

「で、どーだ？王様になってからやりたい事とか決まったか？」

「うん……。決まったよ」

「……………ならよかったよ。ジャンプ奢れよ」

「いいよ。今日くらいは」

帰った。

第77話

「あ、飯係だ」

慶が声を漏らした。例によってあのくじである。

「はい！私、カレーがいい！」

茜が元氣よく手を上げる。が、それをまったく無視して慶は菜の前に座った。

「菜は何がいい？お兄ちゃん、菜の食べたいもの作っちゃうぞー？」

「……………私は、うーん……………おさしみとカレーパン」

「はっ？か、カレーパン？」

「うんっ。この前テレビでね、インドの人はパンをカレーに付けて食べるんだって」

「ナンの事か？」

「たぶん……………」

（カレーと刺身か……………もつとも合わせちゃいけない組み合わせだなオイ）

「な、なあ菜。どっちかじゃダメか？」

「りようほう食べたいの！」

「OK任せろ。両方な」

「アホか」

後ろから修に頭をチョップされた。

「お前なあ、それはダメな組み合わせだろ。どっちかにしろっての」

「……だつてよ栞。どっちがいい？」

「やだ！りようほう！」

「だつてよ修お兄ちゃん」

「そもそもそんなにたくさん食べれないだろ」

「だつてよ栞」

「たべられるもん！」

「だつてよ修」

すると、葵が入ってきた。

「栞、両方欲張つても両方とも微妙な感じになるだけよ。ちゃんと選びましょう？」

「だつてよ栞」

「あなたさつきからうるさい」

スパッと葵に言われて慶は黙った。

「う〜……じゃあ、どっちでもいい」

「へっ?」

「慶お兄様に任せる」

「えっ?お、おう……え?」

「栞、寝る」

そのままソファアの上で寝息を立て始めた。

「………段々我儘になってきた気がする」

「「お前（あんた）が甘やかすからね」

「えっ?そなの?」

2人に声を揃えられて、思わず間抜けな声が出てしまった。

（………にしても任せる、か。一番困るんだよなあ。そんな時は遥に決めてもらおう）

そう決めると慶は遥の部屋に向かった。

*

「おい遥。ちつといいカネ?」

中に入ると、岬と遥の間にカーテンが掛かっていた。

「遙。ちよつと予知してもらつていいか？」

「やだ」

「ダメ」

「やだにダメつてなに!? 悪いけど僕、そんな気分じゃないよ」

「今日の晩飯に刺身カレー出されなくなかつた答えるや」

「……………何の用？」

「いやー栞たんがご飯に刺身かナンが食べたいとか言い出しちゃうもんだから。どっちが栞が喜ぶかな〜って、それで予知してくんない？」

「能力の無駄遣いもいいところだろそれ……………まあいいや。それで出てつてくれるなら」
「あくしろよ」

心底イラツとしつつも遙は予知した。

「……………ナンが78%、刺身が20%」

「残りの2%は？」

「ガララワニだつて」

「捕獲レベル5か……………いや、デツカいのは7か8だっけ？」

お礼だけ言つて出て行くこうとする慶。

「けーちゃん」

「あ?」

岬に声をかけられた。

「ちよつと、来て」

「あ?」

答える間も無く慶は岬に連れて行かれた。で、慶の部屋。

「なんだよ」

「遥と、喧嘩した……」

「あつそ。じゃ、俺飯作んなきやだから」

「聞いてよー!」

「だって俺カンケーねーもん」

「むう……じゃあ、いい」

「冗談だよ。どした?」

「その……私は遥と一緒にアカ姉達の学校に行きたかったのに、遥が黙って全寮制の私立高校を受験してて……それで……」

「あつそ。残念だったな。じゃっ」

「待って! 待ってよ! それだけの!?」

「ブラコンも大概にしろ。じゃっ」

「なーんーでーよー！分かった！iTunesカードでどっ？？」

「OK。お兄ちゃんに任せろ」

で、慶はとりあえず遙の部屋へ向かった。

第78話

「おい遙ー。いるかー？いるよねー？愚問でしたごめんなさい」

わけのわからない挨拶と共に部屋に入った。

「おいいたいたあ。遙、ちよつとお兄ちゃんとお話しようぜい」

「はあ？今度は何？」

「とりあえず、嘘でもいいから岬に謝れ」

「……いきなり何？」

「そうすりや俺が岬に iTunes カード買ってもらえんだよ。謝るくらいいいだろ？
カップラーメン作るよりはえーだろうが」

「やだよ」

「即答かよ。じゃあこうしよう。あいつが拗ねてるのを俺が何とかしてやるから、だからとりあえず謝れ」

「別に僕は岬に機嫌なおしてほしいなんて思っていないよ」

(……なかなか面倒だなコイツ。素直じゃないとかなんというかなんというか) うへつとなる慶。

「あつそ。ならいい。仲直りしなくていいと?」

「うん。そもそも喧嘩してないし」

「了解。岬に『遙はもう一生お前と仲直りするつもりはない』って伝えておくよ」

「は、はあ?!? 誰もそんなこと言っていないだろ!」

「だってそういうことだろ? 機嫌なおしてほしくないって事は、仮に今あいつがお前のこと嫌いとして、そのままでもいいって言ってるんだから」

「そ、それとこれとは違う!」

「じゃあ何? 仲直りしたいの?」

「そ、それは……!」

「ハッキリしろよ櫻田くお前なら言えるはずだ櫻田く」

「お前も櫻田だろうが!」

キャラが段々ブレ始めた遙だった。で、ため息をつくと言語始めた。

「したくない事はないけど……」

「じゃ、謝れ」

「ねえ、さつきからなんなの? 何で僕が悪いことになってるの?」

「ぶっちゃけ言うとお前らの喧嘩なんて俺にとっちゃどーでもいんだよ。俺の目に映ってるのはiTunesカードだけだ」

「最低だね本当に……多分、櫻田家史上ダントツトップで屑だと思う」

「結構。だから、はよ謝れ」

「とりあえず話だけでも聞いてよ」

「断る」

「なんで!?!」

「ゴッドフェスが明日までなんだよ。さっさと終わらせたい」

「まだまだ猶予あるじゃねえか! とりあえずiTunesカードから頭離せ!」

肩で息をする遥。

「で、なんで私立行くことにしたん?」

「聞いてくれるの?」

「聞いて欲しくないなら早く謝れ」

「い、言うよ。別に1人で暮らすのもいいかなって思ったただだよ」

「ふーん。本音は?」

「今のが本音」

「話聞くなって言っちゃったのに嘘ついちゃうのはダメだろ。俺に嘘つくなら声のトーン

とか視線に気をつけろ」

「……………このドチート野郎」

最早完全にキャラが定まってるが、遙は不機嫌そうに語り出した。

「いやなんだよ、岬と比べられるのが」

「あ?」

「双子ってこともあって、岬の能力も分裂だったから、僕も岬の分身みたいに思われることがあってさ」

「まあな。顔似てるし。お前女っぽいし」

「それで、『遙は岬の分身の中で特にダメなやつ』とか言われたりして……………そういうのが嫌なんだよ。だから……………」

「安心しろ遙」

「何?」

「岬の分身の中で一番ダメなのは岬の本体だ」

「や、だからそういうことじゃなくてさ……………。例えば慶兄さんがそう思っても他の人は違う。そういうのが嫌で僕は……………」

「そんなん気にしなきゃいいじゃん」

「はあ?」

「気持ちにはわかるよ。俺は茜どころか兄弟全員と比べられてたから」

「どういう……」

聞こうと思ったところで踏みとどまった。兄弟の中でなぜか唯一能力を持たない兄のことを思ったのだ。

「だけど、所詮他人の評価だ。自分には関係ない。気にするだけ無駄だ。それに、自分の足りない部分は努力して他の部分で補えばいい。俺はそうしてきた」

言われて、遥はハツとした。慶が性格以外完璧超人になったのは能力がないからだと言われた。聞かされてきた。

「なんて、ガラでもない事話してみたりしてな。ちなみにお前が私立の高校行きたいならそれでいいんじゃないの？男には旅立ちが必要だ」

「えっ？さ、賛成なの？」

「おう。ていうか、遥の決めたことに他人がグダグダ口出しすること自体、俺はどうかと思っただけだな。じゃ、後は岬と2人でじっくりこつてもつきり話し合え」

そう言うと、慶は出て行った。数時間後の食卓では、いつものように、仲良く話す遥と岬の姿が見えた。

第79話

ある日。慶が競馬場で大負けした時、携帯がヴヴツと震えた。LINEが来ていた。さつちゃん『暇なら、少し会えるかな？相談があるんだけど』

慶『今、競馬場だから。30分くらい掛かるけど』

さつちゃん『あれ？未成年じゃ無かった？』

慶『バレなきやいんだよ。変装してるし』

ちなみに慶の服装はエウーゴの制服だった。完全に変装のベクトルを間違っている。

さつちゃん『じゃあ、今すぐ来てくれる？』

慶『分かったよ。どこ？』

さつちゃん『いつもの喫茶店』

慶『うい』

返事だけすると、慶はバイクでぶっ飛ばした。

*

喫茶店に到着。

「よう、どーした？」

「その、相談があるの」

「はあ」

「桜庭ライトって、知ってるわよね？」

「ああ。マイエンジェルだろ」

「あ？」

「や、なんでもない」

口が滑った。

「で、そのひか……夜神月がどうした？」

「その、引退、するみたいなの」

「ねえよ」

「へ？」

慶は昨日の夜に光が楽しそうに自分が出てるテレビを見てるのを思い出しながら即答した。だが、正体は秘密にしていることを思い出した。

「あーいや、なんでもない。とにかくねえから安心しろよ」

「な、なんでそんなことわかるの？」

「いつも見てるから」

「いつも見てる……？」

「あつ、いやなんでもない」

「ねえ、けーくんってライトとどういう関係なの？」

いつの間にか、紗千子はものつそい形相で慶を睨んでいた。

「あつ、いや……えつと……し、知り合いだけど？」

「ただの知り合いでもアイドルといつも一緒にいられるわけないわよね？」

「や、それは……」

「ねえ、どういう関係なの？」

目からハイライトが消えていた。

「え、えと……」

「もしかして、付き合ってるの？」

「何その神シチュエーション！」

また口が滑った。その瞬間、ガタツと紗千子は立ち上がった。

「もういい。さよなら」

「えつ、ちよつと何？えつ？何怒ってるの？」

「……………ばか」

そのまま紗千子は行ってしまった。

「……………ごめん、光。お兄ちゃん余計なことしたかも」

*

紗千子はアイドルの事務所的なところに戻っている最中。

「最低……………」

自虐的に言った。今思えば、まだ2人が付き合ってるかなんて分からないし、勝手に決め付けて呼び出しという飛び出てきた。

「どうしよう……………」

ため息をついて事務所的なものに戻った。

*

慶は家に戻った。

「てなわけで、なんで怒らせたのかさっぱりわかんねんだよ」

「あんたが悪いわね」

間髪入れずに葵に言われた。

「え？俺が悪いの？」

「10割とは言えないけどあなたが悪いわ」

「ええ………なんでかさっぱり分からん……」

「まあ分かれとも、謝りなさいとも言わないけど、少しは考えなさい。どうして怒ったのか」

それだけ言うと、慶は葵に部屋から締め出された。

第80話

考えろ、と言われて慶は部屋に籠って考え始めた。

「……………そんなこと言われても、さっちゃんが俺のこと好きってこと以外思いつかねーんだけどなあ」

あっさりとゴールインした。

「……………うーん、どうなんだろうな。いや、実際さっちゃん可愛いし、でもなあ……………彼女に、かあ……………可愛いし、良い子だし……………アリだとは思うんだけど……………でもアイドル彼女だとデートとかできないそうだなあ……………」

しばらく考え込んだあと、彼女持ちに聞いてみることにした。

「と、いうわけだ。修、どうしたらいいと思う?」

「いや、好きにしろよ」

最もな答えが返ってきた。

「いいだろ、ケチケチすんなよりア充」

「いや、だから好きにしろって。お前がさっちゃんのことを好きなら付き合えばいいん

「じゃないの?」

「いや、好きっちゃ好きだけど……」

「なんか曖昧だな。その子とキスしたり手を繋いだり二人きりでどこか出掛けたりした
いかってことだよ」

「いや、向こうアイドルだからそんな暇ないと思うよ」

「例えだつての」

「うーん……そうだな……。あつ、そういえば修つて佐藤さんとどこまでいったの?」

「ぶふっ!なんで俺の話になるんだよ!」

「いや、魔が差して。で、どうなの?」

「どこまでもなにも……健全なお付き合いしてるんだ俺たちは」

「ふうん……じゃあまだセ○クスしてないんだ?」

「してない!というかハッキリ言うな!」

「実際、健全な男子なら彼女に手くらい出すと思うよ俺は。ゴムつければ健全と言える
だろうしな」

「う、うるさい!」

「でもシたいと思ったことはあるんでぞ?」

「そりゃあるよ」

「ならすればいいじゃん」

「そんな『そうだ、京都に行こう』みたいなのでやれるか！さっきの話の続きしないなら出てけよ！」

「えー。じゃあ出てく」

「何しに来たんだお前は！」

慶は出て行つた。

数分後、奏が部屋に入ってきた。

「……………修ちゃん」

「何？」

「さっき、慶と話してたことについて詳しく」

「あっ……………」

当分、解放されないことを予期した。

*

翌日、アイドルの事務所。どうやって慶に謝ろうか、紗千子が考えてると、携帯が鳴つた。

「もしもし?」

『もしもし、さつちゃん?』

「け、けけけーくん?!?何?!?」

なつ、なななななで?!?と、内心怯えながらもなんとか平静を取り戻しつつ、聞いた。

「……ふう、何?」

『や、この前の件についてと、あと告白したいから今度時間取れるか?』

「え?うーん……来週の土曜日ならなんとか……」

『おく、じゃあその日に駅前で』

「分かった。じゃあ、またね」

そう言つて、通話を切つた。ふう……と、一息ついてから、紗千子は「ん?」と声を

漏らした。

「あれ、さつき告白つて言った?」

顔を真っ赤にして倒れた。

第81話

駅前。集められた紗千子は心臓をバクンバクン鳴らしながら待機していた。

(こ、告白って言ってたよね……？それってつまり告白は告白であって告白以外の何物でもないあの告白だよ？好きです、付き合ってくださいだよ？)

そう思うだけで顔が赤く染まっていった。

(うあー！どうしようどうしよう！いやいやいや、落ち着いてわたし。そもそも、愛の告白である可能性は高いけど、確定じゃない。というか、けーくんの場合はむしろ告白である可能性の方が低いよ。そうそう、どうせ「競馬で勝ちました」みたいな告白に決まってるわ。期待しちゃダメよ紗千子……)

自虐的に微笑みながらそんなことを思っていると、「おーい」と声が聞こえた。

「お待たせ。さっちゃん」

慶が奏を連れてやってきた。

「待ってないよ、けーくん」

予想していたからか、大したダメージはない。

「こんにちは。米澤さん」

「こ、こんにちは……」

「悪いな、どうしてもついでにきてきたいとかほごくから仕方なく連れてきちゃった」

「ううん。大丈夫だよ」

「よし、じゃあ行こうか」

「何処へ？」

「え、どこって……あー何処行こっか。二人で落ち着いて話せるところがいいんだけど……」

「ちよつと慶？私もいるんですけど？」

「黙ってろブラコン」

「ぶ、ぶぶぶブラコンじゃないし！」

奏の無理ある否定を完無視して、慶は言った。

「とりあえず、散歩しながらにしようか」

「うん。そだね」

*

そういうわけで、慶と紗千子は並んで歩き、その後ろで奏が二人の様子を見張るよう

に歩いていった。

告白、というより慶が修に相談した内容を知っている奏は、自分がいるだけで告白を防げる、と思っっているようだ。

(まさか、姉の前で告白なんてしないでしょ)

そのオーラを感じ取ってか、紗千子は実に居心地が悪そうなのだが、慶は一人だけ呑気に話し始めた。

「この前の件なんだけどさ、」

「え? う、うん」

「悪かったな」

「へっ!? い、いやいやいや! 悪いのは私だよ! 自分で呼び出しておきながら、勝手に不貞腐れて帰っちゃったんだし」

「葵に怒られてさ、なんでさっちゃんか怒ったか考えてみたんだよね。そしたら、どう考えてもさっちゃんか俺のこと好きなんじゃねーのって結論しか出なくてさ」

「ふあっ!?」

紗千子と奏が声を漏らすも、無視して話を進めた。

「だから、もしそうだとしたら、本当に悪かったって思っ」

「い、いいよそんな! 別に気にしてないし! 謝らないですよ!」

「や、でも」

「謝らないで！恥ずかしいから!!？」

「え、おう」

紗千子が顔を真っ赤にして、慶の両頬を両手で挟み込んで言い、それに若干引きながら、慶は言った。

「ああ、それで二つ目の話なんだけど」

「へ？うん」

「好きだから付き合ってくんない？」

空気が、凍り付いた。

*

櫻田家。葵の部屋。パキツという音が響いた。

葵がコーヒーを飲もうとした時、マグカップの取っ手が折れたのだ。

「……………？」

*

外。修が花と歩いてると、草履の鼻緒が切れた。

「あっ」

「……あの、なんでこの時期にサンダルなの？」

*

公園。遙と岬が二人でベンチに座っていると、黒猫が前を通り過ぎた。

「わっ、黒猫」

「……あ、ほんとだ」

*

茜の部屋。急に何かを感じたように茜は天井を見た。

「な、なに?!? どうしたの茜ちゃん?!?」

「……カナちゃんの霊圧が、消えた……?」

*

土手。

「……………えっ!!?お姉さんの前で!!?」

顔を真っ赤にしながら紗千子は思わず言ってしまった。

「え、ダメ?」

「い、いやっ、そのっ……………空気読んだ方がっ……………」

「えーだっつてついて来るなっつて言っつてんのに無理矢理付いて来たのこいつだけ?俺あ、悪くないぜよ」

気まずそうに、紗千子は奏を見た。超涙目である。

そして、

「覚えてなさいよおおおおお!!?」

三下じみたことを言いながら号泣して逃げて行った。

残された紗千子と慶。

慶はジッと紗千子を見た。

「え、えと……………」

「……………」

「あ、あの……」

「……」

「そのっ……」

「……」

「うわああああああああん!!?」

「えっ、ちよっ」

逃げられてしまった。

「……ふ、振られた……。アイドルに告白して振られた……」
慶は膝を着いた。

第82話

櫻田家。奏の部屋。その中を、岬と遙と修は覗いていた。

血走らせた目を全開に見開き、「エロイムエツサイムエロイムエツサイムエロイムエツサイムエロイム」と延々と呟いてる奏を見ていた。

「……………どうしたの、あれ」

「さ、さあ……………」

「怖い……………妹が怖い……………」

*

一方、慶の部屋。布団の中で頭を抱えて、「ああああ！」と叫んでる様子を、茜、葵、栞が見ていた。

「何……………何事？」

「わかんないわよ……………」

「お兄様……」

*

と、いうわけで、家族会議が開かれた。

「奏と慶が壊れました。何か理由を知ってる人はいない？」

葵が聞くも、全員首を横に振った。だよね……と、葵は深くため息をついた。

「どうしよう……あのままじゃ、二人とも壊れそうよね……」

「ヤバいのは奏の方だよな。なんか呪文唱えてたぞ」

「けーちゃんの方がやばいって。『死ぬ、恥ずかし過ぎて死ぬ……もう死んじやおつか
なー、生きててもいいことないし』とか言ってたよ!?？」

「お兄様、死んじや嫌……」

「いやいや、落ち着きなよ葉。私達兄弟の中で一番、国民に嫌われてても何一つ傷つく様
子を見せずにいたバカ兄貴がそんな簡単に死ぬわけないじゃない。だよね、遥？」

「ちよつ、なんで僕に聞くの」

「そうだよ！遥が占えばいいよ！ほら、能力使って」

茜が言うとう、遥は嫌な汗を額から流した。気が付けば、全員の視線が自分に向いてい

る。

「……………えっ、これやらなきやいけない感じ？僕が？マジで？」

『当たり前じゃん』

全員、声を揃えて言った。これは逃れられない、と早々に思った遙は、目を閉じて能力を発動した。

『櫻田慶が死ぬ確率98%』

直後、遙は慶の部屋に向かって走り出した。

「遙!!?」

「どうしたの!!?」

「なんで!!?」

「けーちゃんに何か!!?」

全員、その後が続いて走り出した。

先頭の遙は嫌な予感と共に慶の部屋の扉を叩いた。

「慶兄さん!!? 慶兄さん!」

「遙、どうしたの!!?」

二番目に早かったのは、茜だ。

「慶兄さんが死ぬ確率が……………98%……………」

「!?？」

直後、二人の後ろの修の姿が消えた。慶の部屋に能力で突入したのだ。

「慶！」

「うーわ、狩られたわー」

中に入ると、慶はモンハンをやっていて、ミラバルカンにやられていた。

修は無言で、後ろから慶の脳天にカカト落としした。

*

「で、どういうことなの? 大丈夫なの?」

葵、修、茜に囲まれて、尋問されていた。

「大丈夫だよ。ちよつと普通に死にたくなってるだけ」

「大丈夫じゃないわよねそれ」

「けーちゃん。なんかあつたの?」

「いや、言いたくない。というか言えない」

「なんでだよ。お前があれだけ取り乱すなんてただ事じゃないだろ」

「いや、言えない」

目を逸らし続ける慶。3人はその反応に顔を見合わせると、頷いた。

「じゃ、奏に聞こつか」

「そだね」

「待て待て待て待って！つてかなんで奏が絡んでること知ってんの？」

「そりゃあ、」

「奏も凹んでるし、」

「同時期に凹んでる時点で、」

「何であの馬鹿凹んでんだよ……」

「で、何があつた？」

修か聞き直した。だが、慶は首を横に振った。

「………言わない」

「あつそ。隣行くぞー」

「行けばいいだろ。多分、奏は俺以上に凹んでるし、答えられねえんじやねえの？」

「ぐつ、こいつ………！また冷静になりやがって………！」

「もう吐きなよ！ボルシチ召喚するよ！！？」

「いいよ逃げるから」

「俺がいて逃げられるとでも？」

「俺が逃げられないとでも？」

直後、慶は窓から飛び降りてバイクに跨って逃げ出し、その後を修と茜が追った。

その様子を見ながら葵は別の方法を思いついた。

(そういえば、前にアイドルの米澤さんの件で悩んでたような……)

ニヤリと笑みを浮かべると、とりあえず葵は光を捕まえに行った。